

会 報 特 別 号

東日本大震災記録集

東日本大震災から十年目を迎える今

ふくしまの 絆 Ⅲ

—我々がつなぐべき思いを—

ふくしまの絆Ⅲ

福島県小学校長会

表紙写真について

「ふくしまの絆Ⅲ」の表紙写真は、檜葉町・広野町に立地するＪヴィレッジを取り上げました。Ｊヴィレッジは、日本初のサッカーナショナル・トレーニングセンターとして、１９９７年に開設され、サッカーのみならず、様々なスポーツのキャンプや研修などに利用されてきました。しかし、東日本大震災直後の平成２３年３月１５日から平成２５年６月３０日までスポーツ施設としては全面閉鎖し、国が管理する原発事故の対応拠点となりました。以降、トレーニング施設としての活動は休止を余儀なくされましたが、平成３０年７月２８日よりようやく再開されました。再開後は、Ｊリーグのチームや「なでしこジャパン」、ラグビーＷ杯のアルゼンチン代表などのキャンプ地となりました。

そして、Ｊヴィレッジは、今年開催される東京２０２０オリンピック聖火リレーの出発地となります。３月２６日のグランドスタートでは、震災の年のＷ杯で優勝した「なでしこジャパン」のメンバーが走り、被災地に勇気と希望を与えてくれるはずです。また、震災から１０年目の日本の姿、そして復興のあゆみを着実に進める福島の姿を世界にアピールする絶好の機会となります。

「ふくしまの絆Ⅲ」発行時（令和２年３月１１日）、東京オリンピック・パラリンピックは令和２年に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で開催されませんでした。上記の「表紙写真について」は、開催予定として記載しています。

会報特別号 ふくしまの絆 Ⅲ 【目 次】

会報特別号の発行に当たって	55
東日本大震災被災地懇談会及び視察報告	56
座談会「疾風勁草」	
東日本大震災、原発事故から１０年目を迎える今 福島県の教育を考える	59
東日本大震災後９年の復興のあゆみ 特色ある取組	73
震災から学び 伝えたい教訓	82
学校再開のあゆみ	107

会報特別号の発行に当たって ～我々がつなぐべき思いを～

福島県小学校長会会長 佐々木 義 通
(当時)



時間が経つのは早く、2011年3月11日に発生した東日本大震災、そしてその後に起きた東京電力福島第一原子力発電所事故から早10年目を迎えました。現在、県内の多くの学校では震災前とほぼ同程度の教育活動ができるようになってきており、震災後に生まれた子どもたちも数多く在籍するようになってきました。そして、あたかも何事もなかったかのような毎日を送っています。「十年一昔」とはよく言ったもので、10年も経つと遠い過去の出来事のように錯覚してしまうのは、人間なればこそでしょうか。すると、我々が「風評の払拭」とともに全国に訴え続けてきた「記憶の風化」は、自らの心の中にも少なからずあるのではと反省をしたところです。

ところが、実際には東京電力福島第一原子力発電所周辺の被災地域にある学校は、未だ地元での学校再開はできず他の地域で教育活動を行っている状況であったり、さらに地元で再開した一部の学校においては、極少人数という状況のもとでの学校運営が余儀なくされたりしています。また、本県では、校長の大量退職や新任校長の増加に伴い、当時の校長が緊迫する中で必死に頑張った記憶が少しずつ薄らいできているのも事実ではないでしょうか。

こうした状況を踏まえ、この度、当時、困難や試練に直面しながらも教職員が強い意思と使命をもって取り組んだ様子を改めて県内の各校長に伝えることで、本県小学校教育の充実に寄与することを願って本特別号の発行を思い立った次第です。さらに、次年度から全面实施される新学習指導要領の下での防災教育等の充実に生かされることへの期待もあります。

本特別号では、まず、今年度実施した被災地の小学校長との懇談会と原子力発電所事故現場等の視察の様子を取り上げました。参加された他県の校長先生方からは、本県教育界への激励とともに、「記憶の風化」を危惧する言葉をいただき、「復興未だ半ば」との思いを強くしたところです。また、県内それぞれの地域で復旧・復興に当たられてこられた校長先生方による座談会では、当時の困難や苦労の状況から得た教訓を語っていただき、まさに「疾風勁草」の思いを共通に抱きました。その他、各支会の9年間のあゆみ、震災から学び伝えたい教訓、そして被災した学校の再開のあゆみも載せましたので、今後、是非自校の教育活動や各校長会等で参考にしていただければ幸いです。

結びに、本特別号の発行に当たり、貴重な情報をお寄せいただいた震災直後の本会会長であられた現二本松市教育委員会教育長 丹野学先生、玉稿をお寄せいただいた先生方、編集等に当たられた県広報部の先生方にお礼を申し上げます。

東日本大震災被災地懇談会及び視察 報告

令和元年11月6日(水)・7日(木)

福島県小学校長会では、東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所事故の甚大な被害、そして、未だにその被害に苦しんでいる現状を把握し、全国の校長会に発信するために、平成26年度から被災地の視察、平成28年度からは他県にも呼びかけ原発視察並びに被災校との懇談会を行ってきた。

6年目となる令和元年度は、「福島の被災地の生の姿を見てほしい」「震災及び原発事故を風化させない」「風評に負けない」という強い思いを発信するために、全国の校長会に呼びかけ、原発視察と被災校との懇談会を実施した。そして、北は青森、南は福岡から1都10県の校長会が呼びかけに応じ、20名の校長先生方が参加してくださった。

本県からは、県校長会の佐々木義通会長を始め、事務局員18名が参加した。さらに、被災校との懇談会では、相馬支会・双葉支会の校長先生方12名も参加し、現状や課題について報告がなされた。

東日本大震災被災地懇談会 (相馬支会・双葉支会との懇談会)



平成31年4月1日現在の双葉地区8町村と相馬地区2市村の現状

- 【浪江町】平成31年3月31日に4小学校が休校、2小学校は避難先(二本松市)で継続。平成30年4月に地元で「なみえ創成小学校」を新設
- 【葛尾村】平成30年4月に地元で学校再開(それまでは避難先で開校)
- 【富岡町】平成30年4月に地元で2小学校が再開(通称：富岡校)
2小学校は避難先で継続(通称：三春校)
- 【楢葉町】平成29年4月に地元で2小学校が再開
(それまでは避難先で開校)
- 【川内村】平成24年4月に地元で学校再開(それまでは避難先で開校)
- 【広野町】平成24年8月に地元で学校再開(それまでは避難先で開校)
- 【大熊町】2小学校は避難先(会津若松市)で継続
- 【双葉町】2小学校は避難先(いわき市)で継続
- 【南相馬市】小高小学校にて4校合同運営による開校
- 【飯館村】令和元年度末に小学校3校・中学校1校閉校。令和2年度4月に義務教育学校として開校予定

学校経営の現状や課題

ICTやテレビ会議システムを活用し、富岡校と三春校との遠隔合同授業をほぼ毎日実施し、交流を積極的に図っている。

ふるさと創造学で、川内村のよさを学習している。地域連携担当教員を活用し、地域との連携を深めている。

極少人数学級の課題解決のため、近隣の学校との合同行事や交流学習を積極的に行って、授業の充実を図っている。



避難の長期化による児童・保護者の心のケアは、これからも大切である。スクールカウンセラーの継続配置と派遣日数の増加をお願いしたい。

教職員の遠距離通勤、教職員の家族別居の問題等、様々な課題を抱えている。避難児童の対応等、業務の多忙化もあり、今後も復興推進加配の継続配置をお願いしたい。



校長会や教育委員会等の関係機関と連携を図りながら、新たな地域づくりと連動した「ひと・もの・こと」の再構築を図りたい。また、家庭環境や家族構成の変化等を踏まえた適切な支援も不可欠である。

被災地出身の教職員や勤務経験をもつ教職員が少ない現状がある。被災地に対する理解をもつ一定数の教職員が、特異な状況を抱える本地域の教育の充実に取り組んでもらう仕組みの整備を要望したい。

視察Ⅰ 東京電力福島第一原子力発電所



平成30年11月30日に開館した東京電力廃炉資料館（旧エネルギー館）で、原発事故の事実と廃炉事業の現状を映像で確認。その後、福島第一原子力発電所に到着。一人一人専用のID付き名札を渡され、金属探知機を通過。さらに、ID名札をタッチパネルにかざし、パスワードを入力し、ようやく中へ。一人一人線量計を渡され、専用バスに乗り換え、約60分の原発構内の視察が始まった。廃炉作業が進む第1号機から第4号機の近くを専用バスで進んだ。ここでの線量計を確認す

ると、一気に200 μ Sv/hも上昇していることに、一同から驚きの声が上がった。汚染地下水をくい止める約1.5キロに及ぶ凍土遮水壁、汚染水を1日約2千トン浄化処理する多核種除去設備（ALPS）、毎日百トン近くのトリチウムを含んだ水を貯めるための貯水タンク等を順次見学した。

原発では、毎日、約4千人が働き、廃炉作業を進めている。廃炉収束までの道のりはまだまだ続く。

視察Ⅱ Jヴィレッジ(楡葉町・広野町)

原発事故に伴い、Jヴィレッジは、平成23年3月15日から平成25年6月30日までスポーツ施設としては全面閉鎖し、国が管理する原発事故の対応拠点となった。以後もトレーニング施設としては活動閉鎖されていたが、平成30年7月28日より部分的に再開。同年9月8日には新しい全天候型練習場の利用も始まった。今回の視察参加者の宿泊場所となり、被災校との懇談会もここで実施した。



視察Ⅲ 浪江町立なみえ創成小・中学校



なみえ創成小学校・中学校は、浪江東中学校の校舎を改修し、小中学校併設した学校として平成30年4月に新たに開校した。

視察では、なみえ創成小学校長 馬場隆一先生に、校舎案内をしていただき、図書館と一体となったメディアルームや人工芝のグラウンド、地域の方たちとの触れ合いの場となるクラブハウスなどを見学させていただいた。

その後、なみえ創成中学校長 半杭千歩先生から、浪江町の状況や「なみえ創成」という新たな学校への想いをご説明いただいた。「子どもたちの生きる力と夢を育み、地域の未来を切り拓く学校」を基本理念として、なみえ創成に集う子どもだからこそ、創り出せる「学び」の姿を熱く語っていただいた。

視察Ⅳ 浪江町立請戸小学校 被災校舎



請戸小学校は、海岸から約300メートルのところにあり、東日本大震災では、一階の天井まで津波に襲われた。しかし、児童や教職員は近くの大平山に避難し、全員が無事だった。

視察では、馬場先生と浪江小学校長 木村裕之先生の案内で、津波に襲われ無残な姿となった校舎や体育館を見学した。また、地震発生後から大平山へ避難するまでの当時の校長・教頭の速やかな判断、教職員の連携体制、児童全員がお互いに励まし合い、頑張って大平山を駆け上がった様子など詳しく教えていただいた。

県外より参加した方々からの感想・応援メッセージ

- ・**全連小事務局からの参加者**：「百聞は一見に如かず」との言葉のとおり、福島第一原発の廃炉作業の様子、大津波そして原発事故により、今までの日常が止まり、そこから復興への道を少しずつ歩まれている皆様の様子を伺うことができました。今まで、校長会でのお話やマスコミ報道等を通して、自分なりに思っていたことを確かめられたり新たに知り得たりすることができました。そして、私は今回の視察を通して知り得たことを、いろいろな形で伝えていくことが私にできることと改めて思いました。

これからの復興の道のりは長いものと思います。しかし、ゴールを目指して私たちは一步一步、歩みを進めねばなりません。そのためにも私たちのみならず、次の世代の中心として活躍する今の子どもたちを育てていくことが、今の私たちの役目であると思っています。その役目を少しでも実現できるよう努めていきたいと思っています。

- ・**青森県からの参加者**：今回は、福島第一原発や被災された地域・学校等を実際に自分の目で見て肌で感じる機会を与えていただいたことに対しまして心から感謝いたします。

テレビや新聞等の報道では、復興がどの程度進んでいるのかがわかりませんでしたが、今回の視察で、被災された地域の現状を驚きと衝撃をもって知ることができました。特に、帰還困難地区については、側道が閉鎖され、沿道の建物もバリケードが張られていました。壁もガラスも壊れてしまった自動車販売店や商品が残ったままの衣料品店を見たときには、原発事故の悲惨さを感じました。また、請戸小学校の被災校舎には、津波の被害の大きさを実感させられるとともに、自分が想像していた以上のものを感じました。

- ・**秋田県からの参加者**：被災校では、限られた教育環境の中にあって、一人一人の子どもたちの確かな育ちにつながるようと、様々な工夫をしながら教育を推進していることに頭が下がる思いです。今学んでいる子どもたちが「ふるさとに育ててもらった」という思いと誇りをもって、将来たくましく生き抜いてほしいと強く願っています。

- ・**埼玉県からの参加者**：「3.11は終わっていない」「風評を許さない、風化をさせない」という福島県の先生方の強い思いに改めて気づかされることばかりでした。今回の視察並びに懇談会で学び得た成果を埼玉県内の各校長へ伝えていきたいと思っています。

日本の未来をつくる子どもたちを信じ抜き、皆様とともに充実した学校経営を貫くことを宣言し、御礼の言葉に代えさせていただきます。

- ・**新潟県からの参加者**：新潟県には、依然として約2,400人もの福島県からの避難者がおられる。その半数にのぼる児童生徒の心に寄り添った支援を行う上で、今回見聞したことは大いに役立ちました。また、大震災の記憶を風化させないことは、子どもたちに持続可能な社会を形成する必要感を高めることにもつながるものと考えます。

- ・**福岡県からの参加者**：「日本の時はわずかししか動いていない」ということを強く感じた。震災から約8年半が経過した今でも原発構内で高線量の場所があり、6号線沿線には壊れたままの店舗や家屋が連なり、家に戻りたくても戻れない方が多数いらっしゃる。その現実から、被災当時とどれだけ変わっているのか。そして、地震・津波・原発事故によってふるさとを奪われた人々の気持ちのことを強く考えさせられた。そのような中、一人一人の子どものために懸命に頑張っている被災校の先生方に敬意を表したい。「福島は復興なくして日本の復興なし」と発信していきたい。

これまでの被災地視察並びに懇談会の経過

福島県小学校長会では、東日本大震災後、本会役員が被災地並びに被災校の現状を把握してきた。平成26年度からは継続して被災地を視察し、そして、懇談会を実施してきた。これまでの経過は、以下のとおりである。

平成26年度 7月：富岡町・楢葉町・双葉町の避難先校の視察

8月：全連小役員とともに葛尾小、富岡一・二小三春校、浪江小・津島小（二本松市）の視察

10月：大熊町の避難先校の視察

平成27年度 9月：小高小、県環境創造センターの視察

平成28年度 8月：全連小役員、岩手・山形・宮城の校長会役員とともに富岡一・二小三春校と原発の視察

11月：相馬支会・双葉支会との懇談会

平成29年度 8月：全連小役員、東北の各県校長会役員とともに、原発と楢葉南・北小の視察

11月：相馬支会・双葉支会との懇談会

平成30年度 6月：相馬支会・双葉支会との懇談会

11月：全連小役員、東北・関東地区、新潟の各県校長会役員とともに富岡一・二小富岡校の視察、並びに相馬支会・双葉支会との懇談会

令和元年度 6月：相馬支会・双葉支会との懇談会

※ 視察並びに懇談会で出された被災校の現状や課題・要望等については、福島県教育庁との教育懇談会等の折に確実に伝え、改善が図られるように強く働きかけてきた。

座 談 会 「疾風勁草」

東日本大震災、原発事故から10年目を迎える今

福島県の教育を考える — 我々がつなぐべき思いを —

□開催日 令和元年11月27日（水）

□会 場 伊達市立保原小学校 講堂

□パネラー

伊達市立保原小学校長 佐々木 義 通 （福島県小学校長会会長）

郡山市立芳山小学校長 吉 川 和 夫 （福島県小学校長会副会長）

会津若松市立日新小学校長 佐 藤 裕 哉

相馬市立日立木小学校長 加 藤 裕 紀

富岡町立富岡第一小学校長 岩 崎 秀 一

いわき市立泉北小学校長 水 谷 大

□コーディネーター

福島市立福島第三小学校長 佐 藤 秀 美

（福島県小学校長会事務局長）



【会長挨拶並びに趣旨説明】

佐々木 東日本大震災・原発事故から間もなく9



年を迎え10年目になろうとしています。この間、県内各小学校にあっては「学校は復興の最大の拠点」の合言葉の下、校長は「安全・安心」を最優先にリーダー

シップを発揮し、復旧・復興に取り組んで参りました。結果、昨年度被災地の5つの市町村において地元での小中学校の再開、さらには各学校では震災前とほぼ同程度の教育活動ができるようになってきました。

しかしながら昨年度末の時点で、県内外に避難されている方は約4万人です。学校にあっては県内外で避難を余儀なくされた子どもたちも含めて、学力の低迷、体育・運動能力の低下、肥満などの健康課題、心の荒廃、いじめや不登校、児童虐待の増加などの問題も顕在化しています。さらに再開した一部の学校では、極少人数という状況が今後も続くといったことが予想されています。

このような中において私たち県小学校長会は校長同士のネットワークを生かし、協力し合って、復旧・復興に努められるようにしてきました。特に県小学校長会では、震災直後に特別部会を設置

し、教育機能の回復に向けての活動、東日本大震災の記録の累積などを行ってきました。そして、その後平成24年4月には「東日本大震災記録集 ふくしまの絆」の発行、そして29年3月にはそのⅡが発行となったことは皆さんご承知のことと思います。また外向きな発信としましては、全連小及び東北連小理事会などで、被災県の状況として特に相馬双葉地区の厳しい現状について訴えてきました。

さらに、本県独自の活動としては、平成28年度から原発視察や、被災地の視察などを行ってきました。その際、東北連小の校長先生方にはご案内を差し上げてきましたが、平成30年度からは福島県隣県の関東まで広げ、それから被災地区とは年2回懇談会をするようにして参りました。今年度は11月6・7日に行いましたが、東北地区の校長会だけでなく全連小からは副会長、さらには福岡・名古屋の校長会からもご参加をいただいて、特に風評、風化の現状について訴えてきたところです。

ところで最近は大量退職、新任校長の増加、それらに伴いまして、当時の校長先生方が苦勞してきたこと、さらにその取組の記憶などが薄らいできているのが事実ではないでしょうか。つまり若手の校長先生方に対し、10年目を迎えようとし

ている今だからこそ、訴えるものがあるはずだと考え、今回の広報の特別号の発行に至りました。

本日はこのような趣旨で、座談会に各地区の代表の皆さんにお集まりいただき、座談会を開催させていただきました。是非各校長先生方がお持ちの貴重な経験を本県の小学校教育の進展、ひいてはこれからの本県の子どもたちのため、熱い思いを語っていただければ幸いです。

【第Ⅰ部】

佐藤秀 本日は二部構成で行います。まず第Ⅰ部



は震災後9年間の現状と課題についてということで、前回の座談会が震災から約6年後に行われましたので、今回はそれ以降のを中心としながら、現在までの期間どのよう

な状況であったのかなどをお話いただきます。第Ⅱ部につきましては、震災から学んだ教訓や震災を風化させないための取組、未来を築く子どもたちを育てる今後の教育の在り方などについて、先生方の思いやお考えを存分にお話いただきたいと思います。

まず富岡第一小学校の岩崎先生お願いします。

岩崎 原発で被災しています双葉郡8町村の現状



について、お話いたします。震災前は17校ありましたが、震災後6年を過ぎ、現在14校となっています。そのうちの7校が地元に戻

った再開、あと7校が避難先での継続再開という状況です。地元に戻って児童数100人を超えているのは広野小学校のみです。次に多いのが楡葉南・北小学校で、各々80名くらい、川内小学校が30数名です。他の浪江小学校、葛尾小学校、富岡第一・第二小学校富岡校は全校生20名弱です。したがって1学年1名から3名の極少数で学校運営を行っているわけです。これから先の見通しですが、まず今年度末に浪江小学校が、令和2年度末には津島小学校が、令和3年度末には富岡第一・第二小学校三春校がそれぞれ休校になります。ますます学校数が減っていくという現状があります。それに伴って、2校を兼務する校長もおります。たとえば楡葉の南・北小学校は1名の校長で運営していますし、校

長数がどんどん減っていくという状況です。

それから、なかなか難しいのは双葉郡出身の管理職者が非常に少ないということです。双葉郡の小学校は他管内からおいでいただいている校長先生方のお力を借りて教育活動を行っている現状です。

佐藤秀 双葉郡の厳しい状況についてお話をいただきました。校長も世代交代がどんどん進んでいきますが、まだまだそういう厳しい状況にあるということをこれからの若い校長先生方に伝えていく必要があると思います。

では続いて、日立木小学校の加藤先生お願いします。

加藤 私は平成24年に、飯舘村の飯樋小学校



へ新任教頭として赴任しました。その年は川俣町にプレハブの校舎を建てて、草野・白石・飯樋小学校3校で移転した時で、3校の教職員で、常にどうやったら一つの学校として成り立っ

ていくのか、ということを考えていました。

その時、様々な支援をいただきました。中でも出前授業がとても充実していました。例えば南極の昭和基地と学校を結んで、子どもたちに昭和基地の隊長さんとお話をさせていただきました。この福島から14,000kmも離れている方とお話ができて、南極の様子を知ることができました。

それから、飯舘村は子どもが真ん中の教育「まideaな教育」を進めていましたので、移転当初はプレハブ校舎が、腰板であったり、教室や廊下・階段は鉄板むき出しだったのが、どんどん木を貼って素晴らしい校舎へと変わっていったように、施設だけでなく様々な面で子どもたちのことを親身に考えて取り組んでいました。

飯舘村は多くの子どもたちが避難してしまったのですが、私が行った2年目の時には全国学力調査でよい成績を収めて、県の方からも「どうやったの、実践を出してください。」と聞かれたこともありました。

生徒指導面でも、赴任した1年目は、子どもたちも保護者の方も心に不安を抱えていて、相談の電話があると、1時間から1時間半くらい話を聞くことも度々ありました。しかし、親身になって子どもたちのことを考えて対応することによって学力が向上したこともあって、2年目はそういっ

たことも一切なくなりました。

現在の相馬の状況ですが、飯舘村は、来年度から義務教育学校となるため、現在9年間の教育課程を作成中だということです。小高区4小学校は小高小学校で現在教育活動を行っていますが、バス通の子が大半で、体力向上が非常に課題だとのこと。そして最後に磯部小学校ですが、町の大部分が流されてしまい、当時200名位いた児童数が現在35名まで減っており、学校がなくなったらもう人が消えてしまうのではないかとという状況なのだそうです。まさに「学校は復興の最大の拠点」という役割を担っているという現状です。

佐藤秀 2年目に学力が向上した、それから生徒指導面でも問題が少なくなったということです。その原因をどのようにとらえていらっしゃるのですか。

加藤 子どもたちもよく頑張ったのですが、教職員がすごく一つにまとまっていたからだと思います。川俣に避難しているにもかかわらず、小教研の相馬地区の算数の授業公開の研究校ということで、その当時の校長 和田節子先生が絶対川俣で公開すると断言されました。先生方は最初「避難してるのにやるのですか。」ということを経験しましたが、話を聞いて、「絶対やる。」ということで、職員の心が一つになりました。確かに避難していますが、研究することで、子どもたちに学力をつけるのだというように、少しハードルを上げたことが、効果につながったのではないかと思います。

佐藤秀 未曾有のピンチの中、先生方の思いが結集してそれが子どもたちの学力面でも生徒指導面でも活かされていったということですね。

次に泉北小学校の水谷先生、お願いします。

水谷 いわきは非常に広いので、2011年の3.



11の被害の状況が、都市部、山間部と、太平洋沿岸部の被害は全く別物です。私がその当時勤めていた豊間小学校では、今お話いただいた日立木小学校の加藤

先生とバディでした。私が校長で、加藤先生が教頭、一緒になって汗をかきかき豊間のあたりを駆け回っていたことを思い出しました。今、加藤先生のおっしゃられたことをものすごく身にしみて感じているのは、苦しかった時の方が、物的な環境はなかったけれども、ソフト面で心的な、ものすごく高まる環境にあったのではないかと、今の

お話を聞いて全く同感に思いました。

豊間小学校は太平洋沿岸部に位置しています。当時の就学援助の対象者の割合は5割以上でした。バスに乗っての通学を余儀なくされていた子どもが、96%でした。ほとんどの子どもたちが6年間通学路というものを知らずに過ごしました。そういう子どもたちと今の私のところの子どもたちとは違うということをまず分かっていただいて、豊間小学校の変容ぶりをお話させていただきます。

豊間は当時、机一つ分くらい地盤が沈下しました。そこに津波が来たので、世帯数で言いますと豊間地区で70%、薄磯地区で85%ぐらい津波被害を受け、ほぼ壊滅と言ってよい状況でしたので、通学路は心配で歩かせられないため、小学生も中学生もバスで通わざるを得なかったのです。

今は小学校の後ろの40m位の高い山を半分切り崩して新たな土地を作りました。その土地と被害にあった集落の土地を「換地」と言って、交換し合って多くの方が移りました。一時的に災害公営住宅に入った方々も現在は高台に移るか、自分でアパートを借りるかして自助努力で生活できるようになってきたというような状況で、ほとんどの児童生徒が徒歩で通学できるようになってきました。

学力、体力がどうなったかということですが、体力は一時的にぐっと落ちました。そこで、「豊間アカデミー」という7校時目のコマを作ってPTA主催で、体育や習字や英会話、体操などいろいろな授業を行いました。そのおかげで学力も向上しました。これから1ポイントずつ上げていこうということで取り組みました。4年目に後任の校長先生に聞いたら、NRTの結果が3年前と比較して10ポイント上がったとのことでした。それは7校時目授業の成果もあるだろうし、先ほど加藤先生がおっしゃられていた、苦しかったハングリーだったという時、子どもも親もコミュニティも先生もものすごく上のベクトルに向かう力が起こっていたこともあると考えています。

佐藤秀 加藤先生、水谷先生のお話を聞いて、いずれも極めて困難な時に先生方が知恵を絞って、正に最適な対応をみんなで模索していたことがわかります。そして、校長先生方のリーダーシップがあり、さらに地域の力もありと、教育の本質をうかがうことができました。

加藤 豊間小学校では、地区小教研の国語の公開

を行いました。駐車場もあまりない中でしたが、小さい空き地を借りながら、何とか公開できました。その当時、水谷先生だったのですが、たくさんの先生方が集まる国語の公開をもってこることにこだわっていました。結局、300人以上の先生方が集まり、全学年を公開しました。先生方は、3つの学年ぐらいの公開でよいのではという中、水谷先生は全学年の公開にこだわっていました。先生方のハードルを高くすることで、結果として豊間小の子どもにとってはよい効果を生んだようです。

水谷 そういう中で豊間小が小教研の発表をやり切れたという力の源は、何だったのかと考えた時、困難な時こそ、知恵や工夫が生まれてくるものだという事例の一つだったと思います。

佐藤秀 続いて中通り、郡山の芳山小学校、吉川先生をお願いします。

吉川 私は東日本大震災が発生した当時、市役所隣のニコニコこども館にある総合教育支援センターに勤務していました。

今回の機会をいただいたので、当時のことを振り返ってみました。結論から先に言うと、震災直後あるいは震災後の前半は、「安全」というキーワードになるように思います。そして、後半は今も含めてですが「安心」というキーワードになると思います。

震災直後、郡山市の方針で入学式や卒業式、学校再開に向けた対応などは、校長会と教育委員会が一緒に考え、実践していました。郡山市は広いので、市内中心部など放射線が高い所もあれば、会津に近い湖南地区など、線量も低く被害がほとんどなかった所もあります。そのような違いはありましたが、震災直後はすべての校長を招集し、それぞれの校長の意見を聞きながら、教育委員会の施策を進めました。したがって、入学式も校舎や通学路などの関係から例年より一週間遅らせました。被害のほとんどなかった湖南地区も同様に入学式を一週間遅らせました。このように郡山市では、全体として同歩調で進めたことが特徴的なことだったと思います。

さらに、震災直後に市と教育委員会と市医師会とで、プロジェクトチームを組んで、子どもたちの心のケア・体のケアに当たりました。それは、今でも続いています。そんな中で、「安全」と「安

心」は違うのだということを思わせる保育園の保育士の話があるので紹介したいと思います。放射線量も下がり、表土除去をして、外での遊び「3時間ルール」なども解除されたにもかかわらず、ある保育園の子どもが庭に出て、土をさわっていました。すると、室内にいた別の子が「先生、あの子、お庭の土をいじっています。土をいじるのは悪い子なんだよ。」と先生に言ったということです。本来土に親しんで遊ぶ子どもたちであるべきなのに、先生はその言葉を聞き、心を痛めたそうです。家庭の不安を反映したこの言葉に、「安全」と「安心」は違うのだと痛感させられました。

それでは、「安心」を得るためにはどうしたらよいのでしょうか。郡山市で行っていることを紹介したいと思います。まずは、現在も続けていることですが、運動能力や生活習慣の調査を1年生から6年生まで市内すべての子どもたちに実施しています。調査結果からは、肥満の問題や運動能力の低下などがしばらくの間、指摘されていました。しかし、次第に改善傾向が見られてきています。次に、安全対策のために校舎の耐震化工事を進めており、これも「安心」につながってくると思います。さらに、給食の食材検査や全食（まるごと）検査を実施しており、検査限界値以下の厳しい設定のもと、現在も安全な給食の提供を進めています。

今後も大きな課題となってくるのは、この「安心」をどう担保するかということだと思います。保護者の中には、まだ不安をもっている方もいます。大丈夫だと言いながらも「安心」までつながらない保護者もいます。「安心」のあとに来るのは、「風化」だと思います。郡山市で継続して行ってきたこれまでの対策は、今後も長い期間続けていかなければならないと強く思っています。

佐藤秀 吉川先生からは「安全」と「安心」というキーワードで郡山市の取組をお話いただきました。吉川先生にお聞きしますが、「安全」と「安心」を定義付けるとしたらどのようなになるでしょうか。

吉川 「安全」は目に見える対策で、「安心」は目に見えないものだと思います。それでは、目に見えない「安心」をどうつくっていくかということですが、それは震災直後から一貫して続けている対策をこれからも続けていくことだと思います。

100%安心ということは、ないのかもしれない

せんが、少しでも100%に近づくような安心して学べる環境づくりに力を尽くしていきたいと思っています。

佐藤秀 「安心」には、長い時間が必要で、継続が大切だというお話をお聞きしました。改めて各学校で行っている給食検査などの取組の重みを実感させられました。

それでは、次に会津地区、日新小学校の佐藤先生よろしくお願いします。

佐藤裕 会津も大きな揺れに見舞われましたが、津波などを受けた浜通りの地域と比べたら、大したことではありません。



しかし、会津地方でも風評被害は大きかったと思います。たとえば、修学旅行

で会津へ来る学校が少なくなったり、農作物の売り上げの低下があったりしました。また、新潟との県境にある沼沢湖では、線量が高いこともあり、3年前までヒメマスを探ることができませんでした。

会津でも地震というより、原発事故の影響が大きかったようです。当時、喜多方では農業科というのがあって、農業の学習をしていたのですが、すべて作物は1kgごとに線量を計って安全性を確かめてから食べていました。また、学校の校庭も線量が高い所があったので土を入れ換えたりしました。湯川村の教育長さんが自らスコップを持って、学校の線量の高い所を掘っていたこともありました。そんな教育長さんの姿を見て我々も頑張らなければならないと思いました。

さらに、子どもたちの体力面の低下が見られました。特段、運動制限をしたわけではありませんが、県平均や全国平均から見ると下回っている状況です。これは会津地方全体の課題だと思っています。

会津に避難している大熊町の熊町小学校と大野小学校については、旧河東第三小学校での開設となりました。震災当時には363名の児童が在籍していましたが、現在は11名で、極少数人数での教育活動が進められています。現在、2022年度を目途に大河原地区に新校舎を建設し、地元での再開を目指しています。

会津若松市内の学校との交流をしたり、会津ならではの行事などを積極的に取り入れたりしながら、充実した教育を展開しています。熊町・大野

小学校の阿部裕美先生が、会津若松市教育委員会をはじめ多くの会津の方々の支援に感謝の言葉を述べていらっしゃいました。

今後、地元での校舎再開に向けて準備が進んでいるというお話を伺い、一日も早い再開を願うところです。

佐藤秀 会津地区の状況をお聞きしましたが、浜通りだけが被災地ではなく、今回の東日本大震災とそれに伴う原発事故は、福島県全体が被災地なのだというのを改めて実感させられました。そして、そういう中にあっても会津に避難している大熊町の小学校に対して、会津若松市教育委員会をはじめ多くの先生方が支援している話も聞かれ、素晴らしいことだと感じました。

先日の新聞に大熊町の新しい学校建設のことが記事として書かれていました。それによると学校を「多世代が学ぶ拠点」にしたいということでした。みんなで知恵を出し合って、魅力的な学校を作り上げようとしているのですね。

避難している学校への支援という話がありましたが、双葉郡の学校の中には、今だに避難している学校が7校ある状況ですが、地元との協力体制という点ではどうだったのでしょうか。岩崎先生、いかがでしょうか。

岩崎 避難先の学校では、子どもたちは自分の家を失い、アパートや仮設住宅、復興住宅などから学校に通ってくる状況でした。その時、先生方はこうした子どもたちをどうしようかと考えることに必死で、外に目を向けることができる状況ではありませんでした。

しかし震災後5年が経つと、子どもたちにとって「ふるさと」が避難先なのか、浜通りなのか分からなくなってしまいう状況になりました。ふるさとを二つもつことになってしまったからです。

そこで、先生たちは外に目を向け始め、避難先の様子を調べたり、避難先の近隣の学校との交流を始めました。

一方、富岡町に戻った子どもたちは地元のことを全然知りません。先生方も知りません。ゼロからのスタートです。昔の富岡町のことを知ることも大切ですが、より大切にしたいのは、今、富岡町は復興に向けどのように進んでいるのか、復興に向け立ち上がっている人やその人の思いを子どもたちに伝えたいと思っています。そうすることで、子どもたちが将来生きていく上での糧になるに違いないと思っています。とにかく地元に戻っ

た学校では、地域とつながった教育活動を推進していこうと考えています。

佐々木 岩崎先生、「ふるさと創造学」について紹介していただけないでしょうか。

岩崎 震災直後に発足した「ふるさと創造学」は、自分たちのふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持ち、そしてふるさととはどういうものなのかを知ろうということからスタートしました。ですから、避難先でふるさとのいろいろな方々を呼んで、自分たちが生まれたふるさととはこういうものだというのを学習しました。それが「ふるさと創造学」です。

しかし、最近は変わりました。子どもたちは地元の復興状況を知り、今のふるさとは、どんな方向に進もうとしているのか、どんな町にしようとしているのか、そこに関わっている人はどんな人でどんな想いをもっているのかを調べます。そして、それを踏まえ、自分たちには何ができるのかということを考える学習に変わってきています。

佐藤秀 私も「ふるさと創造学」のサミットに何度か参加させていただきました。その時に、富岡一中の女の子に「ふるさと創造学を学習して、あなた自身が一番変わったことは何ですか。」と尋ねた時、その女の子は「富岡町がすごく大切な町だと思えるようになりました。大好きになりました。」と答えてくれました。その後、ふるさとをこんなふうにしたいという子どもたちのアイデアが出てくるような学びの姿が見られました。

こうした双葉郡の「ふるさと創造学」の取組から、私たちは多くのことを学ばなければならないと感じました。

水谷先生にお聞きします。双葉町の学校は現在もいわきに避難していますが、いわきの校長会として双葉郡を支援しているとお聞きしています。具体的に教えてください。

水谷 ハードの支援としては、学校施設をお貸ししていることがあります。

また、陸上競技大会を双葉町や檜葉町と一緒にやったりすることもありました。

佐藤秀 今まで先生方のお話をお聞きして浮かんだ言葉があります。それは、「疾風に勁草を知る」という言葉です。困難や試練に直面した時にはじめてその人の強さを知ること。強い風が吹いた時に立っている草。それが本当に強い草だということがわかる。まさにそれぞれの地区で先生方が英知を結集して子どもたちへの固い信念を胸

に頑張ってきたからこそ、今があるのだと思います。

佐々木 お話をお聞きして感じたことを申し上げたいと思いますが、その前に、今回の座談会を開くに当たり、現在、二本松市教育委員会教育長の丹野学先生にお会いしてきました。丹野学先生は、震災後平成22年度県小学校長会会長だった方です。私は、当時の様子や校長会の対応などについてお話を伺ってきました。震災当時のことについては、4点にわたってお話されました。

1点目は、とにかく学力が低下したということです。そのことは子どもたちに本当に申し訳ないと思っているということでした。

2点目は、当時は大変な学校もあればそうでない学校があったので、あまり被害のなかった学校の先生をボランティアで被害の大きな学校に行かせるようなことができないか、いろいろ模索したのですが、そういうシステムは結局できずにもどかしさを感じていたということでした。校長会としてチームワークを生かした対策が取ればよかったと思われたとのことでした。

3点目は、丹野先生は当時福島第四小学校の校長で、隣接する福島市教育実践センターに相馬地区の校長先生たちが20人くらい配置となったということで、それぞれの校長先生たちは、自分の携帯電話で子どもの居場所確認などを行っており、一人の携帯通信料金は月額相当な額になったはずですが、その額を厭うこともなくしっかり対応していた校長先生方は立派だったということでした。

4点目は、とにかく当時の被災地の校長先生方をはじめ、職員の方々は決して愚痴をこぼすでもなく、朝早くから夜遅くまで、一生懸命頑張っていた姿が印象に残っており、苦情や要望などにもしっかり対応していた姿が素晴らしかったということでした。

さらに、当時を振り返って校長会あるいは校長として何が必要だったかをお聞きしたところ、2点お話していただきました。

1点目として、校長は地域との関係性をつくらなければならないということでした。それがなければ復旧・復興はあり得ないとのことでした。

2点目として、県校長会は県教委との関係性もしっかりつくっておき、パイプを太くしておかななければならないということでした。そして、各支会にあっては、市町村教育委員会との関係性をつ

くることがとても大切なことだと思うとのことでした。校長会としての取組はネットワークを生かすことが大切で、事務局としては、マンパワーを活用することも大切だということです。ある教育長さんから「あなたたち校長は、とにかく見に行くことだ。」と言われ、チームを組んで双葉や会津に足を運んだとのことでした。そして、感じたことは、それぞれの支会で助け合って復旧・復興に向け努力をしていたということだったそうです。

最後に、情報がなくて学校は何ができたのかということについて2点話されました。

1点目は、とにかく子どもを守ること。そのためにみんなが一生懸命やっていたということです。

2点目は、地域と協力すること。地域と共に子どもを守ることが大切だということでした。

以上、丹野学先生から震災当時の校長会や校長の様子についてお聞きしたことを紹介しました。

これまでの座談会での話や丹野学先生の話を受けて、私が感じたことをお話しします。

1点目は、岩崎先生の話にあったように、福島県は震災ばかりでなく、原発事故が加わっており、特殊な中にもさらに特殊な状況なのということ踏まえる必要があると思います。まだまだ復旧・復興にたどり着いていません。それにはものすごい時間がかかるのだと思います。今の子どもたちが生きている間でさえ、終わらないのではないかと思います。そうした現状を踏まえ、風評・風化に対しては、今後とも双葉地区や相馬地区からの情報を得ながら、校長会として強く発信していくことが大切だと感じています。

2点目は、震災当時、学力低下・体力低下が見られました。しかし、福島県の先生方は何もしなかったわけではなく、よく頑張っていたということです。先ほど豊間小では、震災直後下がった学力も震災後確実に学力向上が図られてきているという話が出され、感心させられました。

3点目は、吉川先生の話で、「安全」は目に見えるもの、「安心」は目に見えないものということがありました。郡山市は、「安全」そして「安心」を得るために、震災直後から校長会と市教委、市医師会が連携して動いていたことが素晴らしいことだと思いました。未だに保護者の中には不安を抱えている方もいます。これらの不安を解消して安心につなげていくことが校長あるいは校長会の責任であり役割だと思いました。

最後に、会津の佐藤先生や富岡の岩崎先生から話がありましたが、避難先でも地元でもそこにいる校長同士が連携を取り合って、他から来た方たちを快く迎え入れている姿が素晴らしいと思いました。さらに、それを踏まえて自分のふるさとを知っていこうとする「ふるさと創造学」などの取組も素晴らしいと思いました。

第Ⅰ部では、それぞれの地区のこれまでの現状をお聞きしましたが、それぞれ違うのだということとを改めて認識するとともに、今だに復旧・復興に向け動いているのだということ、そしてその動きを止めてはいけないのだということ強く感じました。大変意義のあることだったと思います。

【第Ⅱ部】

佐藤秀 第Ⅱ部は、「震災から学んだ教訓、または震災を風化させないための取組」、併せて「未来を築く子どもたちを育てる今後の教育の在り方」について未来志向で校長先生方のお考えをお聞きできればと考えております。

後半はまず、吉川先生お願いします。

吉川 「風化」させない取組。先ほどの「安心」ということがありましたが、「安心」というのと「風化」というのは非常に境界が難しいところだとは思いますが、そういう意味ではご紹介したいのが、郡山では医師会と、教育委員会と校長が一緒になって、「郡山物語」という本を編集したということです。これは、医師会や、市、教育委員会とか、学校の現場の取組を収録して残すことで風化を防ぎ、次世代に教訓を語り継ごうという意図で発刊しました。

それから、子どもたちが震災から学んだことについて、道徳の副読本資料という形でまとめた「未来を拓く心のブック」という、小学校版と中学校版と市民版というのがありまして、それぞれ、震災から学んだこと、それから震災から得たものというようなテーマで詩や作文を募集し、応募作の中からいくつかをここに載せました。今でも各学校では道徳資料あるいは子どもたちの学びの資料として使っています。

子どもたちはこの震災でいろんなことを学んだと思いますが、ただ一人で乗り越えたわけではなくて、多くの大人たちや、仲間と一緒に乗り越えてきたのだなということをこの文面から読み取ることができました。これは先生方にも言えることで、先生方もそれぞれが頑張り、一緒になって様

様な困難や課題を乗り越えてきました。厳しい状況の中でも助け合い、励まし合ったことによって支えられている自分とか生かされている自分に、私たちも子どもたちも気付いてきたのかなと思います。

ここで、副読本の作品を紹介したいと思います。はじめに小学校3年生の「つよさ」というタイトルの詩です。

つよってことは
まけないってことじゃない
つよってことは
なかないってことじゃない
つよってことは
まけてもあきらめないこと
つよってことは
なくてもまたわらえること

子どもの心の動きだとか震災や事故によって一人一人が辛い思いをしたけれども、乗り越えてきたことがよく分かる文章かなと思います。

次に5年生の作文です。「ぼくの気持ちが変わった時」というタイトルです。

小さな風とともに大きな地震が起きた。地面がものすごくゆれた。

津波がざぶんざぶんと町におそいかかるのをテレビで見て、すごくこわいと思った。その様子は言葉では言い表せない。たくさんの命が目の前でうばわれてしまったから。さらにその後起こった原発事故。ぼくたちは外で遊ぶこともできなくなった。

この日からぼくの気持ちが変わった。家族は何よりも大切なのだと。家族だけでなく、ぼくたちをひなさんさせてくれた登校班の班長、家の人が来るまで見守ってくれた先生、食べ物に分けてくれた近所の人たち。たくさんの人に支えられ、はげまされて、ぼくたちは過ごさせてもらっていることを知った。

ぼくも支えてもらい、支えていけるようになりたい。
(抜粋)

この言葉の中には子どもたちが私たちに投げかけている大切な学びがすごく多いなと思いました。

最後、葛尾村から郡山市に避難してきた3年生の作文です。「おひっこし」というタイトルです。

かつらお。わたしはかつらおという村にいた。しぜんがいっぱい、空気がとってもきれい。森の中のキャンプ、パーベキュー。ほいく園とようち園と小学校、みんなつながっていてとってもなかよし。
ある日、地しんがおきた。ガタガタガタ。たてに

ゆれたよ。物が落ちてきたよ。外へにげたよ。

「こわいよう。」

「お母さんに会いたいよう。」

いっぱいいないた。こわくてこわくて、しかたがなかった。みんなお母さんにむかえに来てもらった。おばあちゃんの家へおひっこしをした。わたしはホッとした。

夜、ねているとよしんがきた。ねてもねてもすぐおきてのくりかえし。何日も何日もよしんがつづいた。今、思い出しても胸がドキッとする。ドキドキ、ドキドキ、ドキッとする。

こおり山におひっこしをした。また、おひっこしをした。こおり山はいいところ。友だちがいっぱい。やさしい人がいっぱい。でも、でも、でも……。かつらおに帰りたい。かつらおにおひっこしできたらしいな。

非常に、子どもたちの本当の心の中が見える作文だと思います。これが、風化させないための一つの大きな記録で、私たち校長も含めて活用していきたいと思っているところです。

佐藤秀 震災の中で子どもたちはいろんなものを失ったわけですが、そこから大切なものを学んでいるという側面もある、また、そうした記録をしっかりと次代につないでいくことが大事だというお話でした。

では、続いて佐藤先生、お願いします。

佐藤裕 私は、体験を通して学ぶというのは大切だと思います。例えば、いわき海浜自然の家到会津から出かけて行って浜の様子を見るとき、あるいはコミュタン福島を使っているいろんな知識を得るとき、また、新しく開館する東日本大震災原子力災害伝承館なども活用して、会津から出かけて行ってその地区の方々の苦労とか、大変な思いを学ぶことが大事だと考えています。

会津も、農家の方々の風評被害について、身近な方々の苦労話を伺うようなことを学校教育の中で取り上げていくことが、震災を風化させないことかと思っています。

佐藤秀 会津でも意識的に学ぶ機会を設けていくことの大切さが校長先生のお話の中にありましたが、具体的にどのようなことでしょうか。

佐藤裕 いわき自然の家へ行って、その帰りあちこち、浜の様子を見たりということで帰ってきました。すごかったという子どもたちの思いがあったし、我々が意図して大変なことがあったことを忘れないようにしていくことが大事だと思います。

す。他には、近隣に農家の方を呼んで例えば柿農家などは風評被害を受けて本当にひどかったもので、どういう風な苦勞をしたかとか、どういう風に立ち直ったかなどについては社会科や総合で勉強していくことが大事だと思って取り入れています。

佐藤秀 佐藤先生の話をお聞きしてしまして、新しい学習指導要領総則の中に「災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」が位置付けられたことを思い出しました。東日本大震災などを背景として総則に盛り込まれた意義は大きいと思います。やはり福島県だからこそ、しっかり指導していかなければならないと思います。

佐藤裕 会津の中でも、地区と連携して防災避難訓練をする学校も出てきました。土砂災害とか洪水などもあるので、震災の教訓を生かして、そういう取組というのもしょずつ増えてきているところですよ。

水谷 風化させないためにという一つの事例で、阪神淡路大震災や新潟県中越沖地震が起こった時、3年後から5年後には必ずPTSDを発症するというデータを、我々は知っていたということです。だから福島県は緊急カウンセラーをすぐに派遣しました。つまり、阪神も新潟もデータとして後に残せるものは残しておこうという取組がしっかりとされていたから我々もそれを生かし切ることができたのです。

自分の学校にもPTSDの子どもたちがいました。その時私たちは、Post Traumatic Stress からPost Traumatic Growth といういわゆる心的外傷後ストレス障害から、心的外傷後成長に換えるという手法を学んで、日常の授業の中で、様々な取組をしました。フラッシュバックして海馬に焼き付いた記憶の上に、取材をして、この町でこの土地で一体何が起こって、どんな人がどんな風に汗を流してきたかを知ることによって正しい記憶を海馬に上書きさせていくのです。そうすることによって、PCのデータがそうであるように、なくなりはないけど、下のデータが見えなくなる、いわゆるそれはPTSDのフラッシュバックを防ぐことになり、PTGに繋がっていくのです。こうした取組をいわき支会では何年も掛けてしてきました。

また、校舎については中学校が流されて、小学校しか残ってないから一緒に生活するしかない。

そうすると、45分と50分の授業はどうやってやるか。チャイムは鳴らさないようにしよう。運動会で同じ校庭、同時に使いたいけれどどうするのか。プールの深さは、小学校は90cmだけど、中学校は110cmだから、手がプールの底をすってすりむけてしまうだろう。どうやって使うのか。それらの問題に対して、いろいろ知恵を絞ってそれらを解決していきました。その解決した方法は一つ一つ、アーカイブして括ってあります。それを使っていただくことはもちろん可能です。

もう一つは、いわゆる未来を築く子どもたちを育むためには一体、我々に何ができるのかという話ですけれども、佐々木会長さんが、丹野学教育長さんの話を引用されて、あの当時は先生方もすごく頑張っていた。地域もそうだけど先生方も本当によくやっていたと言ってくれました。あとは、秀美先生も「疾風に勁草を知る」と言いましたけれども、みんな勁草だったと。風雪に耐えて足を踏ん張って、首を押さえつけられてももう一回はい上がって歩こうとしていたと。漫画でも私たちの年代の星飛雄馬とか今の子どもで言う「ワンピース」のルフィとかだっても負けても負けても立ち上がっていく勁草です。つまり、そういう子どもを我々が創っていく仕組み、仕掛けを作っていくことでしょ。

アメリカの心理学者のアンジェラ・リー・ダックワースという人は、GRIT（グリット）というのが必要なのだと言いました。生きていく力というのは、アメリカではグリットと言いますが、今はアメリカの海兵隊やOECDの教育プログラムにも採用されています。グリットを頭文字を訳すとG（ガッツ）R（レジリエンス）I（イニシアチブ）T（テナシティー）、全て粘り強いという意味です。同時にグロスマインドセットという考え方をスタンフォード大学の先生が述べています。簡単に言うと、できない人間なんていない、一生懸命頑張れば誰だってできるのだという考えです。グロスマインドセットとグリットを子どもたちに培うような教育課程を我々は工夫していけばいいというのが私の感想です。

佐藤秀 水谷先生からは、心のアーカイブというものを大事にしていく必要があるのではないかと。さらに、あの困難を乗り越えてきた我々だからこそ、強い子どもたちを育てる仕掛けを今こそしっかりとやっていくべきだろうと、3.11を経験したからこそ、それができるはずだという力強い

エールをいただきました。

岩崎 双葉地区は特異な地区でして、先生方の異動サイクルが早いのです。ですからアーカイブをどう伝えていくかということが大事になってくるのです。

また、双葉郡出身の管理職が圧倒的に少ないですから、他管内の校長先生方のお力を借りて双葉郡の学校経営をしていくのですけども、やはりこの学校に勤める先生がその町のことを知らなかったら、教育はできないということだと思います。

震災を風化させないために私がずっとやってきたことは、4月の1日に、職員会議をすぐやらないで、小中の先生を全部集めて研修会を開くということです。そこで、この町は一体どういうことがあったのかということを伝えます。職員に富岡町民は私一人しかおらず、加えて震災当時は富岡第二小学校に勤めていましたので、当時のことも分かっています。ですから次のようなことを話すのです。震災当時から何があった町なのか、避難先でどんなことがあったか、三春で再開した学校はどんなことがあったか、地元でどういう思いで戻ってきたか、地元でこの2年間どういう学校づくりをしてきたか、それから、ここにいる子どもたちだからこそ防災、放射線教育が大事なんだということで、どんな取組をしてきたかということ、心のケアのやり方も伝えています。このようなことを先生方に分かってもらってから、子どもたちに向き合ってもらいたいと考えています。ですからそういう記録をたくさん残しておいて、それを歴代の校長に繋いでいって、職員会議の前に富岡町というのはこういう町だったということを伝えてほしいと思っています。

また、三春町にある三春校はあと2年で閉じるので、6年生の総合学習の時に私が授業に入って、「三春校はあと2年間で無くなります。」と言いました。子どもたちは驚きます。続けて「では、君たち、この総合学習で何をやる？」と問いかけると、「この三春校の歴史を残したい。」という答えが返ってきました。そこで、三春校に関わった方たちすべてにインタビューして、それを動画にとって一つのDVDに残しました。「ぼくたち私たちの三春校」です。三春校の跡地は更地となります。全部更地になって思い出が全部無くなるから、その前に記録を取っておこうということです。

さらに、三春校の時もそうでしたけど、富岡校

の時にも、物が無いので、私は先生方に、「校長先生、〇〇がないからできません。」という考えではなくて、「どうやったらできるかって考えましょう。」と言ってきました。最近は何々だから…って先生方は言うんです。こうこうこうだから、その次に「だから何？その先を考えるのが我々の仕事でしょう。」ということ話をします。意識改革というようなことをやっていく必要があると思います、今進めているところです。

佐藤秀 岩崎先生ならではの取組ですね。どういう町、どういう経緯で今あるのかということをやんと残す、伝えるということ、それから子どもたちにも風化をさせないための仕掛けですとか、先生方をポジティブな思考に変えていくような働きかけが伝わって参りました。

では、続いて加藤先生、お願いします。

加藤 子どもたちの未来を切り拓くということで、相馬市と本校の取組を紹介したいと思います。

未来を切り拓くためには、まず命を落とさないことが第一条件です。今回台風、そして大雨がありましたが、来年度以降もこうした気圧配置というのは、起こってもおかしくないような気象条件になってきています。ですから防災教育、特に風水害では、震災の経験と今回の経験を生かしていかなければならないと思います。

また、相馬市では避難訓練の時には市の指導主事が、実際に訓練を行っている所に出向いて、客観的に見て指導してくださいます。

それから、今年の夏初めて「子ども科学フェスティバル」を開催しました。科学実験や防災、福島イノベーション・コースト構想など、行政、各企業、NPO団体、みんなで力を合わせて子どもたちのために行いました。みんなで力を合わせると低予算でも大好評でした。来年度も行うということで、学校、地域、保護者、そして官民一体となってそうしたものを創出していくことは、まさに復興の起点になるのではないかなと考えています。

最後に日立木小学校の取組ですけれども、今、校舎の長寿命化改修工事を行っております。それほど児童数が多くない学校なので、引っ越しをして空いたところから工事をしていき、4割くらいは使えるようになったのですが、大きな工事の音の中でも子どもたちは非常に落ち着いています。私は日頃からピンチをチャンスに変えるということで、そういった時だからこそみんなで「気付き

考え 行動する」というスタンスで行こうと子どもたちにも全校朝会で話しています。

教職員ですが、日立木小は生活・総合の研究校ということで研究を進めています。震災で経験した逆境には負けないんだという気持ちで、みんなで工夫して地道にやっていくという姿勢で取り組んでいます。

佐藤秀 加藤先生からは台風との関連も踏まえられながら、命を大切にする防災教育のお話とともに、魅力ある教育を続けていく上で、予算獲得のための働きかけも大切なのだなと考えさせられました。

また、イノベーション・コースト構想に向けて子どもたちの夢を膨らませることも我々の大きな役割なのではないかと思います。

先ほど岩崎先生から放射線教育のお話がありました。放射線教育で私が危惧をしていますのは、福島原発ですから子どもたちは「フクシマ」というものをずっと背負って生きていかなければならないということです。

震災後、福島市の中学生と水俣市の中学生が1年交替で交流するという活動を行っていました。水俣も「水俣病」というだけで非常に悪いイメージをもたれてしまったのと同様、将来福島の子どもたちがいわれ無き偏見や差別を受けるということも考えられると思います。

岩崎先生、富岡の学校では放射線教育をどのようなねらいで、どのように行っているのですか。

岩崎 福島県以外の人たちは福島のことを知らないです。福島で原発事故が起こった。だから福島は今大変な状況になっていると考えています。会津も中通りも浜通りも関係ないです。全部ひっくるめて福島なのです。

今ここにいる子どもたちは将来ずっと富岡にいるわけではありません。将来、高校、大学、社会人になった時に県外に出ているかもしれません。県外で新しい会社に入りました。新入社員の歓迎会です。お酒が入りました。必ず出てくる話に「どこ出身。」と言われた時に「うん、福島だよ。」と言ったとして、「大変だったね。」と言う人もいれば「えっ 福島。」と言う人もいます。そしてなおかつ「福島って放射線汚染地域でしょ。」とか「福島の食材って食えるの。」とか、中には「福島の食材は私は食べません。」と言う人もいます。その時に黙ってしまうような人間をつくってはいけないということなので

す。

特に富岡は。「福島のどこ。」「富岡、えっ、原発の近くですよ。」と必ず言われるわけです。その時にいろいろ質問された時に黙るような子どもに育ててはいけないというのが放射線学習のスタートでした。

ですから第1・第2ステージと考えていて、第1ステージでは放射線の基礎情報を学びます。第2ステージは「福島って大丈夫なの。」と聞かれたことに対して答えることのできるような学習をしなくてはならない。即ち風評被害、風評差別に対抗するだけの知識をもたせなくてはならない。小中までにそうした知識を身に付けさせましょうということで今は第2ステージ、人権教育とか道徳教育とかにつながるような放射線学習を進めているところです。

吉川 郡山の場合で申し上げますと、放射線教育は教育課程に位置付けられることが明記されておりまして、全学年、総合であったり理科であったりしますけれども必ず取り入れることとなっています。前段に特化して放射線教育だけ取り出して、どういう風に各学校で取り組むのかということについては全ての学校でそれぞれに生かされています。中身はというと、先ほど岩崎先生がおっしゃったように「正しい知識をもちましょう。福島県民だからこそ正しい理解をしましょう。知識を得ましょう。」ということが大きな目的です。

少し話がそれるかもしれませんが、震災直後に埼玉県に郡山から避難した方のお話を聞いたことがありました。埼玉県のスーパーに入ったら、〇〇産いくらというお米の札があり、それだけ見れば秋田県産なのだなとか他県産という風に思っただけなのですが、福島県産の米は撤去されたということを知った時に、とっても悲しい思いがして、福島県は差別されているんだと思ったということでした。正しい理解をしていれば福島県産の米は実は一番安全だということが分かるのですが、先ほど岩崎先生がおっしゃったように福島は危ないとなったら全てが危ないのです。それを埼玉に避難された方が悔しさをにじませておっしゃっていたのを思い出しました。

佐藤秀 会津の方ではいかがですか。

佐藤裕 会津でもやはり「正しく恐れる」ということで、各学年指導の時数を2時間は確保しています。土壌の線量がそれほど高くなかったため、教員の危機感が少し低い所があるので、放射線教

育の重要性を言い続けていくことが必要であると考えています。

佐藤秀 未来を築く子どもたちを育てる今後の教育の在り方ということで、だんだん終わりの方に入っていきたいと思いますが、皆さんから東日本大震災と原発事故を経験した福島だからこそ未来を育てる子どもたちにこれだけは身に付けさせたいということを、お一方ずつ話していただきたいと思います。

水谷 私は、除染マニュアルが国からおりてきた時に、見てびっくりしました。

大変重みのあるマニュアルでしたが、明日にでもプール開きを行いたいけれども、読み込むまでに1週間も10日もかかるマニュアルでした。でも頑張って読みました。そして高圧洗浄機でプールサイドを洗いました。金網も洗いました。しかし線量は全然落ちませんでした。コンクリートは多孔質ですから穴の中に一粒でも放射性物質が入っていれば、20年30年と放射線を出すわけです。ディスクグラインダーを買ってきて、教頭と二人でお月様が出るまで1週間プールサイドを削りましたが、それでも線量は下がりませんでした。最後は鉄板を敷いて、封じ込めました。

こんなに厚い除染マニュアルには書いてありませんでした。自分で考えました。ですから私たちが残していけるのは、その9年間で学んだ子どもたちを守るための最新の知識を、アナログでも電子でも、できるだけ簡潔に使える物として残していくことが必要なのではないかと思います。

あともう一つ。先ほど岩崎先生がおっしゃったように、陽転発想で、苦しんだ人こそ、工夫すればできるという発想ができるのです。新学習指導要領でも、「やり抜く力」として使っているではないですか。これからの教育課程の中で我々は「やり抜く力」をどうやって身に付けさせていくかということで、具体的なプランづくりに入っていけばいいのではないかなと思います。

佐藤秀 自分で考えていく。まさに今求められている力ですね。そしてそれを「やり抜く力」と、この二つが子どもたちにとって大切なのではないかというお話でした。

続いて加藤先生いかがでしょうか。

加藤 「気付き 考え 行動する」という考えは重要だと思います。困難は本当に大変だと思うのですが、この10年福島県民はこれでもかこれでもかというふうに関んなことに対応しながら、

くじけずに取り組んできて、積み重ねてきました。ですからこの取り組んだことを子どもたちにきちんと、風化させないように知らせるということがとても大事であると思います。

佐藤秀 加藤先生からJRCの態度目標とも重なる「気付き 考え 行動する」ということであつたり、子どもたちに伝えていくことの必要性であつたり、本質を見抜く目を育てたいというお話を伺いましたが、そのためにはまず教職員の意識を変える必要があるかと思うのですが、加藤先生だったらどのように教職員に働きかけていけますか。

加藤 私は、先生方の自主性というのを大事にしてきました。日立木小学校の職員はしっかり判断して行動しているので、自信につながるのです。やりたいことを思い切ってやれるようなそんな学校づくりを、責任は自分がとるからという安心感を持たせながら取り組むことだと思います。

佐藤秀 続いて佐藤先生お願いします。

佐藤裕 第I部の方で会長さんから地域との関係性とか、地域との関わりが大事であるというお話がありましたが、私もとても大事だと思います。

また、熊町小学校の校長先生がすごく感謝していたのはその関わり方の部分でありがたいと、我我会津の者が関わった部分に対してなのかと思うのですが、子どもたちもそんな時どういう風に他者と関わるかということは、やはり学校の中だけでは難しい部分があつて、地域の中で学ぶということが大事だと思います。

それで、今小学校でもコミュニティ・スクールが始まったのですが、地域を巻き込んで学校の中で育てていくというお話を聞いていて大事な視点だと思いました。

佐藤秀 今、会津ではコミュニティ・スクールに向けての取組が始まっているわけですね。

吉川先生いかがでしょうか。

吉川 今回のこの震災、原発事故もそうですが、子どもたちから見たら全ては大人たちが関わっていることだと思うのです。そういった意味では大人の責任として、あるいは教師として責任をもつために今やることというのは、先ほど来申し上げている安全・安心な環境を作っていく、子どもたちのために安全で安心な学びの環境を作っていくことが私たちの大切な役目であると思っています。

併せて子どもたちも、これから大震災や原発事

故から考えていってほしいと思うことは、先ほど「やり抜く力」という言葉も出ましたが、自分で安全・安心の環境を作っていけるような、子どもたちを育てていくことが大切だと思います。子どもたちが主体的に動くためには我々も主体的・自主的に目標に向かって動いていく姿を子どもたちにも見せたいし、大人になった時、自らそういう環境を作っていくんだというような子どもたちを育てていきたいと思っています。これは学校教育全体を通じてやっていく必要があると思っています。

岩崎 双葉郡の実態を考えますと、極少人数の弱点というのがあります。これはやはり同年代の子どもたちとの切磋琢磨ができないということ、人数が少ない故にお互いの考え方が阿吽の呼吸で分かってしまうということです。あとはいろんな意見に触れることが少ないということと、自分の意見に対して肯定する人、否定する人、自分以外の考えを發表してくれる人、そういう意見に触れることが非常に少ないということです。我々が富岡の子どもたちに育てたい力というのは、多様な考えを聞いて、まずはそれを受け入れて、自分の考えをもって、そしてそれを分かりやすい言葉で相手に伝えていくという力だと思っています。

学校内だけでは教育は完結しません。マンパワーが足りません。だったら地域の力を借りようという発想です。地域の方といっても多世代です。ですから今取り組んでいるのは多世代教育です。様々な年代、職業の方に学校に入ってもらって、いろんなことを子どもたちと一緒にしていく、または子どもたちの前で自分の思いを語っていただくとか、いろんな考え方に触れさせます。

それから、同年代が少ないからどうするとなった時に、近隣の学校に行くしかないと考えました。檜葉の学校に3・4人の子どもを連れて行き、一緒に授業を受けさせます。で、もまれてくるんです。そういう経験も絶対に必要だろうと思います。しかし何回も行うことは難しいので、次に考えたのがテレビ会議システムを使った遠隔授業です。ライブ授業と言っていますが、同年代同士で、お互いの意見交換をそのライブ授業を使って行います。最近では45分間つなぎっぱなしにはしません。自分たちの考えをもたせた後、テレビをつないで意見交流をするという遠隔授業をやっていると思います。

他に富岡でやっているのは、その道のプロを呼

ぶことです。教室を一つの作業場にします。去年大工の棟梁さんをお願いし、富岡町の松の木を使ってテーブルを2つ作ってもらいました。釘を一本も使わないテーブルです。親方が来て作業をしますが、親方は何も教えません。子どもは何やっているんだろうと見ます。興味があるから親方の手伝いを進んでやります。そのうちに親方の道具の手入れとか、後片付けまでが仕事なのだというのを親方が見せるのです。背中で教えるということです。この取組は子どもたちに大きなインパクトがあったようです。今年は油絵のプロを呼び、油絵を描いてもらおうと計画しました。子どもたちは画用紙を持ってその先生の所に行くわけです。その先生は教えてと言われれば教えます。

また、富岡の場合は県外の学校ともつながります。小学校は東京都にある学校とライブでつながっています。12月に2泊3日で向こうの学校に5人の子どもたちを連れて行き、1日交流させて一緒に授業も受けさせました。そういうことをさせることによって先ほどお話しした、いろんな考えを聞いて、自分で考えて、自分の考えをもって発信することのできる力を双葉郡の子どもたちに付けさせたいと思っています。

佐藤秀 極少人数の中で、無い物ねだりをするのではなく、その強みを最大限に生かしていく。そのために、まず発想を転換していろんなことに取り組まれているという事例をご紹介いただきました。

加藤先生が以前に勤務されていた、3校が仮設校舎で学んでいた、飯樋・草野・白石小学校、私も何度か拝見させていただいたことがありますが、「立派な仮設校舎ですね。」と言ったらある先生が「これが本当の校舎だと子どもたちには思ってもらいたくないんです。」とお話しされたのが印象に残っています。でも、閉校式の時に6年生の女の子が、「6年間通った自分たちにとって、ここは『仮設』なんかじゃない。」と言ったと聞きました。子どもたちにとっては、そこで過ごした時間は決して「仮」の時間ではなく、「本物」の時間だったのです。あの中で子どもたちは確かにあの時一生懸命だった先生方と一緒に、いろんなことを経験して、たくましく育っていると思うのです。そこから私たちも学ばなければならないんだということを、先生方のお話を伺いながら、私自身改めて実感させられました。

佐々木 はじめに、二本松市の丹野学教育長さん

に、「最後我々に向けて何かお話してください」とお願いしたところ、二つお話しいただきました。

一つ目は、校長は、地震があった時いつ避難するのか、ということをお問われました。その覚悟を今の校長先生方はもっているのでしょうか。働き方改革の名の下に、逃げていないのでしょうか。そういう学校経営のスキルを学ぶところが校長会だというお話でした。

二つ目の、今後の学校ではということでは、リスクマネジメントとクライシスマネジメント、日本語に直すと危機回避能力と危機管理能力と言いますが、危機回避能力も大切ですが危機管理能力が今問われているのではないかと思います。これは校長もそうですが、子どもたちに育てていく必要があるのではないかと思います。自分はその当時多くの方々を学校に受け入れ、様々な要望も伺ってきました。その時にそうした要望・苦情に目を向けてやるのが校長の一番のことかと思ったのですが、まず子どもたち一人一人に目を向けることが校長ではなかったのかと私は思うということでした。そして、皆さんからお話があったように、前向きに生きる子どもたちを育てることが校長の仕事だろうとお話してくださいました。

私から、最後にキーワードとして8点のことをお話しし、まとめとします。

1点目は「風化」です。風化させないための取組として、郡山の方では本を作ったり児童の作文を載せた記録集を作ったりしていることを伺いました。アーカイブの話もありました。会津では学ぶ機会を設けている、双葉ではふるさとを子どもの心に残しているということでした。そのような取組によって、教員の心にも子どもの心にも残さなくてはならないと思います。福島だからこそ風化をさせないようにしていかなければならないということです。

2点目は「子ども像」です。先ほども出てきましたが困難に遭っても、乗り越えられる、頑張る、粘り強くやり抜く、そういった子どもが私たちの目指す子どもなのでしょう。

3点目は「教師像」です。前向きな姿勢、頑張る姿勢、そして自主性・主体性を育まなければならない。それが校長の仕事だと考えています。そしてそうした教師の姿を子どもに見せることが大切だということです。

4点目は、「危機への対応」です。これは校長

だけでなく子どもも危機への対応ができなくてはならないということです。命を落とさない。「安全・安心」といった言葉もあったかと思います。そのために、校長としてできることがあるのではないかと思います。

5点目は、「連携」です。市町村との連携、保護者との連携、教員同士、校長との連携、多世代にわたっての連携など、そうした連携をしっかりとしていかなければならないということです。

6点目は、「風評」です。放射線教育の話もありました。風評に負けない子どもに育てるために、しっかり知識として子どもたちに教えてあげないと福島の子どもたちはかわいそうだということです。

7点目は、「双葉から学ぶ」です。今、極少人数、それから「ふるさと創造学」など、様々なことを教えていただきました。そして、こういったことをやはり双葉だけで留めておかず、県全体、全国へ配信することも、今の我々の責務というか責任なのではないかなと感じています。そしてそれを学校経営に生かすことだと思います。

最後は「覚悟」です。これについては、説明は我不想と思います。

佐藤秀 皆さん、本日は貴重なお話、ありがとうございました。



東日本大震災後9年の復興のあゆみ 特色ある取組

福島 放射線教育推進校研究会を終えて

福島市立平田小学校 校長 星 正明

本校は、福島市教育委員会より放射線教育推進校として指定を受け、令和元年10月9日に市内各校から150名を超える先生方にご参加いただき研究発表会を実施した。

ここ平田地区は、吾妻の山々に囲まれ、一級河川の濁川、広い信夫野には広大な田畑が広がる自然豊かな地域である。本校の児童は、豊かな自然と歴史に育まれた人情ある地域の人々に囲まれて伸び伸びと育っている。今回、放射線教育の推進にあたり、本校の児童の状況を把握したところ、児童は大震災や原発事故についての直接体験やその記憶はほとんどなく、8年前の震災・原発事故の爪跡は、児童の周辺では現在ほとんど見られなかった。放射線について「発電所の爆発で飛んできたもの」「体にたくさん入ると悪いもの」等の知識はもっているものの普段は放射線のことをほとんど気にせずに生活しているのが現状であり、平田地区はずっと以前からこの豊かな自然や田畑が続いていると思いがちだ。しかし、ずっと以前から豊かな自然のままに見えるのは、そこに多くの人々が関わり、多くの課題に向き合い、多くの苦労を重ねて改善・工夫してきたからだ。

今回の研究は、「今」の児童に、8年前の「現実」を知り、この児童を育む郷土である平田地区や福島市、福島県の「今」を理解し、「未来」へ向かう気持ちをもたせること、そして多くの情報飛び交うこの情報社会の中で、自ら考え、判断し、行動できる力を付けること、それこそが放射線教育を進めることの意義であり大きな使命であることを全職員が共通理解することから始まった。そこで、指導する側の教職員や児童がより放射線を身近に感じるための方策として様々なワークショップへの参加、語り部の方のお話の聴講、環境再生プラザの出前授業、コミュタン福島の見学などを実施した。これらは、放射線を正しく捉えるために役立ったばかりか、様々な活動の様子



身の回りにあるものの放射線測定

を保護者や地域の方々にお知らせすることにより、平田小学校が放射線教育にどのように取り組んでいるかを知っていただく機会となり大変有効な手立てとなった。

今後も研究を通して見えてきた課題をしっかりと引き継ぎ、『放射線について理解し、自分事として考え判断し、行動・発信する子どもの育成』を目指していきたいと思う。

伊達 ふるさと「伊達」の未来を担う子どもたちのために「伊達は一つ」

桑折町立醸芳小学校 校長 高野 孝男

校長会伊達支会は、福島県小学校長会の「学校は復興の最大の拠点」という信念に基づき、東日本大震災・原子力災害以来、「伊達是一つ」を合言葉として深く胸に刻み、学校、家庭、地域が一体となり、未来を担う子どもたちの教育活動の充実のため、我が地域「伊達」の復興に貢献してきた。

1 復興に向けた校長「会」の姿勢～「伊達是一つ」校長同士が一枚岩となって～

復興・充実の取組に際し、最近4年間の時々の会長は、会員に対しそれぞれキャッチフレーズを示してきた。平成28年度伊藤好幸会長は、「チーム学校」を示し、学校課題の共有と課題解決のために魅力的な組織目標を設定すること。平成29年度岡崎一也会長は、「伊達是一つを合言葉に新風を」を示し、校長会の組織充実のため一人一人が新風を巻き込む意気込みをもつこと。平成30年度中野茂会長は、「校長会の役目は、伊達是一つ。そしてチーム学校へ」を示し、教育改革や人材育成にチャレンジすること。そして、令和元年度高橋孝会長は、「主体的な学びに向けて」を示し、新学習指導要領の全面実施へ向けた校長の役割と「チーム学校」の大切さを改めて訴えた。そしてこれらを踏まえた実際の取組の様子は、まさに伊達地区の校長同士が一枚岩になって取り組んでいることに他ならない。

2 少子化の加速による学校の統廃合と校長のリーダーシップ

本地区は大震災以降、少子化が加速度的に進み、それに伴い、学校の統廃合も急激に進んだ。平成24年度には、小坂小、藤田小、森江野小、大木戸小が統合し国見小に、平成29年度には五十沢小、富野小、山舟生

小、白根小、大枝小の5校と梁川小が統合した。令和元年度には、富成小が上保原小に統合した。令和2年度には月舘小、小手小が小中一貫校「月舘学園小学校」として開校する予定である。学校の統廃合は、地域の方々の思いも様々で状況がことごとく異なる。しかし、その学校で学ぶ子どもたちへの教育を充実させることは、統合に関わるすべての人々の共通の願いである。こうした負託に応えるため、本校長会では、先進地区の視察や研修会を実施し、統合の有無に関わらず全員で研鑽を積み、そこでのリーダーシップの在り方を追究してきた。現在も校長同士学び続けており、また統合した学校における学校運営上の大きな問題は出ていない。

○ むすびに

令和の時代を迎え、新たな教育課題に対しても伊達支会は、常に「伊達は一つ」の志で一枚岩となり、ふるさと「伊達」の未来を担う子どもたちのために邁進していく。

安達 ほんとうの空のもと安達太良山に抱かれたふるさと安達の地を愛する心を育てる

二本松市立東和小学校 校長 八巻 博之

安達支会においては、大震災に伴う甚大な被害は少なかったものの、原発事故後の風評被害により、観光業や農業分野への影響は深刻なものでありました。一方で、浪江町の全町避難による町役場機能の移転や避難児童生徒を受け入れた経験から、「学校は復興の最大の拠点」として進むべき道を確認することができました。それは、遠く離れた浪江の地に寄せる望郷の念と復興への思いを見聞きするたびに、ふるさとへの誇りと愛着を育む教育が復興への出発点になるという思いにほかありませんでした。

二本松市東部の山間地域に位置する東和小学校は、平成22年に旧東和町の7つの小学校を統合して誕生した学校で「走る東和、漕ぐ東和」のスローガンのもと、学習や運動に積極的に取り組んでいます。学区内の4つの行政区では、「幡祭り（木幡）」「あばれ山車（針道）」「東和ロードレース大会（太田）」「羽山のリンゴ（戸沢）」など、伝統やスポーツ・文化、産業に地域を挙げて取り組んでいます。風評被害もあり、規模が年々縮小する傾向にありました。6学年の総合的な学習の時間では、「ふるさとを愛する 自己を見つめる」のテーマのもと、開校時より「地域の人々の生き方に視点をあて、地域で暮らす人々が協力し合って生活していることに興味をもち、課題を見付け、主体的に判断し、問題の解決を図り、自己の生き方について考える」学習を行ってきました。平成30年度からは、「地域のよさを見つめ、それに気づき、外部に進んで発信する」視点を加え、復興に向けてふるさとのPR活動に取り組んでいます。

発信① ふるさとPRのためにパンフレットを作成し、ロードレースの出場選手や修学旅行先（会津若松市）で観光客に配付し、東和地域のよさを県内外に発信する活動

発信② 東和地域の職業体験を通して自己の将来について考えたことを、実際に職場体験でお世話になった事業所の方をお招きして、「将来の夢を語ろう会」として発表する活動



東和ロードレースでのPR活動

東和地域では、孫世代と離れて暮らす高齢者も増え、子どもたちの交流を心待ちにしているそうです。また、自ら歩んだ人生を振り返り、その生きざまを知ってもらえることを、大変喜んでおられます。

本活動を通じて芽生えた将来の地域の創り手としての思いがあります。それは、先人の努力や苦勞に共感できる心、四季折々の自然の中でたくましく生き抜いてきた先人を誇りに思える郷土愛なのです。

郡山 東日本大震災後9年の復興のあゆみ

郡山市立芳山小学校 校長 吉川 和夫

3月11日、東日本大震災及び原子力発電所事故は、私たちに未曾有の被害と大きな教訓を残した。

郡山市においても、震災直後から校舎や体育館等の被害、その後のかつて経験のない低放射線下における厳しい生活を余儀なくされることになった。直後から各学校、子どもの安全・安心、命、そして未来を守るための取組が始まった。この取組の基本的な考え方は、現在も変わっていない。

1 震災直後の対応

- 臨時校長会議の開催（3月12日～4月4日までに計6回。その後も必要に応じて随時開催）
ガソリン不足の中での会議は厳しいものがあつたが、日々、増え続ける課題に対応するため、市

教育委員会と校長会が一緒になって対応を考え、実践していくことの重要性から実施された。このことにより、校長会が一致団結して課題解決にあたる環境ができていったと感じた。共通理解のもと、共通実践しお互いに補い合いながら対応することは、災害対応時に不可欠であると思う。

○ 震災後子どものケアプロジェクト（関係機関・団体との連携による学校への支援）

市、市教育委員会、郡山医師会が連携して、子どもたちの心と体の健康を守るために発足した。室内運動講習、カウンセリング、子育て相談、読み聞かせなどの活動を計画的・継続的に実施した。

2 市教育委員会、校長会、各学校での継続的な取組

○ 「安全」から「安心」へ

安全対策の取組を継続させることが、安心な環境につながっていくものと考え、以下のような震災直後からの取組を現在でも継続している。

通学路放射線マップの作成、希望者に対して個人積算線量の測定、給食の食材、一食まるごと検査、市内小中学生全員を対象とした体力・運動能力調査、市内児童の作品を集めた未来を拓く心のブックの活用（震災や原子力発電所事故を後世に語り継ぐ資料）、鳥取市小学校長会と交流による情報発信と、子どもたちの交流など。

現在では、学校教育活動（運動会、プール、校外活動、給食など）震災前の当たり前に戻ってきている。安心を得、風化を防ぐためにも、共通実践による安全対策を継続していくことが重要と考える。



給食食材検査、一食まるごと検査

岩瀬 震災復興のあゆみとふるさと学習の推進

須賀川市立第二小学校 校長 正木 義輝

本支会では、震災により小学校2校の校舎が使用できなくなり、隣接校や公共施設を借りて教育活動を再開したが、校舎が再建され自校で授業が始まるまでに4年余りを要した学校もある。また、原発事故により放出された放射性物質への保護者の不安から、運動会の半日実施や公園などでの野外学習の自粛など、屋外での活動を制限せざるを得ない状況となった。現在は校庭の表土除去や通学路の汚染物質の除去が完了し、屋外での活動が震災前と同様にできるが、幼児期に屋外での活動を控えた保護者が多かったこともあり、体力・運動能力の低下や肥満傾向児の増加など、今でもその影響が続いている。

震災の被害状況により、校長は学校経営上の難しい判断を迫られる場面が多くあった。校長会としては、各学校の状況を把握して情報を提供するとともに、対応を協議し各学校の実践につなげてもらうことに重きを置いて活動した。また、放射線に対する保護者の不安の解消に向け、保護者対象の放射線講座の実施、校地内の表土除去や通学路の放射線量の軽減対策などを早期に実施するよう、連合PTAや関係機関とともに教育委員会に要望してきた。さらに、風評被害が拡大し本県児童生徒へのいじめや差別が問題となったことを受け、学校において人権教育を一層充実するように努めてきた。

人口減少・高齢化問題は本支会でも同様であり、特に山間部では急速に進み、地域コミュニティの維持が難しい地区も出てきた。須賀川市では「ふるさと学習」の推進を重点施策に定め、これを受け各学校では、地域の祭りや行事への積極的な参加や、従来は地域が担ってきた伝統芸能の継承を地域住民の協力のもと行うなど、地域人材を活用した教育課程を編成している。また、新興住宅地にある学校では、住民の絆を深める目的で始めた祭りに、学校が積極的に関わり参加する取組も行われている。本校では、ふるさと須賀川の歴史を学んだ6年生が、須賀川を紹介するパンフレットを作成し、修学旅行先の日光東照宮で配付した。その際、これまで学んできた英語を試すべく外国人旅行者へも配付した。この活動が、まちづくりへの参画意識を高める貴重な機会となったことを、児童の作文から実感できた。

これまで学校は、学校教育の充実を視点として地域との連携を考えてきたように思う。しかし、新学習指導要領が求める「社会に開かれた教育課程」の推進は、教育活動の充実にとどまらず、学校が地域づくりを担う一員として役割を自覚し、地域と「win win」の関係で連携・協働することを求めていると考える。地域の実情や課題に目を向けた特色ある「ふるさと学習」を教育課程に位置付けることが、児童のふるさと創生への参画意識を醸成し、「学校を核にした地域づくり」の推進につながるものと考えている。

石川 防災教育・災害対応についての取組

玉川村立玉川第一小学校 校長 渡邊 良一

「ヴンッ ヴンッ ヴンッ・・・」聞き覚えのない携帯電話からの音。「んっ？」と思ったとたんの激しい揺れ。校舎からの「みしみし」「ぎしぎし」の音に恐怖を感じた。夢中で子どもたちを校庭に避難させるも、繰り返される余震で校舎が大きく揺れる様子やガラスが割れる音に呆然としていた。

様々な震災対応、原発事故対応がそこから始まった。本地区も地震による被害は甚大なものであった。校舎や体育館の壁の崩落、ひび割れやゆがみ、大量のガラスの破損、校内設備の損傷や転倒、物品や文書の散乱等々、半年以上その影響が残った学校もあった。原発事故では、事故当時の天候が影響したのか、本地区の放射線量は高いほうではなかった。それでも、その影響は大きなものであった。当時、常に考えていたことは二つ。一つは子どもの心身の健康、安心・安全の担保、もう一つは正常な学校運営や教育活動、学校生活の再開だ。それに向け各学校では被災の状況に応じ自校でできる最良の対応・対策を考え、それを実施した。また当時、生活の復旧・支援、原発事故等の情報は不確かなものや噂も多く、その信頼性を確認することも重要な作業だった。その時、関係機関や近隣校との情報交換、相互協力が非常に役立ったことも記憶に残っている。

その震災から9年が経過し、最近その頃のことを少しずつ風化しているように感じられる。また現在の6年生でさえ当時は就学前の子どもであり、震災の記憶もわずかしかなのが実状だ。そのような中、校長会研究で本支会は「防災教育や自然災害への対応」というテーマで研究を進めることになった。私たちは震災を教訓に、自らの命を自ら守ることができる子どもを育成することをねらいとした。そして「災害遭遇の場面で自ら危険を予測・察知し、対応を判断し、回避行動をとることができる」このことを目指す子どもの姿とした。そして、防災教育を特別活動や総合的な学習の時間で計画的に扱ったり、各教科・領域に関連づけたりして、教育課程にしっかりと位置付けることを共有し、実施してきた。また、各種活動の中で、子ども自らが考え、判断し、行動する場面を意図的に設定し、災害時の予測・判断に役立てることも行った。さらに将来、広く他の場所で生活する可能性がある子どもたちに多種多様の災害や防災について、漏れなく学ばせることも大切であることがわかった。

ここ最近「想定を超える」「〇〇年に一度」「観測史上初」等の自然災害が立て続けに発生している。異常気象はさらに多発する恐れもある。子どもたちの将来の安全を考えると看過できない状況である。子どもたちに自分の命を自分で守る術をしっかりと身に付けさせなければ、と改めて思うこの頃だ。

田村 東日本大震災後9年の復興のあゆみ

田村市立要田小学校 校長 平塚 裕二

○平成23年3月11日 田村市立古道小学校、岩井沢小学校児童約140名が被災。

3月12日 原発事故により田村市都路町が全町避難。

4月1日 旧石森小学校（田村市船引町）を仮校舎として都路町の小学校2校（古道小と岩井沢小）が合同で学校を再開。避難先から保護者やスクールバスによる送迎で、避難指示が解除される平成25年度末の3年間、仮校舎で2校合同の教育活動を継続。

○平成26年度

3年ぶりに都路町内の2校がそれぞれの校舎で学校再開

○平成28年度

両校で児童数減少による複式学級の増加から、都路町の小学校閉鎖・統合にむけた1年間となる。

古道小学校では閉校最後の年に、地域の教育力を生かした教育実践を展開してきた。特に、「都路」に対する郷土愛を深める取り組みとして、「都路の人を元気づける何かができないか。」という児童の思いから、地元の農産物を使った6次化商品「都路キュウリマン（キュウリジャム）」が6年児童と地域の人材が中心となって開発され、地域の祭りや商工祭、地区文化祭等がPRの場となり、好評を博した。



都路灯まつりでのPR
(平成28年)

○平成29年度

両校が統合し、「都路小学校」が開校。仮校舍に避難していた際に一緒に過ごしていたことから、保護者も地域住民も学校統合を歓迎してくれていた。統合校として、2校の伝統を引き継ぐ形で、「和太鼓演奏」「地域との交流活動」「都路キュウリマン」等の取組を継続していった。特に「都路キュウリマン」は県の復興体験応援事業「ふみだす」の応援も得て、地元の特産物として販売活動を進めていく範囲を県内外に広げた。そして、販売活動を通して、地元都路のよさをPRするだけでなく、風評被害の払拭と将来への希望発信につなげることができた。この活動は令和元年度にも引き継がれ、岡山、広島、東京の各所で都路の復興をPRする活動を実施してきた。



地元産キュウリで開発したキュウリジャム(福島民報2018.8.15)

東西しらかわ “あつてはならないことは起きないこと” ではない感じ方

中島村立吉子川小学校 校長 石沢 泰蔵

—— 午後2時46分、5校時の授業が終わってすぐ、あの強烈な揺れが起きました。後で分かったことですが、地震直後に校舍全体が停電していました。そのため、避難訓練では何度も行っていた校内放送がこの時にはなく、恐怖に怯える子どもたちを前に緊急避難か待機かはその場の担任が判断せざるを得ない状況でした。私は避難を指示。万が一、校舍が倒壊する程だったとすれば、その判断は間違っていないからよかったのですが、揺れが収まった後、昇降口周辺を見ると、外壁から剥がれ落ちたコンクリートの塊が散乱していました。その落下中に通りかかっていたらと思うとぞっとしました。また、放射線の影響という、それまでにはイメージすらもてなかった被害に対してたくさんの対応をしました。中でも“転居”という形で自主避難の動きがあり、県外へ引っ越していった家庭と浜通りのある町から引っ越してきた家庭がありました。この地が“避難元”であり“避難先”であることを思い知らされました。——

これは、本支会のある小学校の教諭による震災時の回顧です。本支会では、出来事の大小はあっても、上のような学校がいくつもあったと考えられます。

あの地震を経験したことにより、我々教師は、想定の外にあるものを想像する力を得ました。“あつてはならないことは起きないことではない”という視点は、安全管理マニュアルへの考え方を一変させ、常に更新することで意味をなすものだと知ることができました。近年の、深刻化している自然災害や社会的な事案や犯罪から子どもたちを守っているこのことが“復興のあゆみ”の過程だと感じます。

放射線についても同様です。放射線がどのようなものを少しずつ理解を重ねてきたことで“正しく恐れること”ができるようになりました。震災当時“見えないものへの恐怖”は教師も保護者も同じでした。正しい知識ときめ細やかな測定、放射線の影響を大きく受けずに済む子どもたちへの対応など、保護者への丁寧な説明と実践の積み重ねにより、現在では学校の望む教育活動ができるようになりました。継続して行すべきは、今後、福島県の子どもたちが受けるかもしれない誤解（風評）に負けない力を付けることだと感じています。正しい知識を根拠に、誤解を解きながら胸を張って説明したり認めてもらったりできるようにするための学びは、子どもたちのあゆみに役立つに違いないと信じます。

我々大人にとっては、強烈な印象を残し続ける「東日本大震災」。それでも私たち教師は、震災後に生まれた子どもたちを前にしながら“復興”を考えていくことになります。あの震災を“平成の大災害”という歴史上の出来事にしてしまわないように取り組んでいく重要性を強く感じています。

北会津 実を結べ、大熊町の小学校との交流 ～合同持久走大会を通して～

会津若松市立河東学園小学校 校長 渡部 仁一

今年度（平成31年）湯川村の勝常小学校より河東学園小学校に転勤してきました。震災当時は、会津坂下町の広瀬小学校に教頭として勤務していました。原発事故のため、葛尾村民が会津坂下町に避難をし、旧川西小学校の空き校舍に行政機関の中核機能を置いて、村長を始め多くの村民の方々が寝泊まりしていました。避難してきた子どもたちは、旧川西小の校舍で、学習や運動をしていて、私も時々、子どもたちの様子を目にしました。その後、子どもたちを広瀬小へ受け入れ、ランドセル・運動着の寄付を募り準備するなどしました。葛尾小の先生も、広瀬小に派遣され、一緒に教育活動を進めてもらいました。葛尾村の皆様の苦

労や苦しみを私自身肌で感じたことが、今でも思い出されます。

現在の河東学園小学校では校長として勤務させていただいておりますが、大熊町の熊町小学校と大野小学校との交流があります。大熊町は帰還困難区域ということで、本校の近くにある旧河東第三小学校の校舎に熊町小と大野小が開設され、大熊町の子どもたちが町バス等で登校しています。

平成31年4月4日に、大熊町の木村政文教育長と熊町小と大野小を兼務する阿部裕美校長先生、幼稚園・中学校の園長・校長先生方との顔合わせを行いました。親交を深めるとともに、大熊町のことや学校の実情を詳しく知ることができました。

10月31日と11月1日に本校校庭で持久走大会が開催されたのですが、熊町小と大野小との合同で実施しました。学年ごとに行われる大会に、大熊町からは児童と担任の先生、校長先生、教頭先生、教務の先生そして保護者が来校し、子どもたちに声援を送りました。参加した子どもたちは、途中棄権することなく、見事に完走しました。阿部校長先生が下学年児童の伴走を、私は上学年を受け持ちました。閉会式での感想発表にも、大熊町の子どもたちが発表するなどし、3校の教頭先生方も分担して講評を受け持ちました。

苦しくても我慢しながら最後まで走り抜く体験は、未来を拓く子どもたちにとって、心と体を鍛えるとても貴重な体験です。この合同で実施した活動の小さな芽が、友情を深めたり、思い出になったりして、成人してからも協力して復興に力を注ぎ、花を開かせ、実を結ばせることができればと願っています。



大熊の子どもたちと一緒に

耶麻 音楽と花を通して絆づくり

喜多方市立第一小学校 校長 佐川 正人

先日、復興庁の設置期限を10年延長し、2031年3月末までとすることが発表されました。東京電力福島第一原発事故の被災地再生に向け引き続き国が支援をしていくようです。本校のある喜多方市も、原発事故の直接の被害こそ少ないですが、観光客の減少、農産物等売れなくなったこと等、風評被害により少なからず苦しんでいます。また、本校には双葉八町村より避難してきた方々が数こそ多くありませんが存在します。そして、県内外を見ると、未だ帰郷かなわず、避難生活を続けている方々がいます。

東日本大震災、原発事故から9年。被災地に住む私たちの思いとは裏腹に、10年一昔と言われるように、震災、原発事故も例外ではなく、人々の記憶の中から忘れ去られようとしています。そして現在の1年生は震災後に生まれた子どもたち。高学年でも、当時は幼かったため、記憶がない子どもが多いのが現状です。震災を体験した者として私たちは、震災、原発事故の体験や教訓を次世代へ正しく伝え、次の災害に向けての備えに生かさなければならない責務があります。だからこそ、震災、原発事故の風化を防ぐ取組、体験を伝える取組を子どもたちと共にしなければならないと考えました。

本校は平成29年から双葉郡の小学生と直接ふれ合う交流を続けています。平成29年度は大熊町の方々、平成30年度は富岡三春校と、そして今年度は川内小学校との交流です。原発の事故で全村避難を余儀なくされた福島県川内村。一時は人口ゼロとなった村は、避難解除後の現在も震災前の賑わいは戻っていないそうです。本校からは「ふくしまの未来へつなぐ ふくしま復興体験応援事業」の補助を受け、緑の少年団、合唱部に所属している4～6年生35人、川内小学校からは1～6年生30人が参加しました。交流会のセレモニーでは、児童代表のあいさつに続き、緑の少年団から心を込めて作ったサルビア、マリーゴールドのプランター20鉢を贈りました。交流会では合唱部のすてきなハーモニーを皮切りに、みんなで楽しく「パプリカ」や「U. S. A」を踊りました。最初は硬かった両校の子どもたちもこの頃にはすっかり打ち解け、笑顔をたくさん見ることができました。その後、昼食も一緒に食べ、とても貴重な、そして忘れられないすばらしい時間となりました。

この交流で川内村の皆様との絆を深められた喜びを非常に感じる事ができました。同時に、川内村の皆様がどうして故郷を離れ、避難を余儀なくされたのか等、子どもたちも含め私たちも震災、原発事故を振り返り考える機会ともなりました。災禍の記憶を風化させず、福島で生きる子どもたちが生命の尊さや震災の教訓を語り継いでいけるようにするためにも、このような機会や場の確保がたくさん必要だと考えます。そしてその教訓、思いが着実に復興の歩みを進める力となることでしょう。末筆になりますが、今回、このような場と機会を提供して下さった草野校長先生はじめ川内小学校の皆様にご改めて感謝いたします。ありがとうございました。

両沼 未来へ、これからの私たちの使命

湯川村立勝常小学校 校長 五十嵐 喜浩

令和元年10月末、両沼支会の研修会の一環として福島第一原子力発電所を視察しました。約4千人体制で現場作業員の方々の努力により廃炉・復興に向けての作業が進められていました。構内専用のバスに乗り、1～4号機建屋の間近まで行き、現状を見て言葉も出ませんでした。本当に9年が経過したのだろうか。その後、平成30年度再開した富岡第一・第二小学校（通称：富岡校）を訪問し、現状についてお聞きしました。三春校との連携など、先生方の苦労・努力の大きさに頭の下がる思いでした。

当時の両沼支会の様子を知るために、支会だより「広報両沼」を振り返ってみました。会津管内では地震による被害は少なかったようです。放射線量も比較的低く、1学期の段階では、例年通りに教育活動ができた学校がほとんどでした。しかし、両沼地区の学校へ避難・転校してきた児童は、当時6月時点で184名、10月時点で120名程度でした。子どもたちを温かく迎え入れ、不自由なく新学期がスタートできるようにと各種団体、保護者、住民の皆様からランドセル、運動靴、運動着、文房具、各種学用品などの支援物資が続々と届けられました。各方部から多くの心温まる支援をいただきました。子どもたちの元気な笑顔が見られるように、住民からいただいた何十本という「こいのぼり」を校庭に掲げた学校もありました。卒業式では避難されている子どもたちの学校の校歌を心を込め全員で歌った学校もありました。線量が少ない会津でも除染作業に地域ぐるみで支援いただいた学校もありました。

今こうして震災後10年目を迎えようとしていますが、福島県の復興の道筋は、他県と比べ厳しいものがあり、長い時間がかかることが予想されています。だからこそ学校は子どもたちに寄り添い、希望と夢を与え、豊かに生きる力を身に付けさせなければなりません。当たり前に行える教育活動に感謝しながら、未来へつなぐ教育を展開していくことが、私たちの使命ではないかと思えます。難しい問題を抱える時こそ校長の出番であり、校長のリーダーシップとイニシアチブが問われる時でもあります。そして、それが校長としての立ち位置だと考え、一丸となって取り組んでいく必要があると思えます。

終わりに、当時の「広報両沼」の巻頭言に、『「自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力でした。私たちから大切な物を容赦なく奪っていきました。（中略）命の重さを知るには、大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。」これは、震災を受けた気仙沼市立階上中学校の答辞の一部です。』と、書かれてありました。改めて目頭が熱くなりました。

南会津 私たちの役割

南会津町立田島第二小学校 校長 大塚 聖子

東日本大震災から9年が経つ。自分の身に本当に起きた出来事として、未だに受け止めきれないでいる人も少なくないだろう。ガソリンは購入できず、スーパーからは日に日に商品が姿を消していく。震災当日は中学校の卒業式で、その後に予定されていた小学校では、式の挙行が困難となり、卒業証書は手渡すのがやっとだった学校もあったと記憶している。誰もが、今まで全く予想しなかった別の世界へ突然弾き飛ばされた、そんな気がしていた。

南会津地区では、震度5弱から震度3までと、各町村によって大きく異なったが、全体として見れば、大きな直接的被害はなかった。しかし、実質的にはその後の風評によってもたらされた観光業、農林業等における被害は、決して例外ではなかった。それは今もなお長い影を落としている。それでも「震災による大きな被害はなかった」という意識が、南会津全体にあるのは、被害の大きかった他市町村を思えば、声高に被害を口にすることがはばかれるといった町村民の思いがあるからだろう。

これまでの南会津支会における研修は、「震災による大きな被害のなかった」地域として、そのことに直接には触れずに、校長としての研修に重点を置き、体力向上や特別支援教育等の講演会を開催してきた。しかし、被害が小さかった分だけ記憶は薄れやすく、また、震災後に生まれた子どもたちが三分の一以上となっている現実を考えると、福島県の校長として改めて研修の必要性を強く感じた。そこで、今年度は、富岡町・広野町の視察研修を実施した。

富岡町では、震災から今日までの、校長先生方を始めとする多くの方々のご苦労やその取組を垣間見るこ

とができた。また廃炉資料館での見学などを通して、この視察の意義を深く感じた。私たちは、「震災による大きな被害がなかった」地区ではあるが、福島の実状を知り、そして伝えなければならないのだという思いを強くした。

会員の一人一人が、震災時を管理職や行政の教育担当者等の立場で、これまで誰もが経験したことのない困難に対峙し、そして子どもたちの安全や学校の安全を第一に考え、敷地内の除染や校舎の新改築にあたってきたのである。私たちは、体験したことや見聞きしたことなどを、震災時の小学校の「かたりべ」として、福島の実状を生きる子どもたちに、正しく教え伝えていく役割をもっている。



廃炉資料館の研修視察

相馬 東日本大震災からの学校再開

南相馬市立原町第一小学校 校長 伏見 康弘

平成23年3月。東日本大震災による避難や安否確認、その後の福島第一原子力発電所事故からの避難により、学校再開についての連絡や就学先の確認など、未曾有の震災で教職員は自身の避難等も重なり大変な日々を過ごしました。地区の校長会においても、市町村教育委員会の指示を仰ぎながら学校再開の準備等に追われていました。

4月、相馬地方の学校は様々な形で開校しました。福島第一原子力発電所から半径30km以外の学校（新地町、相馬市、南相馬市鹿島区の学校）については、自校で開校。半径20kmから30kmの緊急時避難準備区域、20km以内の警戒区域内、飯館村のような計画的避難区域内の学校は、自校で開校することができず、他校の校舎・体育館や他の施設を間借りしたり、仮設校舎であったりしながら開校する運びとなりました。また、真野小学校においては、津波による被害により他の施設での開校となりました。開校しても、遠方からのスクールバスによる登校や屋外活動を制限されたり、完全給食を実施できなかったりと震災前とはまったく違った不自由な学校生活を児童は送ることとなりました。また、教職員も兼務発令により他地区での勤務、教材や備品などが不足する中での指導など様々な苦労がありました。

その後、9月30日に緊急時避難準備区域が解除となり、10月や翌年の1月に元校舎で再開する学校があったり、他校を間借りしていた学校が仮設校舎に移動したりと少しずつ学習環境が整ってきました。しかし、南相馬市小高区の学校と飯館村の学校は、地元に戻ることができずに他地域に建てられた仮設校舎での学校生活を強いられました。

平成29年4月、南相馬市小高区の学校、翌年4月には飯館村の学校が地元での再開を果たすことができましたが、小高区の学校は4校（小高小、福浦小、金房小、鳩原小）合同、飯館村の学校は3校（草野小、飯樋小、白石小）合同での学校運営と単独での再開はできていません。

震災後、相馬支会の各校は、「学校は復興の最大の拠点」との思いでいち早い学校再開、そして教育環境の充実に向けて連携を確かにしながら進めてきました。また、放射線教育や児童の心のケア等に関する問題も校長会研修会で取り上げ、児童が安心・安全に生活できる学校運営に努めてきました。

令和2年4月、飯館村では3つの小学校が閉校となり、義務教育学校「いいたて希望の里学園」が開校します。翌年には、南相馬市小高区の4つの小学校が1つになります。相馬支会の学校数は減りますが、これまで以上に相互の連携を深めながら、組織運営に努めていきたいと思っています。

双葉 地域を離れ、たくましさや温かさに出会い、地域とともにある新たな学校づくりへ向かって

大熊町立熊町小学校 校長 阿部 裕美

【輝く未来と復興推進に向けての取組】

1 ふるさと創造学サミットの開催（年1回開催）

ふるさと創造学は、双葉郡の子どもたちが震災で得た経験を、生きる力にとの思いから、平成26年度より始まる。「自ら未来を切り拓く力とふるさとの誇りを育む」ことをめざしている。双葉郡内の子どもたちは、各学校や各地域の実情に応じて、ふるさとを見つめ、ふるさとの伝統文化や歴史等を学び、ふるさととの復興へ向けての取組をビッグパレットふくしまで成果として発信してきた。

2 絆づくり交流会の開催（年1回開催）

ふたばの未来を見据え、8町村の垣根を越えた小学生同士の仲間作りを目的に、ビッグパレットふくしまで実施する。大学生、高校生、中学生がボランティアで参加し交流することにより子どもたちが互いの絆を深める。アイスブレイク、学年縦割り班のミニ運動会、昼食交流等を実施した。

3 各学校の工夫した取組（各校とも児童数が大変少なくなったため、他校や地域との交流に努める）

- （1）テレビ会議システムを活用し、他校との遠隔授業を推進する。
- （2）行事等を近隣町村と合同実施し、意欲を持たせ盛り上げる。（持久走、水泳、スキー教室等）
- （3）地域住民参加型の運動会実施。地域の協力を得た緑化活動の推進。学習発表会やもちつき会、鑑賞教室等に住民の参加を呼びかけ交流する機会を設定し、地域と協働による学校づくりを推進する。

【震災後の各町村立小学校の動きと児童数の変容】

※児童数はH22→R元の5/1現在

町村名	震災後の開校場所（本来の学校と異なる環境で学校再開）	現在開校市町村	児童数(人)
浪江町	旧二本松市立下川崎小学校に仮校舎	浪江と二本松	1162 → 16
双葉町	東邦銀行跡地に仮校舎→いわき市錦町旧金星幼稚園跡地に仮設校舎	いわき	344 → 33
大熊町	旧河東第三小学校に仮校舎	会津若松	756 → 11
富岡町	三春町曙ブレーキ跡地に仮設校舎	富岡と三春	936 → 25
檜葉町	いわき市湯本に仮校舎→いわき明星大学敷地内に仮設校舎	檜葉	432 → 82
広野町	いわき市立中央台南小学校	広野	311 → 160
葛尾村	旧三春町立要田中学校に仮校舎	葛尾	68 → 7
川内村	郡山市立河内小学校	川内	112 → 39

いわき 豊間小から元気と笑顔を発信

いわき市立豊間小学校 校長 窪木 富士美

1 はじめに

東日本大震災での地震と津波により、豊間・薄磯地区は壊滅し、豊間小学校の周りの様子やおかれた環境は大きく変わった。児童や保護者の命も奪われた。当時の様子を見聞きするにつれ、校長としての職責の大きさを感じるとともに、復興のシンボルとなるような学校にしようと決意を新たにしました。

2 地域との関わり

昨年度、防波堤、道路、緑地帯、公園そして住宅地など復興に向けての大規模な工事は全て完了した。地域住民の願いは、避難した人々が多く戻ってくることや地域が人でいっぱいになること、学校が子どもたちであふれることと感じた。そこで、学校の合言葉「元気・やる気・根気」の児童の姿を発信することで、地域の活性化を図るとともに人々を笑顔にできるのではと考え、地域の方々との関わりや地域伝統の学習を教育課程に取り入れた。

3 学校の取組

豊間小・中・保育園は、合同で運動会や避難訓練を行っている。その中で中学生が園児や小学生を守ったり、小学校高学年児童が低学年児童を助けるなど共助の精神が、伝統として受け継がれている。

また、この地区だからこそ『気づき、考え、実行する』児童の育成に力を入れている。特に6年生では「スチューデント・カンパニー・プログラム」に取り組み、会社経営を行うことで基礎的・汎用的能力の育成を行った。会社のコンセプトや名前、商品開発・販売方法などを、児童間で話し合い、考え、決定・実行してきた。最終的にコンセプトは「復興した豊間をPRする」「豊間ならではの良いところを発信し、豊間に来てもらう」「みんなを笑顔にしたい」の三つとなり、会社名は「豊間F(fine: 元気)&S(smile: 笑顔)」となった。ここには、地域と共に復興してきた豊間小学校の精神が込められている。

4 現在の課題

復興工事は全て完了したが、震災前に行っていた徒歩通学の再開と児童・保護者の心のケアが今後の学校の課題としてあげられる。現在も様々な関係機関や地域・保護者と連携して課題解決に取り組んでいるところである。

その先に本当の復興があると信じて。



「豊間F&S」の取組
～自分たちで考え製作した商品を販売～

震災から学び 伝えたい教訓

東日本大震災は、非日常を生みしました。このことは、それまでの当たり前にあった日常が、いかに価値あるものであったかを、福島に生きる一人一人に感じさせたのではないのでしょうか。だからこそ、今この時を大切に生きていこうではありませんか。東日本大震災に関わる非常事態への対応、当時感じた思いや願い、子どもたちや先生方へ、さらには自分自身へ、それぞれに伝えたい思いを各支会から寄せていただきました。

震災から得た学び・伝えたい思い

「現場を見る 現場で聞く」

川俣町立福田小学校 校長 大内 雅之

「学校は復興の最大の拠点」「風化は許さない」「風評は許さない」これらの言葉は、節目節目でキーワード的に自分の中に反復される言葉であり、その大切さは自覚しているつもりである。しかし、震災直後の取組・意識と今の自分を客観的に比べると、私自身の中で「震災／原発事故」が薄らいでいるのではと思うところがある。毎年校長として子どもたちには震災・原発について語りかけてきた。言葉の中身はほとんど変わらない。同じようなことを同じように継続して伝え続けることの大切さがあることも十分わかっているつもりである。しかし、話し終えたあとは「伝える側の『熱さ』は以前のようなものではないのではないか」「本当に子どもたちに伝えたいことが伝わったのか。」と自分自身に問いかける。単に、時間の経過によって仕方がないことではすまされないように感じる。福島人であり、震災を経験した当事者である私がそうであるならば、震災の後から生まれた子どもたちや他の震災被害のなかった地区などの人たちからすればなおさら意識が薄らぐのもわかる気さえする。善し悪しは別として。そして、これは私だけの問題なのであろうか。

そんな中、福島地区小学校長会で福島第一原子力発電所・その周辺の小中学校を視察する機会を頂いた。原子力発電所の様子を見せさせていただくと、廃炉に向け片付くがれき、作業環境の劇的な改善、新たな施設の建設等、復興への着実な前進を実感できた。しかし一方、高い空間線量のままの場所、全く手つかずの6号線沿線の店舗、封鎖されたままの町道、時が止まっているのではと思える風景もかなり残されていた。また、小中学校の視察では、当時の生々しい話あり、現在の大変な状況の中でもなんとかしてでも前に進もうとする力強い話ありで、自分の今の「震災／原発事故」への取組・意識の低さを恥じた。

現場を見ること、現場で聞くこと、現場に関わること・・・、とにかく現場を知ることがなによりも大事であるとあらためて感じている。原子力発電所や周辺の小中学校の現状を肌で感じることで意識が2011. 3. 11 当時に引き戻される。「熱さ」が戻ってくる。子どもたちは、教師が話していることが本当のことなのかどうか、どれくらいの真剣さ・熱さがあるのかを察知する能力はずば抜けている。私たち校長は子どもたちに伝える言葉を吟味し、本当に思っていることを、熱さをもって伝えなければならぬと感じる。この震災・原発事故については特に。

福島県小学校長会の補助で成立している本視察は、大変ありがたい。これからもずっと継続してほしいという思いである。ただ、補助のあるなし、多忙さの度合いにかかわらず、多くの教員が、いや、校長はもちろん、全教員が行わなくてはならない活動であると考えている。福島の復興をリードする子どもたちを育てるために。

「寄り添う」

川俣町立富田小学校 校長 小松 浩行

揺れがなかなか収まらない中、当時私が担任していた三河台小学校の4年生の子どもたちは大泣きとなった。机の下にもぐってはいるものの体験したことのない大きな揺れに、私も動揺した。しかし、なんとか子どもたちの不安を少しでも取り除いてやりたいと「大丈夫だ。先生が必ず守ってやる!」と思わず大声で叫んだ。揺れが収まったが、校内放送も停電で入らず、学年主任の判断で、避難を開始した。避難の途中も自分の荷物を途中で落としてきたり、ジャンパーを着てこなかったりと動揺は軽減しなかった。

校庭に避難し、全員の無事を確認した。寒さが身にしみる。校舎は耐震工事を終えたばかりだった。耐震工事のためにプレハブの校舎があった。避難直後、引き渡しを開始したが、残っている児童は、そのプレハブ校舎に二次避難した。

その直後、体育館に新幹線の乗客が避難してきた。突然のことで、当時の校長先生も戸惑ったのではないかと推察する。続々と避難してきて体育館がいっぱいになった。

子どもの引き渡しの対応、避難してきた人の対応、二つが重なり教職員で手分けをして対応した記憶がある。夕方、なんとか引き渡しを終えると私は我が子を迎えに行った。学童保育でしっかりと見守っていてくれた。感謝である。避難してきた人の対応があるため、我が子連れで職場に戻った。我が子を職員室で休ませ、避難してきた人の対応にあたった。

体育館は、新幹線の乗客で満杯である。寒かったので、石油ストーブを準備した。食料や水はない。

そのとき、様々な人たちがいた。中には苦情を言ってくる人もいる。みんないららし始める。私は理不尽さを感じ始めた。

プレハブ校舎にも地域の方が避難し、学校は避難者でいっぱいになった。1週間ほどいただろうか。私は、市からの依頼で給水活動にも出かけた。ここでも、苦情を言われる。「まだ水は来ないのか」「おそい」と。私も言い返したくなる気持ちもあったが、「もう少し待ってください。必ず来ますから」といららしする人たちをなだめた。

その年の夏休み、日直をしていた日にある老人が花束をもって学校に来了。その老人は山形からやってきたとのこと。「地震の時に新幹線からこの学校の体育館に避難させていただきました。感謝を申し上げます」と花束をおいて、去って行った。

私はそのとき、理不尽さを覚えたことや文句の一つも言い返したくなった自分を恥じた。避難してきた人や困っている人に本当に寄り添って対応していたのか？と自問した。

私たちの仕事は、よく「子どもに寄り添う」「保護者に寄り添う」ことが大切であると言われる。その大切さを十分に分かっているが、この老人に会ってから、相手の立場に立って心の底から寄り添わなければと考えるようになった。

この老人から、大切なことを学ばさせていただいた。この老人の方以外にも後に感謝の意を伝えられたこともある。中には紅白出場歌手もいた。校庭で無邪気に遊ぶ子どもたちを見て歌を作ったときいた。寄り添って支え合えば、必ず復興できると信じる。

『話し合う』こと

川俣町立飯坂小学校 校長 丹伊田 伸哉

震災発生直後、勤務していた社会教育施設が避難所に指定され、その運営に携わることになりました。放射性物質が拡散すると混乱が加速。子連れの方、年配の方…様々な人が続々と施設にやってきました。

「浜通りからようやくここまで来たのに、どうして中に入れてくれないの？」

スクリーニングが済んでいない場合は入所不可であったため、入所をお断りしなければならない方もたくさんいました。その時のことを思い出すと、今でも胸が痛みます。

かくして避難所での共同生活がスタートしました。住んでいた地域、生活環境が大きく異なる家族が急に一つ屋根の下で生活するわけですから、当然様々な問題が生じます。

「～ができない」「～はおかしい」「～がうるさい…」

毎日、様々な苦情や相談が運営事務局に寄せられました。当初は事務局からの指示や調整で問題を解決・処理していましたが、やがてそれも難しくなってきました。そこで必要となったのが「当事者による交流・直接対話」、つまり「話し合い」です。

各自が抱える課題や悩みをグループ代表が集約し、それを代表ミーティングで話し合います。課題を分類し、優先順位をつけ、解決策を話し合う。大きな課題は全体会を開いて全員で解決策を考え、共通理解を深めていく…この「話し合い」により、避難所の生活環境はますます改善されていきました。

この時、避難所で行われていた話し合いを「学校教育」に置き換えて考えると、それはまさしく「学級活動」の話し合いそのものではないかと感じます。生活上の諸問題を自分たちで見つけ、話し合い、折り合いをつけ、解決を目指していく…。現在、教科の授業において「話し合う」ことは重視されていますが、特に学級活動において自主的に話し合い、問題の解決を目指すこと、その一連の取組の大切さを肌で感じました。

「話し合う」ことによって解決できることがある。「話し合う」ことでしか解決できないことがある。

「話し合う」ことにこれからもこだわりながら指導を進めていきたいと考えています。

福島市立立子山小学校 校長 稲川 竜寿

積み重ねてきた過去よりも未来の方が多い子どもたち。彼らの前向きな行動が、積み重ねてきたものを失い希望が持てなかったお年寄りたちを再び元気にした。子どもたちのエネルギーが地域を復興へと向かわせた。子どもたちの力、地域における学校の責任を再認識した。

「震災当時を振り返って」

福島市立福島第二小学校 教諭 長谷川 央樹

東日本大震災から、9年が経とうとしている。私は震災当時、浪江町立津島小学校に勤務していた。震災後、学校は避難所となった。原発事故により避難所は閉鎖、地域の人たちは避難を余儀なくされた。そして子どもたちも…。

震災直後、私は様々な関係機関の方々の御協力を頂きながら、子どもたちの所在の確認や新しい学校への転入手続き、心のケアなどに従事した。そして、震災後の5月より福島市の荒井小学校に兼務職員として派遣された。また、浪江町から89名の避難児童が荒井小学校に転入した。着の身着のまま避難してきた子どもたちにとって、新学期を迎えることは想像を絶するほど困難な状況であった。

また、土湯温泉の旅館や避難所からの登校は予想以上にストレスの伴うものであった。それは受け入れる学校現場も同じような状況であった。自らも大変な状況であったにも関わらず、「少しでも避難している子どもたちが前の学校と同じように生活できるように」と受け入れてくださった学校の先生方はじめ関係機関の方々の温かい御配慮、御支援を賜り、新学期を迎えることができた。クラス編制

や名簿の作成、学用品の準備等についても並々ならぬ御配慮があったことは言うまでもない。その思いが結集して、子どもたちが学校生活を過ごせることは、本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。

兼務職員で勤務していた学校での出来事である。避難児童専用のスクールバスを待っていたときのこと、ある子どもが

「今頃、津島は雪が積もっているかな？」

と寂しそうな顔をしてつぶやいた。

堰を切ったように別な子も言った。

「浪江の時、友達からもらった年賀状が宝物なんだ。でも、浪江の家にあるんだ。」

と明るく教えてくれた。でもどこか悲しげで堪えている表情であった。

そんな時、そばに寄り添い子どもたちと故郷の思い出話をする。震災後、子どもたちは学校生活に適応しようと必死であった。必死さゆえに弱みを見せず、我慢していた。教師は傍らでつらい思いを共有した。気持ちを言葉で表現することによって、内面に隠している思いをはき出させる。それにより、子どものストレスが軽減され、ストレスマネジメント（ストレスと上手につきあうこと）の能力が向上するのだという。

ひとえに「もう9年経ったんだなあ。」という時の速さを感じるが、この歳月は様々な困難と真っ正面から向き合い、考え、悩んだ日々でもあったと思う。しかし、このような厳しい環境の中で、子どもたちは前向きに、そして絆を深めながら生活してきた。その子どもたちの強さと明るさに頭が下がる。

震災時に勤務していた学校は、今も二本松市に避難している状態である。しかし、震災後の今だからこそ、子どもの学びに火を灯し、それを灯し続けなければならない。日々何をしなければならないのかを、絶えず追い求めることで、教師の力が高まり、子どもたちにも力が付く、というまぎれもない事実を真摯に受け止めなければならない。

私は震災からまもなく10年を迎えるにあたり、改めて自らの人生を創り上げる子どもを育てられるような教師にならなければならないと思っている。そして日々の教育活動を振り返り、自分の指導の未熟さを強く反省した。しかし、そこから次につながる課題づくりができたことは、未来を共に歩もうとする成果といえる。これからも子どもたちと共に歩んでいきたい。

「放射線教育」

伊達市立伊達東小学校 校長 堀部 誠

東日本大震災に伴う原子力発電所事故により、福島県では放射線に関する教育が各校で実施されている。現在、小学校の高学年になれば、放射線の種類や性質、放射線の単位や測り方、さらには放射線の人体に対する影響などの知識を身に付けている。今後、正しい知識も必要だが、同時に、放射線によるいじめや差別をなくすための教育、さらには心のケアの必要性を感じている。放射線教育はもちろん、道徳教育や人権教育にもじっくりと取り組みたい。

「チェック！チェック！」

伊達市立上保原小学校 校長 伊藤 久美子

後ろの書棚のファイルがドサドサッと倒れ、書棚に積み上げられていた段ボール類が飛び出すように落下。図書室の本という本も一冊残らず床に投げ出されていた。あの震災以降、特に「整理整頓をする」「転倒防止策を万全に」「高いところに物を置かない」と意識していたが、ふと気がつくといよいよ加減になっている自分がここにいる。職員室の書棚、教室の本棚、図書室は大丈夫？あの二段重ねになっているロッカーは、このままでよいのか？学校訪問のご指導に頼らず、自分自身の意識を再度確かめる必要がある。

「見える化して意識の備えを！」

伊達市立梁川小学校 教頭 緑上 隆

私が震災から学び伝えたいことは、普段の生活の中での「備え」です。「物の備え」はもちろんですが、それ以上に大切なのは「意識の備え」ではないでしょうか。しかし、いつ起こるか分からない災害に対して常に意識を持ち続けることは難しいものです。そこで、防災用品を見える所に設置したり、命を守る標語等を掲示しておいたりして「見える化」しておけば、意識の備えにつながると考えています。

「震災から学んだこと」

伊達市立大田小学校 校長 佐々木 誠一郎

『ふくしまの絆』『新聞報道』の欄に平成24年4月5日付『福島民報』の記事が載っていました。「転入先で心ケア」の見出しで、檜葉北小学校の教員が受け入れ先の高田小学校で、避難児童の心のケアにあたっている内容です。「大丈夫、安心して」、彼の子どもに寄り添う姿が印象的です。教頭として同じく檜葉小に勤務していた当時のことが甦ってきました。

あれから9年経ちます。復興も進みましたが、震災、原発事故はもとより、いじめ、不登校、自殺、虐待等子どもを取り巻く問題は日に日に厳しくなっています。「子どもに寄り添い、子どもと共に歩む。」震災を通して、子どもが困難な問題に直面した時、いつも傍にいて、共に悩み、考え、解決できるのが教師だと改めて学びました。そうありたいと強く願い、教職員にも常に語りかけています。

「今、思うこと」

伊達市立堰本小学校 校長 高見 良典

震災による原発事故の影響で、福島復興への道のりは特殊である。未来ある子どもたちに、先が見えない廃炉作業、固定化しつつある風評といった大きな課題を残してしまうのは忍びないが、だからこそ、今この時代を生きる我々がやるべきことは、原発事故を乗り越え、この福島で、自らの意思で、たくましく、豊かに生き抜くことができる次の世代を育てることなのだろう。頑張りましょう。

「思いが子どもを動かす」

伊達市立月舘小学校 校長 邊見 年成

震災から2年がたち、私は全校避難し、他の学校の一角を借りて再開している中学校に赴任しました。

避難して誰もいなくなった本校校舎に行ってみると、教室の黒板に、「今日は、再開の日です。」と書かれていました。きっと、教室を立ち去る直前、担任の先生が絶対に戻ってくるという強い思いを持って書いた言葉でしょう。その言葉を見たとき、胸がぎゅっと締め付けられ、涙があふれてきたことを今でも鮮明に覚えています。

震災後、子どもたちと先生方は、「ふるさとの人たちを元気にしたい。」と全校合唱に取り組んでいました。昼休みに、率先して集まり、日々練習に取り組んでいました。今振り返ると、「私たちの合唱でふるさとの人たちを元気にする。」それが、子どもたちの誇りにもなっていたような気がします。

文化祭当日の合唱発表。子どもたち一人一人の思いが、表情、声からあふれ出ていました。保護者も、地域の方々も、子どもたちの姿に涙を流しながら聴いていました。合唱を終えた子どもたちの顔は、達成感に満ちあふれ、実にすがすがしいものでした。決してコンクールに出るような合唱ではありません。しかし、思いのいっばい詰まった合唱は、人の心を動かす力があるのだと感じました。

子どもたちは、思いをもって一つの方向に向かったとき、人の心を動かすほどのすごい力を発揮する。日々の学校生活の中でもそのようなことはたくさんあるはずです。その一つ一つを見逃さず、大切にしていけることが、子どもたちを育てることにつながると今、改めて感じているところです。

「福島の子だからこそ力を身につけさせたい」

国見町立国見小学校 校長 菅野 敏彦

東日本大震災、そして起こった原子力発電所事故からの1ヶ月ほどは、忘れようにも忘れられない。特に記憶に残っているのは、当時高校2年生だった娘の「お父さん、福島県はこれから一体どうなるの?」と言った時の、普段は楽天的な娘のそれまで見せたことのないおびえた表情である。福島県のあまりの惨状に衝撃を受け、将来に言い知れぬ不安を感じたことは容易にわかった。そして、同時にそのとき勤務していた小学校の子どもたちも、将来に大きな不安を感じていることだろうと思った。その後放射線問題に伴う風評被害が福島県を襲い、長期に渡って甚大な打撃を受け続けることになった。当時福島県の子どもの将来には大きな困難が立ちまわったことは明白であった。

私は強く思った。困難に直面している福島の子だからこそ、生きる力を身につけさせ、困難に打ち勝ち自分の夢を実現することができる子どもに育てたい。そのために、知識、技能、思考力を身につけさせ課題を解決できるようにすること、苦しさに負けないたくましい心を育成すること、はつらつと生活することができる健康と体力を身につけさせること、これらに向けた実践に日々の教育で全力で取り組んでいかなければならない。

あれから10年目になろうとしている。今でも「福島の子だからこそ」という思いは変わらない。

「逆境からの学び」

伊達市立石田小学校 教頭 佐藤 秀和

東日本大震災は、経験したことのない、未曾有の大災害となりました。当時、一緒に学校で勤務した先生方とお会いする機会があり、目の前の子どもたちを守るために必死だったことを語り合いました。小学校生活最後の6年生を担当し、いろいろな制限のある中、「立派に成長させて卒業させたい」。その思いが子どもばかりでなく、私自身をも成長させてくれました。

卒業した子どもたちは、今年成人式を迎えます。

「『当たり前の日常』にある幸せ」

伊達市立大石小学校 教諭 鈴木 慎

新設校の第1期卒業生との最後の2週間を奪われ、6学年主任として悔し涙を流したことは、今でも忘れられません。多くのものが失われ、手に入らなくなったとき、「当たり前」だった日常がどれほどかけがえのないものだったのかを実感させられました。「当たり前の日常」が実は当たり前ではなく、そのありがたみに感謝して過ごさなければいけないと、今でも自分に言い聞かせています。

「心に残る一言」

桑折町立釀芳小学校 教諭 小出 徹

A町の昨年の成人式に小学校時代の担任として招待され出席した。新成人たちは、当時の面影を残しつつ、立派な大人の顔つきとなっていた。彼らは当時中学1年生だった。震災直後、下校途中の数人の女子生徒が、母校の小学校の校庭に避難している子どもを見て駆けつけ、低学年の子どもたちを抱き寄せて「大丈夫だよ」と言葉をかけてくれたのだった。

式後、当時を振り返り、心強く頼もしく感じたことを話すと、「当然ですよ、母校ですから。」という言葉が返っ

てきた。郷土愛や愛校心など、特に力を注いで指導したわけではなかったが、若者たちの心には、確実にふるさとや母校を大切に思う心が育っていたことが分かり、目頭が熱くなった。

二本松市立杉田小学校 校長 岩淵 孝

管理職として忘れてはいけないこと。児童の安否確認、施設の応急措置…山積する問題に粉骨砕身して事に当たる教職員にも大切な家族がいること。

本宮市立五百川小学校 校長 安齋 宏之

防災・復興の拠点は、学校。学校を中心として、地域の豊かな関係性を構築しよう。

(スクール・コミュニティの構築)

二本松市立原瀬小学校 教頭 村松 泰二郎

過去から学び、今を生き、未来を創る。かけがえのない、私たちの大切な命。守るのは、私たち自身。

二本松市立川崎小学校 教頭 佐藤 伸

地球は生きている。この巨大なエネルギーの前に人間は無力だった。でも、奢らず謙虚な姿勢で震災を乗り越え、人々は生きてきた。そしてこれからも生きていく。

二本松市立渋川小学校 養護教諭 鈴木 萌

学ぶことで世界に笑顔と幸せが増える。「誰かのため」に学ぶ、利他主義の教育を新たな学びのモデルとして、福島から発信していくことが大切。

二本松市立旭小学校 教諭 佐藤 千鶴子

「想定外」が起きる時代。もしもに備えた訓練と対策を！

二本松市立東和小学校 教諭 大和田 樹

教職2年目、埼玉の地で被災。報道を通して知る変わり果てた福島の様態に触発され、ふるさとの復興を誓う。今、福島県人としての誇りを胸に「うつくしま ふくしま」の再興をめざす。

本宮市立和田小学校 教諭 吉田 茂

便利で快適な文明生活はいとも簡単に崩れる。備えよ常に。

本宮市立白岩小学校 教諭 大谷 弘道

いくら悲しくても、苦しくても、それ以上に悲しみ、苦しんでいる人がある。それが震災で学んだこと。亡くした人たちのためにも、生きている私たちができることをやろう。それも震災で学んだこと。

二本松市立二本松北小学校 校長 紺野 宗作

「先生、俺しか残んねがった。」胸の中で泣きじゃくる教え子は、「負けねぞ。負けねぞ。」と懸命に生きる決意をする。今を生きる。

二本松市立岳下小学校 校長 佐藤 聡

～1日一ネタ楽しい授業・1日一ほめ嬉しい授業・1日一押し頑張る授業～授業づくりは人づくり！震災から再認識する人づくりの大切さ！！

本宮市立本宮まゆみ小学校 校長 古田 幸裕

いにしえからの教えを貫き、未来を創造し、子どもたちに真の力を。だから今こそ“てんでんこ”，自らの意思で前へ進める子どもたちに。

二本松市立二本松南小学校 教頭 佐藤 和彦

考え得る最悪の状況の「さらに一つ先」を想定し、対応策を準備しておかなければならない。用意周

到・準備万端が肝要。

二本松市立小浜小学校 教諭 菅野 由夏

ふるさとの力を活かし育てたい！ 颯爽と未来へ歩む子どもたちを。

二本松市立大平小学校 教諭 佐藤 宗子

震災の記憶がなく映像でしか知らない子どもたちも増えてきました。自然災害は繰り返します。学びの場を設けること、伝え続けることが私たちの役割です。

二本松市立新殿小学校 教諭 遠藤 淑子

避難先の学校で担任する子と迎えた始業式。知らない校歌を聞いたとき、やるせなさや悲しさがこみ上げた。母校の校歌はふるさとで歌わせたい。

郡山市立赤木小学校 校長 鈴木 久

『安心』を得るために大切なことは 毎日正しい情報を発信すること

そして、家庭・地域の協力を得るには まず学校でできることを実践し続けること

放射線量の測定、学校での安全対策への取組、子どもたちの学校生活の様子などの情報を継続的に発信することで、理解が深まり、学校教育環境における「安心」を得ることができる。

そして、学校でできることを実践し続けることで、安全対策への理解が広がり、PTAや地域の協力が得られる。

郡山市立喜久田小学校 校長 吉田 知裕

「非常事態の時こそ『一緒にがんばる』がキーワード」

相双地区から避難してきた子どもたち、先生方が自校の校舎で教育活動を行うという経験から、大切なことは、「一緒に」という言葉だった。子どもたち同士仲よく、先生方同士仲よくをモットーに、休み時間の交流や、先生方同士の懇親の会など、一緒に共有できる時間を意図的に設定することで、寄り添えると感じた。

(当時河内小学校教頭)

郡山市立芳山小学校 校長 吉川 和夫

「課題を共有し 校長一人一人の考えが全体に生きる校長会 災害時も強い力に」

課題を共有し、一人一人の発想や考えが全体に活かされたときに、相談し合い、支え合い、助け合い、励まし合うことができる。校長先生方の力を合わせたら、大きな力となることを震災から学んだ。震災後、何度も臨時校長会を実施し、対応を協議し共通実践した経験から学べたこと。

郡山市立穂積小学校 校長 松本 浩一

『勇気』、『元気』は自ら作り出すものである 奮い立たせるものである」

震災後の避難生活から学んだこと。自分自身が感じ、自分自身が立ち上がろうとするから、「勇気」や「元気」が湧く。一日二日で、どうなるものでもない。自ら作り出した本当の「勇気」や「元気」こそ、新たな知恵や行動を生みだし、時に周りの人たちをも奮い立たせる力となる。

『望 郷』 (4月10日)

ふるさとの桜よ あなたは誰に愛でられることなく ひとりひっそり咲いているのですか。

ふるさとの川よ あなたは だれにきかれることなく さらさらと水音を立てているのですか

ふるさとの空よ あなたは だれに見上げられることなく どこまでも澄みわたっているのですか。

ああ わたしをそだてたふるさとよ わたしをこよなく愛してくれたふるさとよ

わたしは ただふるさとを想い たった一つのふるさとを想い

今日も 遠いふるさとへ続く空を見つめているのです。

(当時浪江小学校教頭)

『すみれとたんぽぽ』 (『未来を拓く心のハンドブック小学校版』平成27年3月郡山市教育委員会より)

郡山市立T小学校2年児童の作品(当時)

校ていも つうろも みんなじょせんした。 学校にくるさかみちも はげぼうずになった。

はるには すみれやたんぽぽの花で いっぱいだったのにな。

今年、春になったら はげぼうずだったさかみちに すみれとたんぽぽがさいた。

つよいな。

「大震災の教訓を引き継ぐ」

須賀川市立第一小学校 校長 永瀬 功一

本校の校舎は新築4年目の新しい校舎である。廊下は広く、各学年の教室前にはオープンスペースが設けられるなど、明るく開放感があり、子どもたちは元気いっぱい伸び伸びと学習している。しかし、このようなすばらしい環境で学習する以前は、プレハブの仮設校舎で不自由な生活を強いられていたこと、そして、あの震災の時には、校舎が崩れ、校庭が地割れするなどの大きな被害を経験したことを決して忘れてはいけないと思う。



震災直後の校舎内



震災直後の校庭



仮設校舎の外観

校長室には、当時の様子を生々しく記録した冊子や新校舎落成までの歩みが分かる資料等が保管されている。それらを読み返してみると、当時の校長はじめ職員がどれほどご苦労されて教育に当たっていたのかが伝わってくる。そして、あの混乱の中で、一人のけが人も出さず、無事避難させるとともに、全員を無事保護者に引き渡すことができた、奇跡のような対応には本当に頭が下がる。そして、今自分が預かっている子どもたちや教職員全員を同じように守らなければならないと強く感じている。

本校では行事や業間活動を利用して、年に6回の避難訓練を実施している。内容は火災や地震、不審者への対応等である。これ以外にも、授業参観日に合わせて児童の引き渡し訓練を実施したり、3月11日を震災を考える日と位置付け、災害に関する授業を行うとともに、安全への意識を高めるための全校集会を実施している。これらは、大震災を教訓とし、次の時代に生かしていくために継続して引き継いできたことである。そして、実施にあたっては、安全への意識を高めることは勿論、過去の出来事から「当たり前」の日常が「当たり前ではない」こと、現在のような恵まれた環境で便利に不自由なく学習や生活ができることのすばらしさについて、意識して伝えていきたいと考えている。

現在の5・6年生は、いよいよプレハブの仮設校舎を経験した最後の学年となる。年々記憶は薄れ、今の生活が当たり前になっていくことは仕方のないことだとは思いますが、「災害は、忘れた頃にやってくる」ことを肝に銘じ、いざというときに自分で判断して行動できる子ども、判断に迷うことなく子どもたちの命を守る教職員、指示を明確にして、迅速に対応できる管理職となれるよう、日頃から常に危機意識を高めていきたいと思っている。



新校舎の外観



廊下の様子



今年の避難訓練



震災を考える授業

「“災害に強い” 湯本地区」

天栄村立湯本小学校 校長 中野 直人

天栄村西部にある湯本地区。人口約500人。湯本小児童8名（R元年度）。人口流出、少子高齢化の顕著な地区です。米作り、畑での野菜作り、温泉旅館業など、地元の自然とともに生活しています。

そんな平和な地区に、東日本大震災の約半年前に、「湯本直下地震（仮称）」が起きました。震度5弱、震源地は湯本大槻集落。家屋や道路に局地的な被害がありました。そして、「東日本大震災」。震度は5強で、近くの羽鳥湖堤体に何カ所も亀裂が入りました。

この二つの地震災害について、現在の私たち湯本小教員には経験がありません。この地で勤務する上でも、この時の様子や予防措置、安全対策、教訓などを共有しようと、地元の有識者（日本EIMY研究所主任研究員、本校保護者）のH氏の協力を得て、次のようなお話をいただきました。

1 ハザードマップを元にして備えておくこと

- 最悪の事態を想定して作成された天栄村のハザードマップ。信憑性は高い。これを元に、避難経路や場所、役割分担などを明確にしておく。

2 山に入ることに慣れさせておくこと

- 水害から逃げるために、近くの山の道のない斜面やがさやぶの道などを上って逃げる場合も考えられる。慣れるための訓練も必要と考える。

3 地域コミュニティの大切さ

- 近所付き合いを大切にしていくことにより、いざとなった時の安否確認や居場所の特定などの早めの対応ができる。今後とも互いに関心を持ち、相互扶助・共助に心がける。

震災後は、湯本出身の方をはじめ、知り合いや温泉宿を頼って、驚くほどの人たちが湯本地区に来て、



震災当時の本校の被害の様子

すごい賑わいだったということです。食料は自給自足なので豊富、水もきれい、温泉があるのでお風呂も大丈夫と、まさに生き延びることができる場所だったのです。「このような地区・場所をしっかりと残していくことが、次世代をつなげていくことになる。」とH氏は力強く語っていました。

石川町立石川小学校 教頭 板橋 敬史

あの日、「地震に強い」と言われている石川町も、これまでに経験したことの無い、長く激しい揺れに見舞われました。地震が起きた時間、本校では謝恩会が行われていました。そして、子どもたちの出し物が盛り上がりをもせた頃に大地震が発生しました。静かな揺れがしばらく続いた後、激しい揺れに変わりました。短時間で終わるであろうとの予想に反して揺れは収まらず、その場にいた多くの者が身の危険を感じ始めたその時、大きな叫び声が耳に入りました。

「全員、すぐに外へ出ろ！」「あわてるな！」

声の主は校長先生でした。そして、その声を合図に全員の避難が始まったのでした。

「危機管理能力」は、管理職に求められる非常に大切な能力の一つで、子どもや職員の命に関わることであれば、なおさらその重要性が増します。

東日本大震災の後、全国各地で様々な災害が毎年のように発生し、そのたびに被災した学校や児童生徒の様子、学校の対応に関するニュースが流れます。それを見ながら学校の危機管理のあり方を考えるたびに、あの時の校長先生の姿を思い出します。

玉川村立須釜小学校 校長 塩田 明美

2011年、3月11日の東日本大震災とその後発生した福島原発事故は、それまでに経験したことの無い恐怖と不安、そして、福島県全体に大きな混乱を引き起こした。私の住む石川郡内の学校では、大きな被害はなく、数日で学校再開となったが、その当時同じ時間に、住む家を失い、家族を失い、避難先で多くの苦悩をかかえながら現在の生活に至った方々がいたこと。そして、故郷に住むことをあきらめ、新しい地域で新たな生活を始め、困難に直面しながらも前向きに生きていらっしゃる方々がたくさんいることを決して忘れてはいけない。各学校そして私たち教職員は福島の復興が進む中、自分の勤務する地域で予想される災害は何かを明確に持ち、災害の恐ろしさの理解と命を守る防災教育を推進することの重要性を実感してきている。

また、東日本大震災では、地震後に巨大津波の発生が予想されたり、警報が出されたりしたにもかかわらず、児童生徒を適切に避難させなかった点をめぐって、学校の「過失」として、現在も争われている。大震災を経験した私たち教職員は、特別の教科道徳の授業を中心に、様々な機会をとらえて、児童生徒に命の大切さを考えさせ、困難を乗り越え生きる人々がいることを語り伝えていかなければならない。そして、学校管理下における児童生徒の「大切な命を守る」責任の重さを自覚し、福島の未来を支えていく児童生徒一人一人の夢と希望の実現のために努めていかなければならないと思っている。

古殿町立古殿小学校 校長 館 初浩

児童数130人程の学校の教頭として震災を経験しました。発生時校長先生が年休で不在のため、自分が指揮しての対応となりました。今でも、鮮明にあの時のことが思い出されます。

今、特に思うのは、いかに日頃から防災についての学校の体制及び保護者との連携を強化して備えるかです。当時はまだ、連絡メールが導入されておらず学級連絡網でした。そこでいざという時、方部ごとに歩いて連絡できるように、実家庭単位の連絡網を整備していました。また、先生方には、年度初めに担当した方部の児童の家を確認させていたので、震災発生後迎えの無い児童については、最終的に方部担当が送り届けることができました。また、先に迎えに来た保護者が、近くの方に声を掛けますと申し出ていただけるなど、保護者間で今の状況を伝え合うことに協力的でした。この後の原発災害のための緊急一斉下校時は、学区内を消防ポンプ車の拡声器を使い知らせてくださった保護者もいました。そして、ありがたかったのは、年休を取られていた校長先生が予定を取りやめ、児童を下校させる頃、学校に急ぎ戻られたことです。これまでの対応を報告するとすぐに今日はこの後学校待機もありうるので、今の時間に自宅と家族を確認するように、と指示を受けました。お陰様で、自宅の状況を確認し、今後の自分の動きを家族に伝え、途中で車の燃料も満タンにし、非常食も持参して学校に戻ることができました。以後、心おきなく各種対応に当たることができました。

「子どもたちと先生たちがいれば、そこは学校となる」

田村市立瀬川小学校 校長 横田 善広

このタイトルは、平成24年4月に、いわき市内の職業訓練校を借り受け、檜葉町の小中学校が再開した時に、当時の学校再開に教頭として携わったの思い出です。

平成23年3月11日、原発事故により檜葉町の小中学生は故郷を離れました。やがて、子どもたち

は会津美里町内の小中学校へ落ち着くことができました。その後一年間、教育委員会では会議を重ね、線量の低いいわき市で小中学校を再開するという結論に至りました。学校関係者たちで最初に職業訓練校の建物を見に行ったのは翌年の平成24年1月。学校再開まであと3か月という時期でした。2階建ての建物は、細かい仕切りなしのワンフロアでした。もちろん職業訓練校の建物なので、昇降口、児童生徒用トイレ、校庭、体育館、プールなどはあるはずありません。

まず、いわき市内の教育関係施設への挨拶回りを教育委員会と校長先生方が担当しました。我々教頭たちは、今後のスケジュール作りを担当しました。教材・教具は、線量を測定して低い物を檜葉町の本校から持ち出すことにしました。ところが、机や椅子などの備品類は、外気に晒されて線量が高く持ち出すことができませんでした。備品を購入するにも、1年後の仮設校舎建設が控えている町の財政状況では困難でした。そこで、文科省の「東日本大震災子ども学び支援ポータルサイト」を利用する事としました。手分けして、全国各地の自治体や企業に支援を呼びかけました。全国的な少子化の影響で各地の倉庫に眠っていた備品・教材・教具類が、連日全国からいわき市へと運び込まれてきました。

次の課題は、教育課程の編成です。そのためには、いわき市内の教育・文化・スポーツ・観光施設など、授業に活用できる物なら何でもといった具合に調べました。そして、連絡をとり利用可能な施設・設備・物品をリストアップしていきました。学校行事も今の状況でできる範囲で、一通りの行事を洗い出しました。しかし、それ以前に大きな問題がありました。それは、いわき市内で学校再開をするにあたって、そこに勤務する教職員の住宅と通学する児童の住宅が確保できていないという問題でした。

ところが、どうにかこうにか問題は解消していき、タイトルの通りとなりました。

「3月14日（月）」

三春町立岩江小学校 校長 遠藤 俊一

「3月14日（月）」の期日は、私が平成26・27年度校長として勤務した南相馬市小高区にある金房小学校本校舎2階の図書室黒板の右側に子どもの字で書かれていた日付である。震災がおきたのは3月11日（金）ではと一瞬思ったものの、すぐに私の脳裏にある思いが浮かんできた。おそらく、図書委員会の子供が昼休みなどに本の貸し出しをし、昼休みが終わる頃に書いたか、または、図書室清掃担当の子供が黒板をきれいにし、週明けの月曜日の日付を記入したのではないかと想像できる。書き記した子供は、週明け14日の月曜日、次の日の3月15日（火）と、同じ時間にいつもと同じように日付を書いたであろうと想像すると・・・。

本校舎を離れて、同市内鹿島区にある鹿島中学校校庭の仮設校舎での教育活動を余儀なくされ、想像だにできない様々な困難が数え切れないほど山積している中、当たり前の日々の教育活動がいかに貴重な時間であるかを心底考えさせられる日々であった。

現在勤務する岩江小学校は、震災の年の8月、葛尾小学校より33名が転入してきた。子どもたちが前に在籍していた学校も県内、県外様々で、久しぶりに友達と再会できた喜び、そしてホッとした気持ちをかみしめたに違いない。子どもたちは、様々な困難を抱えながらも、教職員、保護者、地域が一丸となって寄り添うことにより、勇気と希望を少しずつ取り戻したことは想像に難くない。

時が経つにつれ記憶が薄れていくことは否めないが、だからこそ、一人一人の教員が現在おかれているそれぞれの立場で当時に思いを馳せ、震災後の様々な困難を一つ一つ乗り越えてきたという自信を糧に、目の前の子どもたちに向き合っていくことが大切ではないかと思う。月並みな表現ではあるが、当たり前前の日常の教育活動がどれだけ有り難いことであるかをかみしめることを忘れてはいけないと思う日々である。

「ピンチをチャンスに！」「一期一会を大切に！」

小野町立飯豊小学校 校長 石井 研也

平成23年3月11日、東日本大震災により私が勤務していた小学校は、校舎の3分の2と体育館、校庭も使用できなくなりました。震災直後に6年を担任し、1年間2クラス合同で一つの教室で過ごしました。当時担任した子どもたちは、今年成人を迎えます。その後2年間、教務主任として勤務しました。図書室の一角が、校長室と職員室、事務室、保健室を兼ねており、長机とパイプ椅子が私たち七学年の事務机でした。子どもたちは、休み時間に外で体を動かして遊ぶことはできず、体育の授業や全校児童が集まる行事等は、近隣の公共施設で行いました。

そのように常にピンチと隣り合わせの毎日でしたが、学校経営をしていく上で貴重な学びの時間となりました。当時の校長先生は、「ピンチをチャンスに 楽しく！」と常に言っておられました。「在学している子どもたちが、マイナスの教育環境であっても、夢とロマンのあふれる小学校時代だったと思えるようにする。」校長先生のリーダーシップのもと、常に自分たちにできることを話し合っていました。実際は、話し合うというより、校長先生、教頭先生と同じ長机で日常の会話の中で自然に語り合っていたように記憶しています。私たちは、子どもたちのために「夢プロジェクト」を立ち上げました。校長先生が地域を歩き、一期一会を大切に信頼関係を築いてくださったことにより、保護者や地域の方々から様々な形で応援をしていただきました。私たちは、子どもを中心に据えて、真夏の雪遊びプロジェクトやプロ選手によるサッカー教室、アナウンサーによる言葉の教室等、様々な夢プロジェクトを実現しました。また、近隣の公共施設で運動会や学習発表会、卒業式等を行いました。それら一つ一つの場面で、一期一会を大切に感謝し、困難があっても前向きに行動する子どもたちの姿が見られました。ピンチをチャンスに変えるために、校長先生は常に真剣に前向きに進んでおられました。その姿は、

たくましくもあり、楽しんでいるようにも見えました。その背中を追うことで、私たちは、子どもの笑顔のために、前向きにやりがいを感じながら仕事をすることができました。

私は、その経験を心に刻み、いかなる時もピンチをチャンスに変え、一期一会の出会いを大切にしながら、未来に向かって夢を持ち続ける子どもを育てるために尽力してまいりたいと思います。

白河市立小野田小学校 校長 宗像 浩

- ・ 一度起きてしまった事実はもう変えられない。しかし、命ある未来であるならば、今の自分次第でみちを切り拓き、変えることができる。
- ・ ひとつの命はみんなの命でもある。人と人は、命でつながることとともに輝き合うことを、私たちは永遠に忘れない。
- ・ 自然災害が多い日本の風土の中で震災をなくすことは難しい。しかし、私たちの責務は、悲惨な被災体験と様々な復興の取組を風化させることなく、子どもたちに自らの命を守るための活動を伝え、防災・減災の意識を根づかせることである。

白河市立大屋小学校 校長 今井 不二子

- ・ 震災が起きたとき、マニュアルがあっても、状況によってはあてにならなかった。何よりも頼りになったのは、先生方の判断力であった。避難訓練で身に付け、実際に役に立ったことは、机の下に身を隠すことと、指示をよく聞くことであった。
- ・ マニュアル通りにならないからこそ、万が一の事態に遭遇したとき対応できるように、日常生活での危機意識を高め、危険回避策をシュミレーションしていくことがとても大事である。

「震災10年目を迎えるにあたって」

猪苗代町立緑小学校 校長 佐藤 秀一

1 はじめに

東日本大震災、そしてそれに伴う原発事故から9年が過ぎました。

当時、小学校1年生だったあの子どもたちは、もう高校生になっています。

また、当時、高学年だった子どもたちは、成人していてそれぞれの道を歩んでいます。

そして、今、小学校で学んでいる子どもたちは、生まれていない、あるいは幼くて当時の記憶もままならない世代です。震災や原発事故に関してどのような思いを抱いているのでしょうか。

私たち大人にとっては、つい数年前の出来事であったとしても、目の前の子どもたちにとっては、ともすると、「昔（過去）の出来事」になっているのかもしれない。

2 当時のエピソードをもとにした「ふくしま道徳教育資料集」

私たち福島県の教員の財産のひとつに「ふくしま道徳教育資料集」があります。

この資料集は、その多くが大震災や原発事故の中から生まれたエピソードがもとになっています。

震災の記憶が希薄な（あるいは全くない）子どもたちに対して、当時の私たちが体験した思いに触れさせたり、考えさせたりすることのできる貴重な資料集だと考えます。

震災の経験があったからこそ気付けた「いのちの大切さ」、「家族愛」、「友情」、「郷土への愛着」、「人と人との絆」、「前向きに生きる人間のたくましさ」……。今後、薄れていってしまうかもしれない当時の思いが、この資料集には確かにちりばめられています。

そして、この資料集には、「ふくしまならではの道徳教育」を進めていこうとする強い思いが込められています。

震災10年目を迎え、今後、「震災を知らない子どもたち」の教育を行うにあたって、私は、「ふくしま道徳教育資料集」を用いた「ふくしまならではの道徳教育」が、改めて大切になってくるのではないかと考えます。

3 大熊町を知ること

令和元年11月28日。私たち北会津支会は、「大熊町視察」を行いました。（大熊町役場、中間貯蔵工事情報センター、福島給食センター、大熊食堂）

ご存じのとおり、大熊町は震災後、会津若松市等で町民の方々が避難生活をされ、現在も大野小、熊町小、大熊中が会津若松市において教育活動を行っています。

私たちは、常日頃から大熊町の三つの小中学校の児童生徒やご家族の方々と接する機会があります。彼らの郷土である大熊町について知り、様々な場面における関わりの中でいかに共感的な思いで接していけるかが求められています。

視察では、大熊町の風景や復興に向けた町の取組、中間貯蔵施設の状況などを目の当たりにしました。

和やかなムードだったバスの車内は、大熊町に入るとたんに静まりかえりました。次々に目に飛び込んでくる町の風景をそれぞれがだまって見つめる時間が、長い間続いたのが印象的でした。

震災や原発事故でどんなことが起きたのか、そして今どんな状況であるのか、復興に向けた町の思いや努力……。それらをしっかり踏まえてふくしまの子どもたちの教育にあたっていかなければ、

と改めて強く考えさせられました。

4 むすびに

震災及び原発事故から9年が過ぎ、それに対する意識や関心の薄れがニュース等で取り上げられています。

震災及び原発事故からの復興に向けて努力を積み重ねている立場から見ると、残念な気持ちが込み上げてきます。

震災10年目。「震災を知らない」あるいは「関心が低い」子どもたちに、震災や原発事故を踏まえた教育をいかに行っていくか。今後、私たちが行う教育に求められる視点の一つではないでしょうか。

「震災から10年目を迎えて思うこと」

喜多方市立堂島小学校 校長 半谷 成満

東日本大震災から早いもので、10年目を迎える。その間、私は5つの職場に勤務してきた。震災前まで20年以上小学校の教員として勤務していたので、「今さら」他の職場に移ることはとても不安であったが、今思い出してみると、私の人生の中でプラスになることがたくさんあったように感じている。ここでは、それぞれの職場で得たもの、感じたこと等について改めて振り返ってみたいと思う。

一つ目の職場は、「猪苗代町教育委員会」だった。平成23年の5月の連休明けから7月までお世話になった。震災後私たち家族は、知り合いの紹介で猪苗代町に住むことになっていた。当時、双葉郡浪江町立津島小学校の教頭だった私は、浪江町から会津地方に避難し各地の小学校に区域外就学したり転校したりした子どもたちや兼務でそれぞれの学校に勤務していた教員たちを訪ねて、「現状を把握し何かできることを支援する」という役割を担っていた。実際には、浪江町で把握していた名簿をもとにして、関係の各小中学校にアポイントを取り面談に伺うというスタイルで実施した。訪問しての感想は、どの学校でも避難者に寄り添いながら様々な支援をしてくださっていることや、兼務の教員に対しても最大限の配慮をしてくださっていることを感じて、とてもありがたく安心した気持ちになったのを覚えている。

二つ目は、「福島県教育庁社会教育課」だった。平成23年8月から平成24年3月まで8ヶ月の勤務だった。震災直前に相馬海浜自然の家に内示が出ていたこともあってか、私はそこで福島県の子どもの体験活動を支援するための「ふくしまっ子体験活動応援事業」を推進する役割を仰せつかった。実際の業務内容は、県内の各旅行業者から提出されるふくしまっ子関連の書類を審査するというものだった。始まった当初は混乱の極みであったが、徐々にシステム化されていった。そんな中、特に私は旅行業者からの「クレーム対応」に追われる日々を過ごすことになった。しかし、それまであまり経験したことのない電話での対応は、その後の職場でも生かされることになった。また、子どもたちと直接には一切関わらない行政の仕事を初めて経験したことも今となっては貴重な経験になったと思っている。

三つ目は、「福島県会津自然の家」だった。平成24年4月から平成28年3月まで4年間の勤務だった。教頭職2年目の時に社会教育主事の資格を取らせていただいていたので、それを生かせる職場だった。ここでは「利用される団体に寄り添い、利用者の立場にたった対応」というものを学んだ。また、利用される各学校を第三者の目線で見させていただいたことも、私にとって貴重な経験となった。さらに、時々偶然にも県内各地に散らばっている前任校に在籍していた子どもたちや、知り合いの先生方にお会いする機会があったことは、お互いに無事を確認し合い、懐かしさと共に大きな喜びであった。

四つ目は、「福島県企画調整部文化スポーツ局生涯学習課」だった。平成28年4月から平成30年3月まで2年間の勤務だった。県庁の勤務は2回目であったが、前回とは違って同じ職場に教員経験者はもう一人しかおらず、県職員の方々に囲まれて業務を行うことになった。私が担った業務の中心は、「震災の記憶と記録を後世に遺すということで、県が2020年夏頃に双葉町の中野地区に完成を目指している東日本大震災・原子力災害伝承館の中に納めるべき震災関連資料を収集すること」だった。これは、これまでに誰も行ったことがない業務であり、当初途方に暮れたが、様々な方々のご助力で少しずつ軌道にのせることができた。ここでは、教員の世界とはかけ離れた県職員の方々の業務遂行に対する「緻密さや厳しさ」を目の当たりにし、これもまた私にとって貴重な経験だった。

そして、五つ目は、現在の「喜多方市立堂島小学校」だった。平成30年4月、約7年ぶりの学校現場、しかも校長という責任のある立場での赴任となったが、「子どもたちの姿が見え、実際に関わることができる職場」であり、不安よりも期待する気持ちの方が大きかった。小規模校ではあるが、同窓会やPTAの組織がしっかり確立されており、様々な場面において「小学校のためなら」とできる限りの協力を惜しまないその姿にいつも感謝している。お陰様で子どもたちは心も体も健やかに成長している。

この10年を振り返ってみると、正に「渡る世間に鬼はない」ということだったと思う。赴任する各職場には必ず親切にいろいろと業務内容等を伝授してくれる人がいた。また、様々な業務を通じて教育関係者ばかりでなく多方面に繋がりができ、新たに知り合う人が増えたことも私の財産となった。今後も、これらの「人と人との繋がり」を大切に、常に子どもたちの目線で学校経営をしたり、「地域と共にある学校」を少しでも実践したりできる校長になれるようさらに努力していきたい。そして、それらのことが微力かもしれないが福島の復興に確実に繋がるものだと私は確信している。

「東日本大震災から10年目を迎えて」

会津美里町立本郷小学校 校長 高橋 裕昭

東日本大震災から10年目を迎えようとしている今、改めて犠牲になられたみなさまのご冥福と、行方不明の方々の一日も早いご無事の確認をお祈り申し上げます。また、被災された方々や避難を余儀なくされている方々をお見舞い申し上げます。

私は、両沼支会の一員として、「東日本大震災から9年目の今、被災地の現状と復興状況を把握し、今後の学校経営に資する」ことを目的に、令和元年10月31日（木）、東京電力（廃炉資料館、福島第一原子力発電所）並びに富岡町立富岡第一・第二小学校を視察いたしました。ご多用の中、岩崎秀一校長先生、渡邊かおり校長先生はじめ、関係の方々みなさまに御礼申し上げます。

東京電力福島第一原子力発電所では、発電所構内をルートに従ってバスで視察いたしました。廃炉に向けた確実な歩みと、一方で、燃料デブリ等の取り出しの難しさを目の当たりにしました。

富岡第一・第二小学校では同校の実践についてご紹介いただきました。地元で2校が再開されるまでの経緯や現在取り組んでいる実践（テレビ会議システムを使った遠隔授業やコミュニティの拠点となる学校づくり等）をスライドショーで視聴し、子どもたち一人一人の笑顔がとても印象に残りました。そして、「中学校卒業時点で、他者に科学的な根拠を基に情報発信できる力を身に付けさせる」という言葉が強く心に残りました。

新学習指導要領の総則では、「前略～、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、～後略」とあります。まさに、目の前の子どもたちが、将来福島を離れて、国内や世界で活躍する時に、誇りをもって「ふくしま」を語り、自信をもって道を切り開いていく資質・能力の育成が大切だと思いました。

本校の教育目標は、「笑顔と夢にあふれる本郷小学校」です。子どもたちの将来の「笑顔」や「夢」のために、今私が目の前の子どもたちにすることは、放射線教育を一層充実させることと、郷土を愛する心を育てることだと、心新たにいたしました。

廃炉まで30年とも40年とも言われています。現在の小学生は、まさに社会を担う主役となっています。奇しくも今年度のノーベル化学賞受賞の吉野彰さんは企業研究者です。東日本大震災、原発事故を経験した（している）「ふくしま」から、将来ノーベル賞受賞の知らせが届くことを願っています。



福島第一原子力発電所にて

南会津町立田島小学校 校長 高橋 弘之

3月11日、私は、県庁西庁舎11階の企画調整部文化スポーツ局生涯学習課に勤務していた。回りのロッカーが次々と倒れ、エレベーターは緊急停止。11階から階段で避難したことを思い出す。外は、雪の舞い散る日だった。次の日から、私は、自治会館に設置された「住民避難班」に配属され、夜8時から朝8時の勤務になった。その時、富岡町のビッグパレット大移動を知ることになる。その後、ビッグパレット、あづま体育館での住民避難のお手伝いをさせて頂いた。あの時こそ、命の大切さを感じたことはない。今も避難されていた皆さんの顔を忘れることができない、辛い記憶です。

避難所となった
あづま体育館の様子

南会津町立田島第二小学校 校長 大塚 聖子

2時半に、中学校の制服の採寸のための業者が2名きた。そして、その時がきた。職員室にあった各携帯電話が一斉にけたたましく鳴り響いた。1階にいる1・2年生。担任がいる。3年生以上は2階。5・6年担任は休暇。3・4年担任とともに全員で鼓笛の練習中。子どもたちのところへ階段を駆け上がる。すでに全員が「落ちてこない・倒れてこない・動いてこない」安全な場所で身を潜めていた。しかし、すぐに収まるはずの地震が収まらない。「大丈夫。もうすぐ地震は終わる。大丈夫。まだ、このまま。」と声をかける。「絶対に、この子たちの命は守る。」という強い思いだけだった。

南会津町立桧沢小学校 校長 酒井 央

被害に遭われた方の言葉。「3月11日を忘れないようにしよう、ということはよく言われます。しかしその日は、忘れないようにする日ではなく、忘れられない日です。忘れたいのに忘れられない日が3月11日です。いちばん忘れちゃいけないのは、なんてことない、ほんとうになんでもない日々です。幸せだったはずの、前の日なんじゃないかと思います。」

生きているということ、今を生きているということは、家族がいること、友だちがいること、ご飯を食べること、学校に行くこと、遊ぶこと、何かを頑張ること、泣いたり笑ったりできること……。

3.11は、日々の「当たり前」の幸せを大切にすることを確かめる日にしたいと思います。

南会津町立荒海小学校 校長 白井 秀行

その日、その時は三島小にいました。今まで経験したことの無い地震に驚き、揺れが収まってからは子どもたちを安全に親元へ帰すことに専念していました。一息つけた頃テレビをつけると、これが現実なのかという映像を見て驚愕し、次の日から被害の少なかった我が家にも、ガソリン、物品不足など影響が出てきたことを思い出します。その後、異動で学校が変わるごとに、津波や原発事故で避難した方の話や除染作業の様子から、まだまだ私の知らないことが多いことを感じました。学校現場では常に災害に対しての最善の正しい判断が求められます。これからも震災で学んだこと・語り継ぐことを大切にしながら、児童の安全・安心を守れる学校を目指していきます。

南会津町立舘岩小学校 校長 和田 裕二

「その時」、3階の廊下に子どもたちといた。「すぐ収まる」と思っていたが、揺れは収まるどころか大きくなる。揺れている時間がとても長く感じられた。校舎がくずれるかも…。子どもたちも私も、死んでしまうかもしれない…と思った。揺れが小さくなった時に、身一つで急いで校庭に避難させた。停電により電話が不通の中、教師が付き添い子どもたちを下校させた。

この体験の中で、様々な判断、それも瞬間的にしなければならない場面が数多くあった。何よりも大事な子どもたちの命を守るため、最善の方法を探りながらの瞬間判断の連続。一つ一つの判断が正しかったのかどうか…今でも自問自答する毎日である。

檜枝岐村立檜枝岐小学校 校長 鈴木 路人

地震が頻繁にあると3・11を思い出します。海を挟んだ海外で地震による被害や影響があると3・11を思い出します。自然災害はいつ、どんな時に起こるのか分かりません。3・11は、みんながパニックでした。

そんな中、咄嗟の助け合いや励まし合いが、心の支えとなりました。大震災から約9年の歳月が過ぎ、あらためて人の繋がりのすばらしさを実感しています。日頃からの人の繋がりを意識したコミュニケーションの大切さや協力し合う組織としての取組から生まれる絆の大切さを伝えられるよう、校長としての人間力を高められるよう精進したいと思います。

只見町立只見小学校 校長 吉野 徹

巨大地震・津波による原発事故。連日流れる緊迫したニュース。物流が止まり、燃料や物資がなくなっていく。昼夜を問わずおそってくる余震。誰もが不安な日々を過ごしているとき、体調不良や家事都合で欠席する子どもが出てきた。欠席理由は、「風邪がみで」、「ちょっと家庭の事情で」、「〇〇県の家内の親の体調が悪いので」、「食材が手に入らないので、子どもたちを南会津の家で生活させます」など。本当の理由が、原発事故による避難だろうと思っても、表だって口にはしない。教職員の間でも不安が広がる。「原発、本当に大丈夫ですか。」ぼつんぼつんと空席のある教室。不安と疑心暗鬼の学校生活。大人だけでなく、子ども同士の関係までも、ぎくしゃくする雰囲気。もう二度とそんな経験はしたくない。

只見町立朝日小学校 校長 米畑 健一

以前勤務した学校で、当時の校長が全校集会の講話で、浪江町から埼玉県ふじみ野市に避難した小学4年生の女の子が書いた作文「おにぎりとおみそしる」を紹介しました。震災後のつらさとそこから得た教訓が、小学生目線で克明に描かれており、心に染みました。震災から月日が経ち、小学生の半数以上にとっては、生まれる前の出来事になりました。様々な工夫をし、この教訓をしっかりと伝えていくことは、私たち福島県の教員の大きな責務なのだと思います。

南会津町立伊南小学校 校長 中目 雅彦

東日本大震災当時、県北地方の教頭だった私は、子どもや教職員の安全確保のため日々奔走していたのを思い出します。単身赴任先のアパートは、全半壊の張り紙が貼られて部屋には入れず、車中泊生活を3週間程していました。そんな中、原子炉のメルトダウン・メルトスルーの情報が入り、PTA役員の皆様と相談の上、放射線測定器を購入していただきました。学校の敷地内はもちろん、通学路の放射線測定を行いました。郡山市の先進的な表土除去や水による除染作業を知り、PTAの皆様や敬老会、地区会長会の皆様の御協力を得て、校舎敷地内や通学路の除染をしました。放射線教育を正しく行うことが、福島に生きる子どもたちにとって必要不可欠なことだと強く感じ、現在に至っております。

下郷町立江川小学校 校長 川村 雅茂

震災から2年後、埼玉に全町避難していた双葉中学校へ異動となった。双葉町の50名以上の児童生

徒が、加須市の騎西小・中の学級に振り分けられて地元の子どもたちと共に学校生活を送っていた。私も騎西中の3年担任として勤務（併任）した。生徒は避難者として生活していたが、心配していた悪質ないじめなどは皆無であり、温かい支援の中、同じ中学生として勉強し、部活動を行い、明るい学校生活を送っていた。埼玉の先生方も生徒を分け隔てなく、厳しくそして温かく育ててくれていた。子どもたち、保護者の方と話をする多くの場で、人の温かさ、つながりを強く感じると皆が感謝の言葉を口にした。学校の再開等、課題山積の中、人の心の温かさを強く感じた。

下郷町立旭田小学校 校長 大桃 豊

震災後に避難所でインタビューを受けた小学校高学年のある女の子の言葉が今も心に残っている。「おいしいご飯を食べて、温かいお風呂に入り、ふかふかの布団で寝る、そういう普通の生活が本当はどれだけ幸せなことだったか今気付かされた・・・」大きく澄んだ瞳を見開いて、興奮した様子で彼女はカメラに向かってそう語った。子どもは子どもなりに、大人は大人なりに、国が、町が、あの震災から多くのことを学び、新たな価値観を抱いた。悲劇と挫折の代償としてもたらされたもの。私たち教員は何を学び、未来に向けてどんな一歩を踏み出せばよいのか、その責任と担った役割は大きい。

忘れないこと、そして問い続けること。

只見町立明和小学校 校長 穴澤 正志

これまで私たちの祖先は、津波、地震、洪水等様々な災害を体験してきた。その度に人々は災害について語り継ぐ必要性を感じ、悲惨な経験を話したり、石碑を建立したり、地名として残したりと何らかの形で後世に語り継ごうとしてきた。

しかし、残念ながら「人間は忘れる生き物」、当時の高い防災意識をつなぎ止めておくことは困難である。そのため同じ後悔を繰り返すという悲劇に見舞われることになる。しかし、防災意識を人の心の中に留めておくことができる手段があるとしたら、それは「教育」であろう。教育こそが災害の忘却を防ぐことができる唯一の鍵である。

私たち教育に携わるものには、防災に対し真摯に向き合わなければならない使命があると考えている。

（校長より教職員へ、職員会議にて）

「未来の命を守ること」

南相馬市立太田小学校 校長 高田 昌幸

平成23年3月11日、私は南相馬市小高区の小学校で東日本大震災を体験しました。経験したことのないような強い地震によって、プールから水があふれ出し、山の木々が狂ったように揺れ、駐車場の車がバンバンと飛び上がる中で、校舎の倒壊も懸念されるほどでした。児童を何とか家族に引き渡して帰宅し、翌朝、沿岸部を見に行ったときに巨大津波の被害を目の当たりにします。海岸の松林は跡形もなくなり、干拓によって拓かれた水田が昔のように湖沼に変わり、至る所に住宅の瓦礫が散乱していました。12日には福島第一原子力発電所1号機が水素爆発し、14日に3号機も爆発するに至って多くの市民が避難を始め、南相馬市は混乱を極めました。自分自身も新潟県に避難、南相馬市からの帰還命令により3月28日に原町区内の学校に戻りました。この時、前任校で教えた子どもたち、卒業生を含む約20名が津波の犠牲となったことを知りました。小学生の多くは迎えに来た家族と一緒に自宅に戻ったために津波に遭い、帰らぬ人となりました。学校にいれば死なずに済んだのです。また、卒業生の多くも、自宅が心配で帰宅する途中で津波に遭い、車内で非業の死を遂げました。私自身、リアス式海岸と違い砂浜には大きな津波は来ないと思い込んでいました。今までの教え子たちに、津波が来たときにどう行動すれば良いか教えてこなかったことが悔やまれます。震災から9年経って、今の小・中学生は震災後の生まれだったり、当時の記憶がなかったりする子どもが大半です。震災が過去のことになりつつある今こそ、学校が防災教育をしっかりと行い、この教訓を引き継いでいかなければなりません。

東京大学大学院情報学環特任教授 片田敏孝氏の「人が死なない防災」という本があります。片田先生は、「釜石の奇跡」と呼ばれる防災教育を推進した方ですが、この中の三つの原則「想定にとらわれるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」は、私たち教員にとって珠玉の言葉と言えます。また、相双地方にも「請戸小の奇跡」「真野小の奇跡」があります。当時の先生方の英断が、多くの子どもの命を救いました。私たち震災を経験した教員が、この事実を今の子どもたちに語り継いでいくことで、子どもたちが親になって子を守り、老いては地域を守ってくれるのです。10年先、20年先の「未来の命」を守るために、東日本大震災を経験した自分たちが、震災の語り部として事実を伝え、防災教育をしっかりと行うことが何よりも大切であり、教え子たちの尊い命を無駄にしないことだと自分に言い聞かせています。

「感謝そして改めて思う」

新地町立駒ヶ嶺小学校 校長 遠藤 和宏

東日本大震災当日、私は浜通りの正反対、南会津にいました。長い長い揺れがおさまリ、校舎を見回りましたが、特に何の被害もなく、図書室の本さえ1冊も倒れていませんでした。「気を付けて帰れよ～！」といつも通りに子どもたちを見送った私たちは、職員室のテレビでまさかの映像を見ることになります。それはまさしく「津波」の映像でした・・・・・・。

そんな私が、浜通りの学校に赴任しました。国道には「ここまで浸水区域」という看板が見られます。新地町の防災マップには浸水区域が表示され、火力発電所の建物が津波を食い止めたという話も聞きます。福島県で最も古い学校「観海堂」が津波で流失したことも知りました。校長のデータファイルには、地震後の対応の様子を詳細に記した記録があります。相馬地方はさぞかし大変だったのだらうと推測できます。このとき、学校を守るために必死で頑張っておられた校長先生をはじめ先生方には、感謝しないではられません。その先生方のご苦勞があったからこそ、私はここで仕事ができているのですから。そして、「相馬地方の子どもたちのために頑張ろう！」と改めて思うのです。

「あの日」

相馬市立八幡小学校 教諭 大槻 達也

娘の通っていた学校は、津波の被害に遭いました。校庭に避難していた子どもたち。子どもを迎えに来たおじいさんが、「こんなところではだめだ。高台に逃げなくちゃだめだ。」と校長先生に訴えたそうです。校長先生の判断で、先生方の車、迎えに来ていた保護者の車に分乗し、高台へ避難し、難を逃れることができました。一人の親として、子どもの命を守ってくれた先生方、保護者の方に感謝の言葉しかありません。

震災当日の夜から3日間、避難所での生活が続きました。避難所は電気が通っていましたが、断水で、トイレは不便な状態でした。食事は、おにぎりやカレーなど、ボランティアの方が炊き出しを行ってくれました。ニュースなどで見ていた避難所での生活が、自分の身に起こるとは思ってもみませんでした。「あたりまえ」が「あたりまえではない」生活の中で、「あたりまえ」のありがたさを初めて感じることができました。

「放射線被害から学び 伝えたいこと」

飯館村立草野小学校 教頭 烏中 雪野

東日本大震災後の原子力発電所の事故により、当時勤務していた小学校は、「緊急時避難準備区域」に指定され、6つの学校が30km圏外の避難先の学校にスクールバスで通ったことが昨日のようだ。6つの小学校が1か所に集まったため、校内は混みあった状態。放射線を考えて、窓は絶対に開けてはならず、マスクを着用しての生活が続いた。夏の暑さに耐える毎日。初めての給食は、おにぎり2個とヨーグルト1個。決して多いとは言えないが、感謝の気持ちで食べたことが懐かしい。半年後に避難指示が解除され、1月に自分の学校に戻る時、ともに頑張った小学生や他の教職員の方々へ涙を流して別れたことを今でも忘れられない。

その後、そんな私が教頭として赴任したのは飯館村立草野小学校。全村避難を余儀なくされた村の小学校。草野小学校・飯樋小学校・白石小学校の3つの小学校が隣町の川俣町に建てられた仮設校舎での生活をしていた。当時の仮設校舎は、2階を歩くと歩く音が聞こえ、教室の声すら下に聞こえる環境。手狭で校庭も狭く、50mを直線とるのがやっとだった。決して良い教育環境とはいえなかった。



三つの小学校が通った仮設校舎

しかしながら、そこで生活する子どもたちは未来をみつめていた。朝1時間かけてスクールバスで登校し、元気に学校生活を送り、1時間かけて下校する毎日の中で、一人一人が学びの連続性を展開し、未来を切り拓く力を育てていたのだ。

中でも特に目を見張ったのが、県内に先駆けての放射線教育。子どもたちが科学的根拠をもとに客観的立場から放射線をどうとらえ、判断し、行動していくのか、その力を育てる授業があった。全学年が飯館村の現状を基盤として、福島県の状況と向き合いながら、どう未来を切り拓いていくのか、その力を身に付けることができた子どもたちであった。

次に感動したことは、たくさんの支援と心遣い。当時の天皇陛下と皇后陛下の御行啓をはじめ、日本各地と全世界からの支援。震災後、9年が経とうとしているが、まだ子どもたちを忘れずに支援と交流を続けてくれていることに感謝する毎日である。

そして川俣町の支援。仮設校舎で不十分な教育環境を川俣町の人々が支えてくれた。児童同士の交流、プールの借用等。川俣町立飯坂小学校のプールの使用を承諾いただき、夏の水泳活動をすすめることができた。川俣町最大のイベント「コスキンパレード」に全児童で参加し、交流できたことは大切な思い出のひとつである。



子どもたちを元気づけようと飾ったこいのぼり

さらにはPTAの支援。夏のいいたてっ子夏祭り。PTAの役員が「何年も避難生活をしている子どもたちに元気になってもらいたい。」と夏休み期間中に流しそうめん・ゲーム等、たくさんの思い出に残るイベントを作ってくれたことだ。

平成30年。本村での学校再開。開校式で代表児童の言葉に「今まで支えていただいた人々に感謝するとともに、校庭で思いっきり大きな声を出してみたい。」という気持ちに感動した。今、恵まれた教育環境のもとで、子どもたちはよりよい未来を自分たちの力で創り上げようとしている。



2018. 新校舎で学校再開

飯館村の子どもたちは、全国・全世界に向けて、自分たちが学んだこと・体験したことについて発信している。

○オリンピック500日前プロジェクトでの発信

○渋谷公園通り花フェスティバルでの発信

飯舘村の未来・福島のために、自分たちはどうあるべきかを考え、行動を始めている。私はそんな子どもたちと関わりながら、過去の経験を生かして未来を切り拓く力を育てていくことが本当に大事であるとする毎日である。教頭として地域とともに子どもたちの頑張りを応援していきたい。

葛尾村立葛尾小学校 校長 遠藤 裕一

あきらめないことと、感謝の気持ちを持つことの大切さを改めて痛感した。

双葉町立双葉北小学校 校長 松本 美穂子

常日頃から対策を考えておくことこそが、災害に対する最大の備えである。(避難訓練・教師や家族との話し合いなど)

家や学校の近所の方との絆づくりが命を救う。日頃のあいさつを大切にしたい。

双葉町立双葉南小学校 校長 泉田 淳

校長は、ハザードマップや過去の被災の歴史・地勢等をよく理解し、市町村及び自校の防災計画を確実に理解していなければならない。いざ発災の際には、適切な判断を、勇気を持って瞬時に下す責任がある。常日頃からその覚悟を忘れてはならない。(東日本大震災発災時、「国道6号線より海側の地域の子は保護者にも引き渡すな。ここが、津波からの避難箇所だ。」と第1避難所である校庭に児童を迎えに来た保護者に向かって、大声で何度も呼び掛けるように、教頭であった私に的確に指示した当時の大甕小学校長平間勝成先生への尊敬の気持ち。津波に殉じた方々への慰霊の心を込めて。合掌。)

「哺乳瓶を貸してください。」(震災当日、避難所になった学校の体育館で若いお母さんから言われた一言。哺乳瓶どころか、水も、食料も、毛布も何もなく、停電で電灯もストーブさえも使えない、真っ暗でひたすら寒い、名ばかりの「避難所」だった。しっかり備えなければならない。)

「お父さんもお母さんも学校で子どもたちを守らなくてはならないから、すぐに迎えに来てはもらえないと覚悟していたよ。」(深夜になって避難所でやっと会えた息子に言われた一言。申し訳なさも感じたが、それ以上に、いつまでも子どもだと思っていた息子の成長と頼もしさを実感できた。)

「頑張っているよ。もちろん。」(震災直後の混乱の中、私がかけた「頑張りましょう。」に対して決然として答えた保護者の勇気に満ちた一言。)

「大丈夫かい。困ったことがあったら何でも言ってね。」(大学時代の友人からいち早くかかってきた電話で人の心の温かさを感じた一言。)

「いつでも帰っておいで。ここがあなたの家なんだから。」(避難先を求めて彷徨っていた私にかかってきた、家族や親戚のつながりの強さを感じた義姉からの電話の声。)

「こんなに贅沢なもの、食べていいの？」(避難先を探して彷徨っていた時、疲れて入った牛井屋で、何の変哲もない牛井並を前にして息子が言った一言。一瞬にして避難民に変わる可能性がある。)

「ゴミ箱、注文を受けた数だけ全部納入したでしょうか。」(原発が水素爆発し、今まさに教頭も避難しようとした時、学校にかかってきた納入業者の女性の一言。こんな時にさえ、正直に誠実に職務を全うしようとする日本人の凄さを感じた。)

「東日本大震災の被災者の皆様に募金をお願いします。」(避難先で立ち寄ったショッピングモールで聞いた募金活動をしていた男子高校生の腹の底から響くような声。日本という国の未来と日本の若者を信じ、感謝した。勇気を奮い立たせてくれた一言。)

「福島県の私の息子が、将来、もし、皆さんの娘さんに結婚を申し込んだとしたら、(放射線被曝が心配だからと)決して反対しないでください。それが、人権教育です。」(埼玉県の人権教育集会において、福島県の児童がおかれている状況を発表した際に、数百人の参加者に向けて私が訴えた一言。)

「『復興』とは、双葉に笑顔が戻ることです。」(テレビ局のインタビュアーから「復興とは何か。」と問われ、児童が発した一言。)

「今度はぼくたちの番。」(西日本豪雨に際して募金活動を提案するに当たって、児童が壁新聞に記した言葉。)

「君たちには、地震と津波と原発事故を乗り越えてきた強さがある。全国の人々から応援してもらったことに対する感謝の気持ちも忘れないでね。」(Y氏が子どもたちに語りかけた言葉)

「前を向いて歩こうよ。涙がこぼれたっていいじゃないか。(中略) 一人ぼっちじゃない。」(復興祈念コンサートで双子デュオが「上を向いて歩こう」の替え歌の歌詞。思わず涙がこぼれました。)

月並みだが、日常や普通、当たり前のことこそが、有り得ないほど「有り難い」(そうあることが奇跡であるほど不思議な) ことであるということを思い知らされた。普通に感謝。日常を大切に。

「真実は、いつも、一つ。」ではない。「真実は、いつも、一人に一つずつある。」(被災、避難の混乱した状況においては、一人一人が体験したこと、見たこと、聞いたこと、したこと、話したことの全てが真実である。)

「思いやる気持ちに支えられて～おにぎりと軍手～」 いわき市立江名小学校 校長 小野 信尚

震災当時、私はいわき市立勿来第二小学校に教頭として勤務していた。勿来二小は、いわき市の南部、茨城県との県境に位置している。海拔は5メートル、海までは直線で約400メートルである。

大地震は、集団下校後に発生した。これまで、経験したことのない揺れが長い時間続いた。地震直後から、学校へ続々と地区民が避難してきた。勿来二小は海拔5メートル、海も近い。津波対応の避難所としては成立しない。避難してくる皆さんを高台の中学校へと誘導した。それだけで、精一杯だった。続々と避難してくる人たち、対応に追われる職員、ちらつく雪、あつという間に日が暮れていった。降り続く雪と寒さと夕闇と・・・、学校に避難させてほしいという高齢者や地区民の声に、泣く泣く学校への避難を受け入れた。少しでも高さのある3階の教室を避難所として提供した。午後8時頃、ようやく避難者が落ち着いたところで校地内の安全確認を行った。校地東側プールの縁まで津波が押し寄せているのには愕然とした。その後も強い余震が何度も続く中で、職員室でなんとも言えない不安な一晚を明かした。そんな中、翌朝に起きた2つの出来事を今でも鮮明に覚えている。

一つ目は、学校の近所の皆さんが協力して、温かいおにぎりを学校に届けてくださったことである。自分たちだって困っていたはずなのに、「学校に避難している人たちが困っているだろう。」「お腹を空かせているだろう。」と心配してくださったのである。昨晚から、わずかな乾パンしか口に入れていなかった皆さんが配られたおにぎりを大事そうに食べる姿が忘れられない。二つ目は、灯油を届けにきた給油所の若者の対応だった。私が、寒さの中で素手で灯油のタンクを運んでいる姿を見て、「寝てらっしゃらないんでしょう。大丈夫ですか。」「この軍手を使ってください。」と声をかけて、真新しい軍手を私に差し出した。先の見えない夜を過ごした私にとって、近所の皆さんや若者の言葉は大きな励みとなった。この時もらった軍手は今でも私の宝物になっている。

これからの人生も予期せぬ事態が身に降りかかってくることが十分予想される。そんな時、私自身も震災の時の近所の皆さんや灯油を届けてくれた若者のように、人を思いやる気持ちをもって行動できる人でありたい。人を思いやる気持ちは、人を動かす大きな力になることを信じて。

「東日本大震災を忘れない」 いわき市立菊田小学校 校長 大槻 貴

当時、私はいわき市内の小学校で唯一、校舎に直接津波の被害を受けた永崎小学校の教頭をしていました。地震の揺れは大きく、職員室にいても、立っていただけませんでした。児童はすでに下校してしましました。揺れが収まると、校舎内にいる先生方や児童クラブの児童らと約1km離れた校舎裏側高台にある公園に避難しました。その時に真っ白な雪が降ってきたので集会所に入らせていただき、そのまま避難所として先生方や一緒に避難してきた児童、学校のご近所の方々等と眠れぬ夜を過ごしました。

夜明けすぐ、学校へ行きました。学校は泥をかぶった極端に言えば土色一色でした。校舎1階は何度も津波が押し寄せたことが一目で分かるような泥の横線が窓や壁に何本も残っていました。机や椅子は泥や土にまみれ、漂流物等が散乱し、教室や体育館の床ははがれめくれ上がっていました。体育館のピアノは泥まみれで全く別な場所にありました。教職員の車は何台も津波に流され、数台は体育館の出入口に詰め込まれたようになっていて、何故かその車のクラクションがピーーーーと荒涼の校庭に鳴り響いていました。この状況を目の前にして、これからどうしたらいいのかすぐにはわかりませんでした。

4月になり被災した学校が合同で入学式を市文化センターで行い、第1学期始業式も行いました。校舎は使えないため、近隣の江名小の校舎を間借りして学校生活が始まりました。江名小の先生方や児童までもが親切にしてくれました。また、多くの方が児童を激励にいらしたり、支援物資を送ってくださった等、ありがたさが身にしみました。市教委や事務所等の関係機関からも様々なご支援とご指導をいただきながら毎日を過ごしました。8月に校長先生が替わりましたが、どちらの校長先生からも学校のために強い信念を持って学校経営にあたる大切さを教えていただきました。また、この時期を一緒に過ごした先生方(江名小の先生方も)の献身的な努力も忘れられませんし、忘れてはいけないと思っています。1年後の3月の土曜日、卒業式前に元の校舎に引っ越しました。3月という忙しい中にもかかわらず、市内の先生方はじめ、いろいろな方々が引っ越しの手伝いに来てくれました。涙が出るほど感激しました。ここに書ききれなかった方も含めて多くの方のご理解やご尽力があったからこそ今の自分

があると、事あるごとに思い出し、奮起し、微力ながら校長職に励んでいるところです。

「油断大敵」

いわき市立上遠野小学校 校長 大沼 廣記

あの「3・11」から9年と8カ月が経過しようとしている。自分の中ではあの津波で児童2名の尊い命を失ったこともあり、(忘れないせいか)記憶が曖昧になっている部分もあるがこれからの人々のために何かしら参考になることを記録できれば、と思い至り、記憶を呼び起こしてみることにした。

肝に銘ずべきことは「油断大敵」という昔からの格言である。「3・11」からさかのぼること約1年、2010年2月27日に南米チリで大地震が発生し、日本の太平洋沿岸部にも津波警報(所によっては大津波警報)が発令された。当時いわき市立豊間小学校教頭として勤務していた私は「1960年のチリ地震による津波が再現されたら大変だ」という思いで週休日に学校へ詰めていた。テレビでは太平洋沿岸の各地の漁港等の様子がライブで流されている。「小名浜港への津波到着は〇時〇分!」という時間に私の緊張はピークに達したが、テレビに映った小名浜港は、それは静かなものだった。その時、私の脳裏には「地震による津波は万一発生してもたいしたことはない」ということが刷りこまれてしまった。

そして3月11日、児童たちが一斉下校で校門を出て少し進んだとき、あの大地震が発生した。もう一人の職員と共に約20名ほどの児童たちに追いついた私は「早く子どもたちを家庭まで送らなければ……」という考えしかもてずに、繰り返し起きる余震におびえながら学校からどんどん離れていった。14時55分頃、職員が車で我々に追いつき「津波が来ます!」と伝えてくれた。正に天からの声であった。

「そうだ、地震が起きれば津波が来るかもしれない!」と気づき、急いで学校へ引き返して事なきを得た。あのまま進んでいけば、間違いなく15時10分発生の大津波にさらわれていたであろう。

ちなみに豊間・薄磯地区でお亡くなりになった多くの方々も「津波なんか絶対にこない。くるわけがない。」と言っていた方が多いと聞いた。そう、油断大敵。地震の後は津波に備えるべきである。

また「てんでんこ」も極めて重要な考え方である。命に危険が差し迫っているとき、最終的に頼りにできるのは「自分自身の判断」である。この「てんでんこ」の考えが徹底できていれば、2名の児童も助かっていたかもしれない。今回「3・11」を振り返ってみて、有事の際どんな行動をとるべきか正しく判断する力を身につけさせていくことが我々教員の大きな使命の一つだという思いを新たにしたい。

子どもたちへ

『釜石の奇跡』に学ぶ

伊達市立柱沢小学校 校長 熊坂 吉徳

東日本大震災時における「釜石の奇跡」に多くのことを学びました。毎年の避難訓練「釜石の奇跡」を参考に、次のことを話しています。

- 1 常に真剣に取り組むこと
- 2 普段の生活に一生懸命取り組むことの大切さ
- 3 冷静にそして周囲の状況を確認しながら避難することの大切さ

過去の事例に学び、子どもたちが一番大切な命を自ら守ることができるよう指導していきます。

「災害に対する正しい知識を」

伊達市立栗野小学校 教諭 志賀 千紘

私は中学生の時に原発事故が起きました。その時は、放射線とは何かをよく知りませんでした。この経験から、正しい知識を持ち、適切に判断・行動することが自らの命を守ることであることを知りました。私は、今教員となり、子どもたちに、災害に対する正しい知識を伝え自ら判断する大切さを伝えていかなければならないと心に誓っています。

「私の使命」

伊達市立掛田小学校 教諭 加藤 佐和子

2011年3月11日、私は高校1年生だった。海が自慢の町は津波で全く違う景色になり、友人の家も流され、災害の恐ろしさをあのとき初めて体感した。教師になり、震災を知らない子どもたちに災害の恐ろしさ、命を守る方法をきちんと伝えていくことが教師としての自分の使命だと思う。「ここは大丈夫」はない。万が一を想定した早めの行動で、大切な自分の命を守れる人になってほしい。

「避難訓練は大切な行事」

伊達市立小国小学校 教諭 内藤 雄一

あの日、3年生だったM君は下校途中でした。M君の前後を1・2年生も歩いていました。ものすごい揺れ!「田んぼに逃げるよ!」

とっさに M 君は近くにいた下級生に叫びました。数十分後、田んぼの真ん中で身を寄せ合うようにしていた M 君と数名は、近くのおとなの人に助けられました。避難訓練でいつも校庭の真ん中に逃げていた経験が生きた瞬間でした。避難訓練は大事。真剣に取り組みましょう。

大玉村立玉井小学校 教頭 鈴木 浩記

一人一人の命には意味があり、生かされているもの。命あることに感謝し、自分らしく、精一杯生きる。

「目の前にいる子どもたちへ」

桑折町立睦合小学校 教諭 高見 瑞子

目の前にいる子どもたちは、東日本大震災を全く知りません。震災の恐ろしさ、震災によって家族や大切な人を亡くした人の悲しみもわかりません。しかし、一緒にいる家族や、いつも当たり前にいる人との別れが突然訪れるのが災害です。災害は防ぐことができません。だから、家族やいつも一緒にいてくれる人を大切にしてほしいです。今、「普通に生活していることが幸せなんだ。」ということ子どもたちに伝えていきたいと考えています。

二本松市立油井小学校 校長 高橋 健一

正しいことは何なのか。正しい知恵と想像力を身につけよう。だから勉強するのだ。こんな時こそしっかり学ぼう。(当時勤務していた昭和中学校で発行した震災直後の学校だよりの見出しより)

二本松市立安達太良小学校 教頭 渡辺 敏夫

当たり前と思って、何不自由なく生活しているとわからないが、震災でわかった普通に過ごせることのありがたさ。生活を支えてくれている人、物に感謝。

本宮市立本宮小学校 教頭 赤間 聡

人が生きるということは、誰かに借りがあるということ。人が生きるということは、その借りを返しながらか生きていくこと。感謝の気持ちを大切に。

二本松市立塩沢小学校 教諭 杉本 朋子

ふだんの何気ないこと。それらが当たり前に行えること。普通に過ごせる毎日が、一番の幸せ。

二本松市立石井小学校 教諭 渡邊 吉隆

計り知れない不安・苦悩の日々から、大いなる希望の光が見えている。苦しいことやつらいことがあればチャンスに変え乗り越えるんだ。支えてくれる周囲に感謝し、未来に向かってより強く高く。

大玉村立大山小学校 教諭 日下部 正和

食べ物を不安なく食べられること。校庭で楽しく元気よく遊ぶこと。あたりまえの毎日に、感謝。

本宮市立岩根小学校 教諭 田河 康秀

食べることができる。布団に寝ることができる。家に帰ることができる。当たり前のことが失われて、初めて、その幸せを知る。

本宮市立糠沢小学校 教諭 藤堂 剛史

震災を経験していなくとも、いざというときの心は忘れるな。常に高いアンテナと確かな情報で自分の命は自分で守る。

「“つながる” おもい～未来を引き寄せる大きな力～」

天栄村立湯本小学校 教諭 星 克明

東日本大震災の年、私は6年生15名の担任をしていました。4月当初は、震災と原発の問題で、楢葉やその近辺の市町村から多くの方々が、学校のある温泉街の旅館や民宿に避難され、先が見えない不安な日々を過ごしていました。私は、避難された方々の、二度と戻ることが叶わないかもしれない故郷への思いにふれるたび、微力ながら何かお手伝いすることができないか、と考えていました。そこで、子どもたちにその思いを伝えました。すると子どもたちは、みんなで千羽鶴や応援メッセージを書き込んだ運動会のお知らせをつくり、それらを手渡しするために、

民宿や旅館、ホテルを歩いて回ってくれたのです。運動会当日、子どもたちの呼びかけに応じてくださった、予想を遙かに超える数の避難された方々が、小学校の校庭に集まりました。そして、あの忘れられない瞬間がやってきます。子どもたちと避難されてきた方々との、一步も引かない本気の綱引き勝負。会場は一気に盛り上がり、子どもたち、避難された方々、その両方に会場から大きな声援が送られました。白熱の引き合い。雌雄が決するピストルの音。なんと、避難された方々が、数的不利をものともせず、前評判を覆し、子どもたちに勝利したのです。その瞬間、会場は割れんばかりの拍手と声援に包まれました。万歳をし、笑顔で喜び抱き合う避難された方々の姿から、会場に居合わせた全員が、特に本気をぶつけ合った子どもたちが、受難を乗り越え、未来を切り拓いていこうとする、避難された方々の力強い意志と勇気、それ以上の熱い何かを感じているように、私には見えたのです。

そんな子どもたちも今年の夏、令和最初の成人式を迎えました。私も当時の担任という肩書で式に同席させていただきました。ところが、空調の不具合で会場が大変暑くなり、汗だくの、ある意味忘れられない成人式となりました。でも私はその時、この暑さは「空調の故障のせいだけではないのでは？」と思ったのです。もしかするとそれは、機能性の高い空調のコントロールさえ及ばない会場の熱気こそ、あの時、子どもたちへ綱伝いに伝わってきた、避難された方々の困難を乗り越え生きていこうとする熱い魂の雄叫びを、今でも身体のだこかに宿し、それが彼らの中で確実に生き続けている証なのではないか、と。成人となった子どもたちの、未来を見据え力強く一步を踏み出す決意を漂わせる凜とした表情は、あの時子どもたちに対峙し、綱を強く握りしめ、競技開始を告げるピストルの合図を待つ避難された方々のそれと、どこかシンクロして見えたのです。果たして、それは、会場の熱気と暑さが私に見せた幻影だったのでしょうか。

南会津町立南郷小学校 校長 湯田 眞佐利

平成31年度、放射線教育・防災教育の実践協力校として実践を積み重ねた。高学年は、子どもたち自身が主体的に放射線について調べる中で、南会津地域も農業や観光業で風評被害の大きな影響を受けたことを知った。地域のゲストティーチャーから、風評被害と必死に戦ってきた話を聞くときの、真剣なまなざしを忘れることはできない。子どもたちはこの時、放射線に関わる様々な課題を克服し、地域の将来を担う人材に育ってほしいという、大人たちの熱い思いも受け取った。この学びを糧に、これからも学び続け、正しい知識を身に付け、自分で考え、判断し、行動できる大人に成長してくれることを願っている。

下郷町立檜原小学校 校長 酒井 健

震災当時、郡山市の小学校で教務主任をしていました。市の判断による臨時休業、予定していた卒業式の可否・会場変更、押し寄せてくる原発事故の避難エリア拡大等、毎日がめまぐるしい日々であったことを思い出します。

新年度になり、郡山市には多くの避難された方々がおりました。そのような中、分科で担当した学年の音楽科の授業で、「ビリーブ」を歌っていた時、ある女の子が、涙目で私にこう言いました。「先生、この歌を避難されているたくさんの方たちの前で歌いたい。この歌で元気づけてあげたい。」自分たちよりも苦しんでいる人のために・・・なんてすてきな言葉なのか、なんて優しい心なのか、私はピアノの前で思わず涙がこぼれました。その子は、現在、高校3年生です。



校庭に埋めていた表土の搬出
(パイロット輸送)の様子

3・11集会、鎮魂の集い等の校長の言葉

「平成30年度 3・11集会挨拶」

前 福島市立野田小学校 校長 佐藤 一男

7年前、大きな地震があって、北側の校舎が壊れてしまいました。

皆さん、この体育館を見てください。7年前、この体育館を3年生と6年生の教室にしていました。(北)こっち側が6年生5クラス、(南)こっち側、校庭側が3年生5クラスです。白い板をたくさんつないで、仕切りを作って教室にしました。天井はありません、これくらいの高さの仕切りだけです。こっち側の3年生もおんなじです。パネルという板で仕切って、そこに机を運んで、教室にしました。全部で300人くらいが、ここで勉強しました。

さらに、5年生は、野田中学校の空いている教室を借りて勉強しました。みんなとは違う中学校まで行って勉強していました。5年生だけ、離ればなれになって、勉強しなければならなかったのです。そうやって、4月、5月、6月、7月と1学期間勉強しました。

皆さんの、先輩、野田小学校のその頃のお兄さんお姉さんは、そうやって勉強しました。それでも一

生懸命勉強しました。今みたいに、エアコンなんてありません。あったのは扇風機だけです。体育館は本当にうるさいし、暑かったです。でもそういう中でも、皆さんの先輩は一生懸命勉強しました。運動しました。本当によく頑張ったな、立派だなと思います。

負けないぞ、という強い心と、勉強しようという気持ちがあれば、勉強はどこでもできるのです。本がないからとか、パソコンがないからとか、塾に行っていないからとか、一人の勉強部屋がないからとか関係ありません。勉強しようという思いがあれば、勉強はどこでもできます。

さて、先ほど「黙祷」をしました。7年前の地震の時は、その地震ですごく揺れたので、海に大きな波が来て、たくさんの人が、その大きな波にさらわれて、亡くなりました。全部で18,000人くらいの方が亡くなりました。死んでしまったのです。

18,000人って、校長先生も想像できないのですが、野田小学校は748人いるので、その24個分の人です。それくらいの方々が亡くなったのです。亡くなった皆さんは、きっと、もっと運動したり、勉強したり、遊んだり、お話ししたりしたかったと思います。もっとお仕事をしたかったと思います。人の役に立つことをしたかったと思います。でも、なくなってしまいました。

皆さんは、こうして元気に生きています。そのなくなった皆さんの分も、皆さん一生懸命がんばってほしいなと思います。一生懸命勉強しましょう。一生懸命運動しましょう。友達と楽しく遊びましょう。あいさつも返事も元気にやりましょう。いろんな人とおはなししましょう。給食も残さず食べましょう。そして、自分のことだけでなく、人の役に立つこともがんばりましょう。平成30年3月9日

「平成30年度 東日本大震災から7年 亡くなられた方々の御霊に祈り復興、防災を誓う」

福島市立笹谷小学校 校長 福士 久子

7年前、平成23年3月11日、午後2時46分。未だかつて経験したことのない巨大地震が東日本を襲いました。とてつもない津波と引き波が海辺の市や町を飲み込みました。福島第一原子力発電所の水素爆発により、放射能という目に見えない恐怖が、福島県に住む私たちを襲いました。そして、多くの尊い命が奪われました。

残されたのは、深い深い悲しみ。瓦礫。風評の波。放射線量が高く故郷に帰れない帰還困難の無念。避難先でのいじめに苦しむお友達。しかし、今ここにいるのは、確かに生きて前向きに進もうとする私たちです。

あの震災の時、皆さんはどこにいましたか。小雪ちらつく寒い中、家の人が迎えにくるのを、じっと待っていた笹谷小学校の子どもたち。今の6年生は、あの時まだ幼稚園、保育園の年中組でした。あの時、急に大きく右に左にと教室が揺れて、下から突き上げるような縦揺れも起こりました。ものすごい風が吹いているようにも感じました。教室の棚のものが、がらがらと落ちてきたり、机が、あっちこっちにと大きく揺れて、立ってはいられませんでした。笹谷小学校の子どもたちは、皆先生の言うとおりの机の下にもぐり、しがみついて揺れの恐怖に耐えていました。先生は、教室の入口の柱につかまって、必死に子どもたちを励ました。

「大丈夫だ、大丈夫だ、慌てるな」と。今もその時の恐怖と驚きを忘れることはできません。

そのあと、雪がちらつく寒い校庭で、お家の方が迎えに来るのを待っていました。待っている間も、幾度となく揺れがおそいました。校舎の窓ガラスや校庭の桜の木々が、ぐらぐらと揺れているのがわかりました。家の前に着いても、怖くて足がすくんで家に入るのが怖かったという人もいました。

6年生のAさんは、あの時まだ5歳。ちょうどあの大地震の時、イオンの駐車場でおばあちゃんの運転する車の中にいたそうです。ぐらぐらと揺れる車の中で、3歳の弟の手をしっかりと握って、揺れに耐えていたとのこと。道路のマンホールからは、水が噴き上げているのも見たそうです。そして、その時、Aさんのお母さんのおなかには赤ちゃんがいました。お母さんは、おなかの赤ちゃんを守って、揺れに耐えていたそうです。その2ヶ月後、無事にAさんの弟が生まれました。無事に生まれて来て本当によかった。命の尊さを改めて実感する話です。

また、6年生のYさんは、あの時、ものすごい揺れに驚き、外に出て庭にしゃがみ込み固まっていたとのこと。何度も地震警報が鳴り響き、寒くて、怖くて、暗かったと語っています。

同じく6年生のHさんは、3月13日が誕生日。しかし、あの時の、誕生日は、お祝いするどころではなく、祝ってもらえないさみしさ切なさだけが、今も心に残っているそうです。

6年のSさんは、浪江町に住んでいました。あの震災の時、大きな揺れに慌てて外へ。地面はひび割れ、何度も何度も揺れが繰り返し起こり、「僕は、死ぬのかな」と思ったそうです。家の中のピアノも冷蔵庫もテレビも、家具も何もかも、ぐちゃぐちゃにたおれ壊れ、足の踏み場もない状態だったとのこと。そして追い打ちをかけるように、原発の爆発事故。Sさん一家は、埼玉県へ会津へと何度も引っ越しを余儀なくされました。

避難解除になったとき、かつての自分の家のある浪江町に戻ってみたときのこと。その時、Sさんは、自分の家のあまりの変わりように、愕然としたと語っています。かつての自分の家は、まるで森の中のよう、うっそうと木々や雑草が生い茂って、かつての面影は全くなかったそうです。

でも今、ようやくSさん一家は、笹谷に、腰を落ち着かせることができました。Sさんが、こんな風に語ってくれて、力強く前向きに生きていることを感じ、校長先生は、とても嬉しく思いました。

宮城県石巻市立大川小学校。ここは、福島県のお隣の県にある海辺の小学校です。全校生108人中74人、先生方9人が津波の犠牲になるという大きな悲劇を受けた小学校です。一つの学校で失われた命の

多さとして最大の悲劇となってしまった大川小学校。本当に残念でなりません。大きな津波被害を受けた大川小学校の校舎は、震災遺構として残され、後世に語り継がれることとなりました。

1, 2年生は、あの震災の時、まだ1歳2歳の赤ちゃんでしたので、どんなことがあったのか、よくわからないでしょう。だからこそ、よくきいてください。そして忘れないでいてください。東日本大震災のことを。そしてその後起こった、福島第一原子力発電所の事故のことを。

水もでない、電気もつかない、食料もない、暖房もない、ガソリンもない、壊れた家々、ガラスの破片が飛び散った店。辛かったね。

あの時の6年生たちの卒業式は、ついに、行うことはできませんでした。卒業式の練習は、したのに。心を込めて歌う練習もしたのに。呼びかけのことばにたくさんの思いを込めて、巣立つはずだったのに。卒業証書は、あとで先生方が、一人一人の家々に回って届けました。寂しい卒業でした。

あの時の卒業生は、昨年3月、高校を卒業し、大学や、専門学校等それぞれの自分の道を切り開こうとしています。

そう、忘れてはいけません。覚えておかななくてはなりません。そして、伝えていかななくてはなりません。あの大きな地震があったことを。そしてそれを乗り越えて来た私たちがいることを。

校長先生は、あの震災の映像が流れるたび、語られる手記を読むたびに、今も涙があふれます。いじめなど絶対にあってはならぬことなのですが、福島の子どもということのでいじめがあったことも事実です。でも、そんないじめや風評被害や苦しいことなど、マイナスのことに立ち向かう強さと勇気を持たなくてはなりません。

あの震災のために亡くなられた方々15,895人。未だ行方不明の方,2,539人。そして今なお避難生活を続けている方々 全国に約12万人。

ちょうど1年前 震災から6年もたって、ようやく瓦礫と土砂の中から、遺骨が見つかった方がいます。震災当時7歳だった大熊町の女の子です。苦しかったでしょう。

あれから7年。復興を力強く心に刻み、一日一日 一年一年、震災以前の生活へと歩み続けてきた私たち。まだまだ時間がかかるかもしれませんが、一步一步震災前の姿に近づいています。

東日本大震災。試練と言うにはあまりにむごい仕打ちであったけれど、福島第一原子力発電所の廃炉には40年。放射能との戦いはこれからも続くけれど、どんな困難にあっても思いやりを忘れず、あるべき姿を失わず、強く生き抜く福島の子どもであること、そして日本人であることに誇りを持ち、しっかりと学び生きてほしいと思います。一日一日を大切に、今やるべきことをしっかりとやり遂げ、学んでほしいと思います。

今こうしていられるのも、震災の時も、またその後もたくさんの方々の支えや励ましがあったからです。これからも感謝の気持ちを忘れずに生活してほしいと思います。そして、友達を思いやり、友達の心の痛みや喜びをいっしょに感じられる優しく強い心を持ってほしいと思います。

あの時の震災を乗り越えられたのだから、少しの苦しみなどなんでもない、と言える明るさをもって過ごしてほしいと思います。

あの時に亡くなられた方々の御霊に祈り、これからの復興と防災を誓い、皆さんの命を精一杯輝かせてください。東日本大震災を乗り越え力強く生きる福島の子どもとして、自信をもって進んでください。

これが 校長先生の最大の願いです。

平成31年3月9日 ※ 東日本大震災3.11を迎え、「全校集会：鎮魂の集い」に寄せて

「記憶をつないで・・・仲間として」

田村市立大越小学校 校長 白石 修子

令和2年3月11日で、東日本大震災から10年目を迎えようとしています。現在小学校に通っている子どもたちは、大きな地震があったことも、ご家族や保育園の先生方が命がけで守ってくださったことも記憶にすらないようです。また、同じ市内には過去に避難を余儀なくされた方々はいても、ここ大越地区は大きな被害もなく、避難の必要もなく、ほぼ震災以前の生活にすぐに戻ることができました。

そんな中で成長してきた子どもたちには、未だに避難を強いられて自分の家に戻れずにいる方がいることを知り、同じ福島県民として何ができるかを考えてほしいと願って、昨年度「防災集会3.11」の中で次のように投げかけてみました。

(前略) 今日で、この大地震から8年が過ぎる。

皆さんの中には、この大震災のことをまだ小さくて、記憶の全くない人もいると思う。また、記憶はあっても月日がたつに従ってぼんやりとしか思い出せない人もいると思う。

しかし、福島に暮らす私たちは、あの日のことを忘れてはいけな。知らなければいけない。伝えなければいけない。今のわたしたちには何ができるのだろう。

今、ほとんど不自由なく過ごせている私たちは、避難している福島の仲間が福島に戻ってきたときに、「住みよいふくしま」を作っておく必要があると思う。

そして、共に福島を発展させるために力を尽くすことができる人になっておく必要があると思う。ぜひ、お家の人と、8年前のその日はどんな様子だったのか。その後、大人たちはどうやって暮らしていたのか。これからどうしていけそうか。などについて、話し合してほしい。

そうして記憶をつなぎ、福島を元気にしていくことが、福島に生きる私たちの使命である。

福島の未来を担う皆さんだからこそ、3月11日という日を大切にほしい。さらに、この震災

で失われた多くの尊い命を思い、犠牲になった方々全てのご冥福をお祈りする日でもあることを忘れないでほしい。

集会の後、会場を後にする子どもたちの表情が、少し引き締まったように見えました。

「平成31年3月11日の講話」

中島村立吉子川小学校 校長 石沢 泰蔵

今日は3月11日です。8年前の今日と同じ日、平成23年3月11日に東日本大震災が起きました。その時、だれも経験したことのない地震による大きな揺れと、地震がもとになって起こった津波が、東日本の海側を襲いました。福島県では、この大きな津波によって原子力発電所が事故を起こし、放射線から身を守ることにについて、正しく知ったり考えたりしなければならなくなりました。

この震災で亡くなった人は、日本全国では、約16,000人、福島県だけでは約1,600人とされています。今日は、朝のうちからテレビのニュースなどで伝えられていますね。皆さんは、家に帰ってから、東日本大震災に関係のあるニュースの中から、自分が関心を持ったことや、よく分かったと感じたことを心にとどめてください。

私からは、皆さんに見て欲しいものと聴いてほしいことを準備しました。

◇当時の朝刊：1面のみ3日分



平成23年3月11日 福島民報
地震など想像できなかったその朝



3月12日 福島民報
地震と津波の被害だけの新聞に…



3月13日 福島民報
原発事故が一番大きな扱いに…

◇児童作文：ふくしま子ども宣言作文コンクール作品「広がる未来」より

石川小学校 6年児童の作品（平成26年）※「ふくしま道徳教育資料集」に掲載

- ・酪農家、農家の方々が、放射線の影響（風評被害）で深刻な状況に陥って苦しんだこと
- ・家族が助け合って“広がる未来”と言える程の希望を持って頑張っていること

今日、午後2時46分に、村の防災無線で追悼（黙祷）の放送、サイレンがあります。担任の先生と一緒に、震災の日のこと、震災、津波で亡くなった人、被害に遭っても頑張っている人のことを思い描き、心を静かにしてみんなで祈りましょう。

双葉町立双葉北小学校 校長 松本 美穂子

絵本（「ひまわりのおか」「あのひのこと」など）の読み聞かせ

震災を知らない子どもたちが多くなっています。忘れないという今までの思いから、次は、語り継いでいくことが大切なのかと思います。

絵本を通じて、やんわりとふるさとについて・命の大切さについて・震災等について等を考えさせたい。

葛尾村立葛尾小学校 校長 遠藤 裕一

震災があり、避難した時には、昨年度の6年生が幼稚園に在学中であったため、当時の幼稚園の先生に小学校の「3.11集会」に来てもらい、避難から幼稚園を再開するまでのいきさつについてお聞きしました。

その中身は、昨年度の6年生は、避難してからも「葛尾幼稚園に通いたい。」「葛尾幼稚園じゃなきゃ幼稚園にはいかない。」と言っていたこと。

その気持ちを受けて、幼稚園を震災直後の平成23年9月から三春町の「たむら農芸センターさくら湖みどり館」を借用し「葛尾幼稚園三春分校」を開園したこと。

まとめると、子どもの思いを受けて幼稚園が開園されたという、双方の思いが重なって今があるということを、子どもたちに感じてもらうことができました。

川内村立川内小学校 校長 草野 収

震災以降おつきあいのある方や川内村出身の方、震災により川内村を離れた方など、現在も全国より様々なご支援があります。その都度子どもたちに話していることは「全国の方々よりの支援に対して、皆さんがその一人一人にお礼を言うことはできません。そこで、感謝の気持ちを表すには、皆さ

んが勉強や運動、学校の行事に一生懸命に取り組むことであり、地域のイベントに、積極的に参加し、元氣な姿を見せることです。支援してくれている人も、皆さんが元氣に頑張っている姿を望んでいることと思います。」ということです。

富岡町立富岡第一小学校 校長 岩崎 秀一

「これからを生きる子どもたちへ」と、震災後言い続けている内容。
 「笑顔」笑顔には自分も相手にも元氣にする力がある。笑う門には福来たる。辛いときこそ笑顔を忘れないように。
 「元氣」元氣があれば運動だって勉強だって頑張ることができる。そして元氣であれば人に優しくできる。
 「前向き」過去と他人は変えられないが自分と未来は変えることができる。夢や目標を持って生きてほしい。
 「感謝」震災後、全国のたくさんの方たちから支援を受けてきた。まずはそのことに感謝しよう。そして、大人になったら支援される人から支援する人になってほしい。
 以上が今でも言い続けている四つの言葉です。

式 辞

「平成23年度 浪江町立津島中学校 修了式 式辞」

福島市立福島第一小学校 校長 耕田 祐子

日時 平成23年7月23日

会場 二本松市勤労者研修センター

3月11日、マグニチュード9、10mをこえる津波、そして、双葉郡全体が原発事故にみまわれ、この日を境に、私たちの学校生活も日々の暮らしも一変しました。浪江町民全員が避難するという予期せぬ事態が突然訪れ、ご家族の方々をはじめ、皆さんは、どんなにか、戸惑い、不安で心を痛めたろうと思うと、今も、心が締め付けられそうになります。

東日本大震災から4ヶ月、大きな生活環境の変化に耐えて、皆さん、よく辛抱して新しい環境にたちむかってきましたね。とても立派でした。私は、皆さん一人一人の生活や学校での様子を、兼務で出向している先生がた、各校の校長先生がたから報告を受けていました。

両親から離れて親戚の家で頑張っている人、運動で活躍した人、借り上げ住宅から歩いて学校まで通っている人、地元の卓球教室に通って交流を図っている人、宿題を今までよりしっかりと取り組めるようになった人など、皆さんが環境の変化の中にあっても、自分のすべきことをしっかりと見つめ、一つ一つ着実に取り組んでいる様子を聞き、たくましさやしなやかさをうれしく感じていました。

現在浪江町は、復興に向けて町の再建計画を打ち出し、きめ細かな線量調査や町民の健康診断などを実施しています。これは、皆さんが安心してふるさとに帰るための道しるべを構築するためのものです。学校の放射線量は決して低くないですが、様々な方々の努力で帰れる日がそう遠くなくきてくれることを心から願っています。私は、皆さんの若いしなやかさやたくましが今後の町の復興の原動力になると信じています。

さて、23年度を迎え、皆さんがさらに成長するよう二つのことを心に刻んでほしいと思います。

一つは、「何事にも挑戦すること」です。被災していると、何をするにもおっくうになったり、うまくいかないことを他人のせいにし、気持ちが萎縮してしまうことがあります。でも、あえて、こんなときだからこそ、「挑戦する」気持ちをもってほしい。新しい環境だからこそ新しいことに挑戦できる。新しい学校、新しい友達、新しい夢など、勇気をもって挑戦していくこと。そして、皆さん一人一人が、今の環境の中にあっても自分を見失うことなく、自分のなすべきことを挑戦する気持ちで着実にやっていくことです。そんな、日々の積み重ねが、自分に力を付け、未来の自分を作り、ひいては、復興の力につながっていくと思っています。

二つめは、「絆を大切にすること」です。今回、各地からの励ましに、人のあたたかさ、つながりの大切さを感じることができました。人は一人では生きていない。家族の生活を守ろうと頑張っている親に、家族に、支えてくれる今の学校みんなに、地域の人に、支援してくれる日本中、世界中の人々に感謝し、人と人とのつながり「絆」を求め、大切にしていきたいです。

私は今、浪江町教育委員会で児童生徒の皆さんが楽しく学校生活を送ることができるよう教育相談活動などを行っています。役場にいると様々な方々がお見えになったり、連絡をくれたりします。日本全国から、ボランティアで相談活動をお手伝いする方、離れた知り合いを訪ねてくる方、本や学用品など

たくさんの物資もいただきました。人は人を支えたい、何かしたいという気持ちをもっているし、行動で表現したいと思っている人の絆、つながりをもとめていくことで心が豊かになれると感じています。23年度、「何事にも挑戦すること」「人との絆を大切にすること」この二つを心に刻み、充実した二学期・三学期を送ってほしいと思います。

保護者の皆様、本日はご多用の中、遠方よりお集まりいただきありがとうございます。突然、避難生活を強いられた心の痛みは察するにあまりあるものと思います。心よりお見舞い申し上げます。どうぞお心を強く持たれて、子どもたちに寄り添い、ご家族力を合わせてこの時期を乗り越えてほしいと思います。皆様のご健康とご清栄を教職員一同心よりお祈りいたしております。

最後になりましたが、今後の皆さんのたくましい成長を願い、式辞と致します。

浪江町立津島中学校長 耕田 祐子

注釈) 震災と原発事故後、津島中の生徒は、浪江町を離れ県内外に分散し避難しました。そのため、津島中の1・2年生は年度内に修了式ができず、7月23日に浪江町から離れた二本松市に集まり修了式を行いました。

「平成24年度浪江町教職員離任式 代表離任のことば」

日時 平成25年3月28日(木) 午後1時半

会場 浪江町役場大会議室

本日は、私たち転出者のために、町長様はじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、離任式を開催していただき、心より御礼申し上げます。

優しい日差しと海からのさわやかな春風に迎えられ、私たちは浪江町に着任しました。それぞれの任地において、地域の皆様に支えられ地域の特色を生かした教育活動を展開して参りました。元気いっぱいの浪江の子どもたち。ひたむきに学ぶ姿は、いつも、私たちに深い感動と力を与えてくれました。

23年度の教育構想を練り上げた矢先の3月11日。突然私たちを襲った東日本大震災および原発事故は、私たちと子どもたちから、学校生活の一切を奪っていきました。長時間に及んだ激しい揺れ、予想を遙かに超えた大津波、目に見えない放射能の恐怖、津島地区での避難生活、二本松方面への全町避難。そして、度重なる引っ越しと転校。避難生活は、子どもたちに取って私たち大人の想像をはるかに超える厳しいものとなりました。何も言えずに別れた友達、身近な大人の怒りと不安を目の当たりにした子どもたちの不安や葛藤は、どんなに大きかったことか。突然襲った現実のものとは思えない現実、私たちは教職でありながら、時に、自分たちではどうすることもできない無力感に襲われることもありました。

子どもたちを救いたい、不安を少しでも和らげてあげたい、何とかしなければ、という使命感が、私たちを突き動かし、兼務の傍らの教育相談や家庭訪問・学校訪問など、それぞれの立場でできる子どものケアを続けてまいりました。避難所を訪問した私たちを見つけて走り寄る子ども、堰を切ったように避難の経過を話す保護者の方々、役場で会った私を見て泣きじゃくる子どものほほをなでながら、その心の痛みの大きさに私の心も押しつぶされる思いがいたしました。

しかし、厳しい現実にあっても、子どもたちは少しずつそれぞれの環境を受け止め、次第に適応していきました。そのけなげな姿に、あらためて、子どもの柔軟さ・しなやかさを感じました。

この震災は、地域にとって学校が存在する意味は何か、真に子どもに寄り添うとはどうあればいいのか、保護者を支える教師の役割とはなど、普段の学校生活において、実践してきたことの意味をあらためて問いただすものとなりました。

浪江町を離れる今、この被災の経験を生かし、自分の職責を果たしていくことが浪江町での勤務の証であると思っています。新任地におきましても、地域における学校の役割を自覚し、誠心誠意、子どもたちの心に寄り添った教育に邁進して参りたいと思います。

子どもたちがふるさと浪江を目にすることは、まだ先になるかもしれません。しかし、人と人とのつながりこそふるさとです。私たちは、いつもどこにいても、浪江の子どもたちの応援団です。つながりを大切に、心のふるさととして、子どもたちをこれからも支えていきたいと思っています。浪江の子どもたちが、この震災の経験を生かし、広い視野と真に優しい心と知恵を持ち、未来の復興を担う人材として、たくましく成長してくれることを心から願っています。

復興道半ばの浪江町を去ることは、本当に心残りです。浪江町の復興と学校の再生を心からご祈念申し上げます。最後になりましたが、これまでご支援いただきました浪江町当局、浪江町教育委員会、関係の皆様方に深く感謝申し上げ、転出者を代表しての挨拶といたします。

本当にお世話になりました。ありがとうございました。

平成24年度 浪江町教職員転出者代表

浪江町立津島中学校長 耕田 祐子

学校再開のあゆみ

※「再開」…元の市町村や校舎等で教育活動を開始した。
「開校」…教育活動が可能な場所で暫定的に開始した。

田村地区	地震	旧 菅谷小	H28.3 閉校(滝根小へ) H23.4 旧們山小で開校・再開	
	緊急	旧 古道小	H29.3 閉校(都路小へ) H26.4 元校舎で再開 H23.4 旧石森小で開校	
			旧 岩井沢小	H29.3 閉校(都路小へ) H26.4 元校舎で再開 H23.4 旧石森小で開校
				地震

岩瀬地区	地震	須賀川一小	H278 新校舎完成
			H238 市運動場仮設校舎で再開
			H234 須賀川二小・須賀川一中で開校

岩瀬地区	地震	鏡石一小	H262 新校舎完成
			H238 校庭仮校舎で再開
			H234 町改善センター・鏡石二小で開校

双葉地区	緊急	川内小	H244 元校舎で再開
			H234 郡山市立河内小で開校

双葉地区	警戒	櫛葉南小	H29.4 櫛葉中で再開 H25.1 いわき市中央台仮設校舎で開校
		櫛葉北小	H24.4 いわき市工場跡地の仮設校舎で開校 H23.3 臨時休業

警 戒	原発事故による『警戒区域』内
緊 急	原発事故による『緊急時避難準備区域』内 (H23.9 解除)
計 画	原発事故による『計画的避難区域』内
原 発	原発事故による影響
津 波	津波で校舎損壊
地 震	地震で校舎損壊

※ 震災当時の状況を略して表記

福島地区	地震	野田小	H26.3 新校舎で再開 H23.9 仮校舎に移動 H23.4 体育館・野田中で開校

福島地区	計画	山木屋小 H31.4 休校 H30.4 元校舎で再開 H23.4 川俣南小で開校
------	----	---

双葉地区	計画	葛尾小	H304 元校舎で再開 H254 旧三春町立要田中で開校 H233 臨時休業
------	----	-----	--

相馬地区	計画	草野小	R24 義務教育学校「いひたて希望の里学園」として 新設開校予定
		飯樋小	H304 3校合同運営により地元で開校 H244 3校合同運営により川俣町内仮設校舎で開校
		臼石小	H234 3校合同運営により川俣中で開校

伊達地区	地震	保原小	H243 新校舎で再開 H234 旧泉原小・松陽中・桃陵中で開校
		梁川小	H273 新校舎で再開 H242 仮設校舎で開校 H235 梁川中・梁川高で開校 H234 梁川中で開校

双葉地区	緊急	広野小	H248 元校舎で再開
			H238 いわき市立中央台南小で開校

いわき地区	津波	豊間小	H244 元校舎で再開 H234 高久小で開校
	原発	久之浜一小	H23.10 元校舎で再開 H234 中央台北小で開校
		久之浜二小	H23.10 元校舎で再開 H234 郷ヶ丘小で開校
	津波	永崎小	H243 元校舎で再開 H234 江名小で開校

双葉地区	警戒	富岡一小富岡校	H304 富岡校は富岡一中で開校 H239 三春町内工場跡地の仮設校舎で開校 (三春校はR44 休校予定)
		富岡一小三春校	H233 臨時休業
		富岡二小富岡校	H304 富岡校は富岡一中で開校 H239 三春町内工場跡地の仮設校舎で開校 (三春校はR44 休校予定)
		富岡二小三春校	H233 臨時休業

双葉地区	警戒	熊町小	H234 旧河東第三小で開校（会津若松市） （R44 大熊町で再開予定）
		大野小	

相馬地区	緊急	原町一小	H23.10 元校舎で再開 H23.4 鹿島小で開校
		原町二小	H24.1 元校舎で再開 H23.4 八沢小で開校
		原町三小	H23.10 元校舎で再開 H23.4 鹿島小で開校
		大甕小	H23.10 元校舎で再開 H23.4 鹿島小で開校
		高平小	H24.1 元校舎で再開 H23.4 八沢小で開校
		太田小	H24.1 元校舎で再開 H23.10 大甕小で開校 H23.4 八沢小で開校
		石神一小	H24.2 元校舎で再開 H23.11 鹿島中仮設校舎で開校 H23.4 前川原体育館で開校
		石神二小	H24.2 元校舎で再開 H23.4 上真野小で開校
		津波	真野小
	警戒	小高小	H29.4 元校舎で再開 H24.4 鹿島中仮校舎で開校 H23.4 鹿島小で開校
		福浦小	H29.4.4 校合同運営により小高小で開校 H24.4 鹿島中仮校舎で開校 H23.4 八沢小で開校
		金房小	H29.4.4 校合同運営により小高小で開校 H24.4 鹿島中仮校舎で開校 H23.10 鹿島小仮設校舎で開校 H23.4 上真野小で開校
		鳩原小	H29.4.4 校合同運営により小高小で開校 H24.4 鹿島中仮校舎で開校 H23.10 鹿島小仮校舎で開校 H23.4 上真野小で開校

双葉地区	警戒	浪江小	H238 旧二本松市立下川崎小で開校 (R24 休校予定) H233 臨時休業
		幾世橋小	H314 休校 H233 臨時休業
		請戸小	
		大堀小	
		苅野小	
		津島小	H264 旧二本松市立下川崎幼で開校 (R34 休校予定) H233 臨時休業
		なみえ創成小	H304 新設開校

双葉地区	警戒	双葉南小	H268いわき市錦町 仮設校舎で開校 H264いわき市銀行跡地の仮校舎で開校
		双葉北小	H233 臨時休業